

魔導士ルーファス 1

秋月あきら

第一話 桃髪の仔悪魔

眩しいほどに輝く青い空。

小鳥たちが元気そうにおしゃべりする、その下では。

ドカーン！！

といっぱつ魔導学院に響き渡る爆発音。

実習室からモクモクと灰色の煙が、空に向かって立ち昇っている。きつと、生徒の誰かが実習に失敗したに違いない。

このとき、魔導学院の関係者であれば、またかあゝと溜め息を吐くだろう。この手の事件を起こすメンバーは、いっつも決まってるのだ。きつと、その中のひとりがまたやらかしたに違いない。

薄暗い実習室に響き渡る激昂と情けない声。

「ルーファス！」

「ファウストせんせえゝ、ごめんなさゝい（……またやってしまった）」

「追試決定だ！！！」

こうして彼は、あのあだ名に恥の上塗りをすることになってしまったのだった。

全ての種が詰まっていた混沌。

大きな神 が世界を創造し、小さな神々がガイアに生

3 魔導士ルーファス 1

命の種を蒔いた。

ガイアと呼ばれるこの世界には、魔法を自在に操る魔導士と呼ばれる者たちが存在している。

世界にその名を轟かす魔法大国アステア王国には、魔法を教える魔導学校が存在する。

その中の一つ、クラウス魔導学院と呼ばれる学校は、現国王クラウスが国王に即位したときに一緒に建設された学校だ。

その学院は魔導を極めんとする一二歳から一八歳までの男女が通う学院である。

この学院は今年で創立八年周年を迎えることとなったのが、今この学院では創設はじまって以来の問題児を抱えていた。

それもひとりではなく、何人もの問題児がいることが問題なのだ。

問題児だけなら教員がしっかりしていれば問題ないのだが、魔導学校にはどうも変わり者の教師が集まって来るらしい。

クラウス魔導学院の中でも、とある生徒の問題児ぶりは、ヒドイ。

その生徒の生まれ持った才能か、それを直さない限りは、ずっとあの名で呼ばれるだろう。

この学院の生徒たちはその人物のことをこう呼ぶ、『へっばこ魔導士ルーファス』と。

色鮮やかなパステル色の石やレンガなどで作られた建物が立ち並び、その柔らかな色調と青く澄んだ空の下、明るい気分に

させてくれそうな町並みを舗装された石畳に沿って進むと、そこには水玉が踊る噴水が設置された広場がある。その広場を抜けたその先に、この国の最高峰　クラウス魔導学院がある。

この学院の歴史は浅いが、名門と呼ばれる魔導学院だ。

その学院内にくつもある実習室の一つで、魔導法衣をきつちりと着こなしながらも、銀髪のサラサラヘヤーを後ろで適当に束ねた長身の青年が、顔を緊張と不安の色に染めていた。

今、この青年は、黒魔術や悪魔召喚を教える黒尽くめの教師　ファウストの下、追試試験を受けている真つ最中だった。

つまり、ここにいる青年は、前回のテストで赤点を取ってしまったということになる。

そう、その追試を受けている青年こそが、先日一七歳になつたばかりの魔導士（仮）のルーファスだったのだ。

「ファウスト先生……これに火を点けるんでしたよねえ？」

「自分で考えなくては追試の意味がなかるつ（全く、世話の掛かる生徒だ）」

腕を組むファウストは深く息を落とした。彼がため息を付くのも無理はない。なにせ、ルーファスは追試の常連だ。この学院も滑り込みで入学したらしい。

次第に緊張の色が濃くなつていくルーファスはファウストが見守る中、初歩魔法で人差し指の先に小さな火を灯し、香炉に火をつけて香を焚いた。

悪魔の好む匂いが狭い部屋の中に充満していく。これで悪魔をおびき寄せせるのだ。

「ファウスト先生、あの、ここで呪文唱えるんですよね（あつ、だんだん緊張してきたなあ）」

「呪文を唱えている最中はそれだけに集中しろ。呪文とは関係のない言葉を一言でも発したら失敗だからな」

気合い一杯に腕まくりをしたルーファスは魔導書を開くと、悪魔を無償で奉仕させる為の呪文を唱えはじめた。これを唱えなければ願望を叶える代償に魂などの見返り求められてしまう。ルーファスは一字一句間違えないようにと、魔導書を食い入るようにして顔を近付け、慎重に呪文を唱えていたのが、そんなルーファスに不幸が襲い掛かったのだ。

今回悪魔を呼び出す為に使った香は、ルーファスにとって今までに使用したことなかった香だった。それが不幸を呼んだ。「……………っ!?（な、なんか身体がムズムズする）」

どうやらルーファスはこの香のアレルギーだったらしく、香炉から上がる煙を吸い込む度に全身のかゆみなどが襲ってくる。

「（も、もう我慢できない!!）……………は、は、はっくしよん!!」

やっちゃったよルーファス!

ついにルーファスは呪文詠唱中に大きなくしゃみをしてしまった。これはマズイ。非常にマズイ事態が起きてしまった。

しまったと思ったルーファスは、すぐさま助けを請うべく近くにいたファウストの顔を見たが、ファウストは苦笑を浮かべながら口元を引きつらせていた。

「ルーファス失敗だ。悪魔に憑かれているぞ、おまえ（私が付

いていながらなんたる失態だ、ククッ」

「え、ええ！ どこですか！（……これってヤバイのか？）
つまり召喚は完全に失敗したのだ。」

なにがどうなって、こうなったかというと、『は、は、は、はっ
くしょん！！』と言葉が呪文として認識されてしまったのだ。

だが、悪魔の姿は見えない。しかし、声が聞こえた。

「イエーイ！ ビビちゃんこの世界に召喚だよ〜ん！」

声の発生源がどこかと辺りを見回すが、姿が見えない。

な、なんと、悪魔の声はルーファスの影から発せられていた
のだ。しかも、その声は、若い乙女の声っぽいではないか!?

むしろ、子供っぽい。

ルーファス&ファウスト沈黙。悪魔の声にちよつと戸惑い。

まさか、いきなりハイテンションで来られるとは思ってもみな
かったのだ。この不意打ちのダメージは大きい。

そんな二人にはお構いなしで、悪魔は勝手におしゃべりをは
じめる。

「えつと、あたしの名前はシエリル・ベル・バラド・アズラエ
ル、愛称はビビ、よろしくね これでも魔界ではちょ〜可愛
い仔悪魔でちよつとは名前が知られているんだからね」

悪魔はルーファスの影の中でしゃべっているので真の姿は見
えない。そんな感じの世にも不思議なしやべる自分の影をルー
ファスは泣きそうな顔で指差した。

「ファウスト先生……どうしましょう？（悪魔ですよ、悪
魔！！）」

仔犬のような瞳でファウスト先生のことを見つめるが、ファウストはルーファスのことを莫迦にしているのか、この状況を楽しんでいいのか、口元を歪め微笑している。

「取り憑いた悪魔をどうにかしなければ、赤点決定だ（クク、さすがはルーファス、実におもしろいことをしてくれる。全く世話の焼ける生徒だ）」

口元に手を当てせせら笑うファウストは、咳払いを一つしてマントを翻し、さっさと職員室に帰ってしまった。

残されたルーファスは、大シヨック！

ルーファス的大シヨック！

まだまだ一人前とは言えない魔導士（仮）が、悪魔と二人つきり。どう対処していいものか、途方に暮れる。

「せんせえ〜……（ぐすん）」

床に膝を突き、手を伸ばすがファウストの姿はもうそこにはない。情けないとしか言いようのないルーファスがここにいた。そんなルーファスを見かねたのかどうかはわからないが悪魔が声をかけてきた。

「男の子のクセして情けないよお、アタシのパートナーになつたからにはしっかりしてくれないとあ〜（こんなのに召喚されつついてないなあ〜）」

自分の影を見つめるルーファスがぼそりと呟いた。

「……還ってくれないかなあ？」

「え、何？（還れ？）」

「あの、その、間違つて召喚しちゃったわけだし……その、え

「つと（早くどこかに行つて欲しい……ぐすん）」

「ええ〜っ、うっそ〜！ アタシのこと間違つて召喚したの？
（このアタシを間違つて召喚だなんて失礼しちゃう）」

悪魔にしてみれば間違つて召喚されるなどんでもないこと
だが、ルーファスとしては穩便にお帰り願ひたかつた。

「えつと、だから、還つて！」

「ダメだよ〜、呼ばれたからにはタダじゃ還れないね。うん、
魂とか貰わないと……」

ルーファスのシヨック！

「た、魂い〜！！（こ、殺されるの!?）」

「当たり前だよお、アタシとアナタの契約の代償は魂になつて
るんだから」

「だから、それは間違つて……（私は天に召されてしまうのか
……ぐすん）」

ルーファスは今、命の危機さらされてしまった。しかも、自
分の失態で……情けない。情けなさすぎである。

絶望の淵に追いやられ、わけのわからなくなつてしまったル
ーファスは、天を仰いで民謡を歌い始めた。

「あひるさん、あひるさん、溺れた、溺れた、ガアー（ふふ
ふ……）」

ルーファス完全の飛んでいた。帰還するのは大変かもしれない。
い。

こんなブルーになるような歌を口ずさむ廃人を見かねてか、
悪魔はため息混じりにこう言つた。

「しょーがないなあ。今回は特別に何もしないで還ってあげるよ（こんなひとから魂なんてもらったら寝覚めが悪くてしょーがないもん）」

この言葉を聞いたルーファスに生命の息吹が戻り、宙をジャンプして喜びを表現した。

「ほ、本当、ありがとう！（あ、よかった）」

「じゃあ、アタシ還るね（さつさと別の人に憑かなきゃ）」

心から安堵するルーファスに別れを告げて還ろうとする悪魔だったが……。

「あれっ？」

悪魔が素っ頓狂な声を上げた。思わずルーファスの動きも止まる。

まさか……!?

「どうしたの？ 早く還りなよ」

「えいっ！ ……あれえ？（おかしいなあ？）」

「……どうしたの？（嫌な予感がするんですけど）」

それは予感では済まなかった。

仔悪魔はさらっと爽快に言い放った。

「還れないみたい」

「……………」

ルーファスの思考一時停止。

そして、ルーファス再起動。

「……今なんて言ったの？」

「うーん、原因はわからないんだけど、あなたの身体から離れ

られないみたい（こんなこと初めてだからなあ？）」

ルーファスフリーズ。だがすぐに解凍、そして爆発。

「な、なんだって！！ 何っ還れない！！ どういうこと！！」

脳内で処理できない事柄はパニック現象を引き起こす。ルーファスはそれが特にわかりやすく外に出た。

「さっき間違つてアタシを召喚したって言ったでしょ？ きつ

とそれが原因だよ（……たぶんだけど）」

「ど、どどど、どうすればいいの？（あゝ、カミサマ私はなんて不幸なんでしょうかあゝ……ぐすん）」

「アナタとの契約内容は、アナタの魂が尽きるまで願望を叶えるというものだから……きつと、アナタが死ぬまで離れられないのかな？（……イマイチ自信ないけどね）」

「ま、マジで？（泣）」

絶望の淵へと再び追い詰められたルーファスは、独りになるうと部屋の隅に行くが、彼の影は当然彼とともにストーカーのように移動する。

部屋の隅でルーファスは体育座りをして『の』の字を涙で床に書く。 そんな彼には解決の糸口はきつと見つからない。

また歌を歌って現実逃避をはじめたルーファスの影に変化が起きた。

な、なんと影の中からピンク色をしたツインテールの髪の毛らしきものがニヨキつと生え、ぴよんぴよんと揺れ動き、しばらくして黒い物体が這い出して来た。

ルーファスは目を見張った。

「!? (マジで!?)」

ルーファスが目の前にしているものは、ツインテールで結わかれたピンクの髪の毛に、黒い生地フリフリレースのついたゴスロリ服。いや、若干パンクかも、というか 靴の底は高い。というか、ルーファスの理解の範疇を超えている格好だったことには間違いない。

理解をできないファッションにルーファスは啞然とした。そもそもルーファスのファッションセンスは、私服に着替えるのめんどくさいという理由で法衣ばかり着てるような感じなのだ。

異文化に驚いているルーファスに声がかげられた。

「っもう、シヨ気ててもなんにもならないでしょ? (涙いっぱい流して、子供じゃないんだから)」

あどけなさの残る一三から一五歳くらいの美少女の脚が、短めのスカートからスラリと伸び、仁王立ちを作っている。これはルーファスにとって新たなショックだった。

「君が悪魔? (人形みたいに可愛いけど……どう見てもお子様)」

今ルーファスの前に立っているゴスロリ少女が悪魔の真の姿だった。

「だから、アタシはちょく可愛い仔悪魔のシェリル・ベル・バラド・アズラエル。愛称はビビ、歳は今年で四二六歳、えっと好きな食べ物は人間の魂とチョコも好きだよ、甘いやつね、そ

れから、それから、(えーっと……)」

こんな悪魔を目の前にしてルーファスの口は思わずツルっと滑った。

「こんな子供に魂取られるなんて、ヤダよお〜(大泣)」

「子供とは失礼ねえ、それでもアナタより何十倍も生きてるだから(アタシから見ればアナタの方がよっぽど子供よ)」

ちなみにこの悪魔はルーファスの約二五倍生きている。

「私より長生きしてるなら、還る方法探してよ」

「だから、アナタの魂を全部貰うまで還れないって(たぶんだけどさあ)」

悪魔はそれを実際にわかりやすく見せるため、ルーファスから遠ざかろうと離れたが、六メートルくらいのところから前に進めない。足は動いているのに前に進まないというパントマイムみたいな現象に襲われた。

「わかった？ これ以上は進めないの(……本当は無理すればもうちょっと行けそうだけど、アタシの存在が危うくなりそう)」

ルーファスは首を縦にこくこくと頷いたあと、悪魔から離れるようにして急にダッシュした。

「あうっ！(いきなり動かないですよ！)」

悪魔の身体はルーファスの動きに合わせて引つ張られた。

「……本当だ」

「『本当だ』じゃないでしょ、いきなり動かないですよ、ビックリするでしょ？」

「ごめん……でも、困った（ホントどうすればいいの？）」「
まだまだ、未熟な魔導士（仮）ルーファスには本当にどうす
ればいいのかわからなかった。しかし、方法がないわけではな
い。」

「（この子を消滅させれば……でも……）」

この悪魔を消滅させればルーファスは無事解放されるが、ル
ーファスにはできなかった。消滅イコールそれは相手を殺す
ということになる。

もともとルーファスはそんなことのできる人間ではなかつた
し、それにこの悪魔の見た目が人間と全く同じでしかも少女だ
ったことが余計にルーファスに戸惑いを覚えさせた。

しかし、相手は真正正銘の悪魔だった。

「魂全部くれればきつと嫌でもアタシはアナタから離れること
になると思うから、よろしくね」

少女は本当の悪魔の笑みを浮かべた。その笑顔は激マブだが、
騙されてはいけない。相手はルーファスの魂を取ろうとしてい
るのだ。

少女といっても相手は真正正銘の悪魔と自称しているので、
ルーファスが相手を消滅させようとしても返り討ちにされそう
な気がする。

肩を落とし、ついでに暗い影を落とすルーファスの肩をポン
と軽く叩く悪魔。

「外に出てると疲れるみたいだから影の中に戻るね」

「あ、うん（どうしよ）、どうしよ、どうしよ（）」

『どうしよ』で頭の中いっぱい、ついでに気持ちいっぱい
いっぱいルーファスは、気のない返事しか返せなかった。今
の彼はそーとー追い詰められている。

影の中から声がした。

「あ、そうだ、アナタの名前聞いてなかった」

「え、私、私の名前はルーファス」

「ルーファス、名前は結構カッコイイね。じゃあ、ルーちゃん

”ね、アタシのことはビビって呼んで”

「……あ、うん」

そんなこんなで、この日からルーちゃん&ビビの“被う”か
“奪う”かの奇妙な共同生活がはじまってしまったのだった。

自称ちょく可愛い仔悪魔シエリル・B・B・アズラエルは、
ルーファスの願望を叶える代わりに、それに見合ったルーファ
スの魂の一部を貰い、それを生きる糧とする。

そして、ルーファスの魂を全部使い果たせば、ビビはルーフ
アスの影から解放される……っばい。ビビ自身も確証はないが、
たぶん離れられるに違いない……と思う。

今のビビはルーファスの中途半端な召喚術のために、ルーフ
アスの影から長い間離れることができなくなってしまうていた。
影から離れると急激に体力を消耗してしまうので、六メートル
以上離れることができない。

だからビビはルーファスの影を拠り所としていて、そこから
人間界で自分の存在を維持するため、全てのモノが持っている

と云われる生命の源『マナ』を貰っている。

マナの語源はこの世界の古代語で、『名誉』や『威厳』といった意味合いの言葉である。

今この世界でルーファスの影を拠り所としているビビは、そのために影から出ることやルーファスの身体から長時間離れることに制限ができてしまっているのだ。

そんなわけで二人は必然的にいつも一緒にいることになる。

自宅のソファーらしきものに腰を掛けるルーファス。

“らしき”というのはこの部屋が散らかり過ぎていて、この物体エックスが本当にソファーかわからないからだ。まさに足の踏み場が無いというのは、こういう光景のことをいうのだらう。

へっばこ魔導士ルーファスの名を大人から子供、お隣さんの猫まで(どこの猫だよ)知らぬ者はこの国にはいない。そんな彼のへっばこぶりと部屋が汚いのはきつと何か関係がある。つまりズボラ。

ソファーに腰掛けてうとうとするルーファスは、昨日から今日の昼間ちょい過ぎまで考えていたことを、深く、深く考える。そして、深く考えすぎて、眠くなって寝る。

ガクッと首が動きパツと目を覚ます。

「(……寝るところだった)」

寝そうになってどうする。深く考えるほどの難題があるのではないのか？

ルーファスは昨日から仔悪魔ビビを抜く方法を一生懸命考え

たのだが、ビビの存在を消滅させる方法は浮かんでもそれ以外の方法は全く浮かばなかった。というか、たぶんルーファスの力では消滅させる前に、返り討ちに遭いそうだ。なんだって、相手は自称ちょく可愛い仔悪魔なのだから、悪魔には違いない。悪魔の見た目は普通の少女と何ら変わらない。そんなビビをルーファスは消滅させることはできなかった。

再び深く深く考えるルーファス。そして、また深く考えすぎて、深い眠りが……。

じつはこのソファア、すつげえふかふかしていて眠りを誘う魔のソファアだった。実際ルーファスはこのソファアで寝てしまうことが多い。

ガクつとルーファスの首が曲がり、すやすやと静かな寝息が聞こえてきた。ルーファスは完全にソファアの魔力に負けたのだ。

そんな至福の時を味わっているルーファスの安眠妨害をする者がいた。この家の奇妙な同居人だ。

「ねえルーちゃんお腹空いたよお」

子供のようにボカスカと両手でルーファスを殴り喚く仔悪魔ビビ。彼女は今すつごくお腹が空いていた。

お腹が空いたというのは人間が食するような食物を欲しているのではなくて、魂を欲しているのだ。

ビビは人間が食べるような食べ物食べて栄養を摂取することもあるが、それ以外に魔力の源として人間の魂を必要としている。人間の魂を喰らうことによりビビは、強力な魔力や若さ

を保つことができるのだ。

「お腹空いたよあゝ（もう死ぬうゝ）」

近くで喚かれたルーファスは眠たそうに目をこすりながら返事をした。

「もうあ、ちょっとは寝かしてよ（昨日から全然寝てないんだから）」

昨晩はビビを抜う方法を考えて過ぎて眠れなかったのではない。ビビのことで眠れなかったのは変わらないが、その理由はしょーもないものだった。

「別に寝なくてもいいじゃん、アタシなんて寝なくても平気だよー！」

「ビビは寝なくても平気かもしれないけど、純人間の私は寝ないと持たないの（……昨日から、ずーっと元気なままだよな、この子は……）」

不眠の理由、それはビビの遊び相手として一晩中付き合わされたからだ。この悪魔ビビは寝なくても平気らしい。

「お腹が空いたあ、お腹が空いたあ、お腹が空いたあゝ！！」
「……見た目と一緒に性格も子供」

「だから、子供じゃないって言うてるでしょう！（これでも四二六歳なんだから）」

ビビは頬つぺたを膨らませて顔を真っ赤にした。この仕草は子供だ。いくら四二六歳だろうが、ビビは子供としか言いようがなかった。

「頬つぺたを膨らませる仕草は十分子供だと思うけどな（どっ

からどう見ても、可愛い女の子だもんな」

「子供じゃないもん（友達とかにも子供扱いされるけど、立派な悪魔なんだから）」

ビビは悪魔友達からも子供扱いされているらしい。

「そうやって、拗ねてる感じも子供っぽいよ」

「もお、うるさいなあ！」

「そうやって、怒るのも子供っぽい」

「しつこい！」

ルーファスはちっちゃくて可愛い女の子をイジメるのが意外に好きだったりした。断っておくがルーファスはロリコンではないのでご注意を。

ビビのお腹がぐうぐうと鳴いた。それにつられてかルーファスのお腹もぐうぐうと鳴いた。

同時にお腹を擦る二人。

「お腹空いたよお」

「……うゝん、たしかにお腹が空いたね（どうしようかな？）」

「この際魂じゃなくてもいいから、何か食べ物調達しに行こうよお（本当は魂の方がエネルギーになるけど……）」

「えつと、じゃあ市場にでも行こうか？」

「大賛成！」

笑顔を浮かべ両手をうれしそうにあげるビビの無邪気な姿は、人間の魂を喰らう悪魔になって絶対見えなかった。ここにいるのはあどけなさの残る“四二六歳”の少女だ（笑）。

悪魔がこんな少女だからこそ、ルーファスは余計に消滅させることはできなかつた。

ルーファス宅からバザールと呼ばれる市場までは少し離れているので、そこに行くために乗合馬車を使用する。

この世界には空を飛ぶという魔法もないこともないが、その魔法は高度で体力などのエネルギーを多く使用するために移動手段としては実用的ではない。

狭い馬車に揺られるルーファスの横にはビビがいる。つまり、言うまでもないが影から出ているということ。

ビビの見た目は少し目立つ服装をしているものの、そこらにいる女の子となんら変わりもない。

馬車の中には数人の客が乗っているが、ビビのことは少しは変わった服を着ているとか可愛い女の子だなと思うかもしれないが、それ以上は気にも止めなかつた。ある人物がこの馬車に乗り合わせるまでは……。

この乗合馬車は決まつた停車場で客を乗り入れるが、道ばたで乗り込むことも可能だつた。

馬車が緩やかに止まつた。ここは停車場ではない。

空色のドレスを着た少女が差していた日傘を閉じて車内に乗り込んで来た。生つ粋なお嬢様のようだ。

馬車の出入り口には乗務員がいて、乗つたらすぐに行き先をその人に言つて料金を前払いする仕組みになっている。

「……魔導学院まで」

ゆっくりとした口調で、透き通るような、そこに無いような声色だった。

それに対して乗務員が料金を言う。決まった停車場所以外で乗った場合、料金は客が乗り合わせた前の停車場から、客が言った停車場所までになっている。

【御者】「一六ラウルです（いつも、ここで乗るんだよなこの子）」

空色のドレスを着た少女は、硬貨を乗務員の手のひらの上に落とすようにして料金を支払った。まるで魔法で硬貨を出したように軽やかな手つきだ。

馬車はすでに再び走り出しており、ガタガタと揺れている。馬車の中には席が設けられていて、そこに座りきれない場合は立って乗る。

席はまだ空いている。

が、空色のドレスの少女はガタガタと揺れる車内の中を立っていた。しかも、ただ立っているだけではない。この少女はある人物のことをずうーっと凝視している。その瞳に映るルーファスと五芒星。

無表情の顔がルーファスのことをずうーっと見ている。ルーファスもその人物のことをずうーっと見ている。二人の間には奇妙な空気が流れている。

そして、空色のドレスを着た人物が口をゆっくりと開いた。

「……ひさしぶり、へっほこくん（ふにふに）」

この言葉を発した一瞬だけ、冷めたような目をして口元が少

し歪んだ。ルーファスを少しバカにしているような態度だった。そして、すぐに無表情に戻る。

ひさしぶりと言われたルーファスは当然相手のことを知っている。この人物の名前はクリスチャン・ローゼンクロイツ。ルーファスが魔導学園に通っていたところからの知り合いで、今も一緒にクラス魔導学院に通う同級生で、しかもクラスが一緒だったりする。

そして、もうひとつ。

「こつちこそひさしぶり（今日学校休みなのになんで学院に行くんだろ？）」

「なんで学校に行くのか聞きたい顔をしているよ。実はね、出席日数が足らなくて進級できないらしい……ちよつと自分に苦笑（ふ〜）」

ローゼンクロイツは口に手を当て苦笑するとすぐに無表情な顔に戻った。そして機械のような正確な歩調で歩き、ルーファスの横の席に座った。

ルーファスの右手にはビビが座っていて、彼女はルーファス越しに覗き込むような姿勢をとってローゼンクロイツを一瞥したあと、ルーファスに尋ねた。

「知り合いなの？（電波系って感じがするな〜、ちよつと）」
「小さいころからの知り合いで、今も同じ学校に通ってる（クラスじゃあんまり見かけないけど）」

ローゼンクロイツは学校には来てはいるが授業には出ていない。そのため授業の出席日数が足らなくて進級が危うい。だが、

ローゼンクロイツは勉強や魔法を使う能力は生徒の中で一、二を争う程で、授業に出ないで魔導の研究を独自にやっていて功績も納めている。ルーファスとはそこが違う。

ローゼンクロイツは突然ぼそりと口を開いた。ローゼンクロイツの思考は天才肌で少し常人と違っている。そして、勘が鋭い。

「そうだ、忘れてた（ふにゃ）」

「何を？（……ローゼンクロイツの思いつき発言は、いつも何かが起こる前触れ）」

嫌な顔をするルーファスの心臓はバクバクだ。彼の嫌な予感によく当たる。それは自分でも自覚している。

「嫌な顔、しない、しない、そんな顔していると嫌なことが本当に起こるよ（ふにふに）」

「だって、君の思いつき発言は何かが起こる前触れでしょ（しかも百発百通だからね）」

「そうなの！ それは知らなかった……（ふにい）」

「自覚なかったの？」

「……ウソ（ふっ）」

二人の会話をビビは珍しそうに見ていた。特にローゼンクロイツのことを。

「（不思議ちゃんオーラが出てるよ）あのさ、そっちの人の名前聞いてないんだけど？」

「人の名前を聞くときは、自分から名乗るもの……無礼者（ふっ）」

嫌な顔を一瞬してすぐに無表情に戻る。どうやらこれは彼の特性らしい。

「ねえルーファス、この人性格悪いでしょ？（絶対そう！）」
「そ、それはノーコメント（ほ、本当はすごく〜性悪だよ）」
苦笑いを浮かべるルーファスのことをキツと睨んですぐに無表情に戻るローゼンクロイツは、再び思い出したように口を開く。

「そうだ、それ悪魔（ふあ〜）」

狭い馬車の中、しゃべり声は十分響き渡る。

一同沈黙。

ややあつて、同乗していたおじさんが声を荒げた。

【おじさん】「悪魔だつてー！」

これを合図にビビ及びルーファス&ローゼンクロイツ以外の乗客三名と乗務員がビビとできるだけ距離を空けた。

この国では魔法は普段の生活でも珍しいものではない。だが、悪魔となれば話は別だ。恐れられる対象なのだ。

恐れおののく人たちを見てビビは顔を膨らませながら一歩前へ出た。

「なによ、悪魔だからどうしたつていうのよ！」

怒鳴り声を聞いて余計に震え上がる人々。こんな状況を打開すべく、ルーファスが立ち上がった。

「え〜、あのですね、みなさん、ほら、見てください。ただの可愛い人間の女の子ですよ。どこをどう見たら悪魔に見えるつていうんですか？」

こんな説得ではうまくいかない。若い女の人が鋭い指摘をしてきた。

【町娘】「だって、その子自分で『悪魔だから』って……（そう言っただわよ絶対!）」

「え、それはですね。この子ちょっと妄想癖が……」

「う、っ……ボディブロー」

ルーファスの腹に一発くらわせビビはもう一歩前へ出る。

「アタシは真正正銘のちよ、可愛い悪魔よ、それが何か？」

ビビの身体が急に中に浮いた。ルーファスに抱きかかえられたのだ。

そして、馬車の外へ飛び出す。

何事もなかったように走り去っていく馬車を見送りながら、ルーファスはビビを地面に下ろした。

「普通の人は悪魔って聞いたら怖がるんだから、少しは隠すとかしてよ」

「別にいいじゃん、怖がらせておけば」

「……私とビビは今や運命共同体なんだから私に迷惑かかるでしょ？」

「私だって迷惑してるんだから。ルーちゃんに呼び出されて……もう、いいよ！（私がルーちゃんに迷惑かけて何が悪いっていうの?）」

顔を膨らませながらビビはズカズカと歩いて行ってしまった。だが、少し行ったところから一向に前へ進まない。

動作的には歩いている動きをしているが、まるでパントマイ

ムのように前には進んでいない。これ以上はルーファスと離れられないのだ。

クルッと振り返り、顔を赤らめて恥ずかしそうにルーファスのもとへ戻ってきたビビは言った。

「もう少し、一緒にいてあげてもいいかな……」

ルーファスはやれやれと両手を軽く上げてため息を付いた。

「はあ、子供だよねえ、ホント」

「だから、子供じゃないって言ってるでしょ……!!」

ポカスカと殴られるルーファス。彼とビビの微妙な関係はまだまだ続きそうだ。

影から出てきたビビはどこにでもいる女の子と変わらない。

そして、今はそこらにいそうな恋人だった。

「ねえ、ルーちゃんあれ食べたい」

ビビの指差した先には果物がたくさん置かれた屋台がある。

ここバザールには、数多くの食料品が取り揃えられていて、魚などは生け簀に入れられ新鮮なまま売られている。

ルーファスはビビの伸びた指の先を目で追って、そこにあるものを見た。

そこには果物屋さんがあるが、ビビの指はもつと的確に示さ
れていて、それを見たルーファスの表情は曇り空のようになってしまった。

「……ちよつと高いかな（いち、にい、さん、よんつて）」
指の差された果物は手のひらに納まるくらいのピンク色をし

た丸い柑橘系の食べもので、名前をピंकスパイスというが、正式名称は別にある。『ラアマレ・ア・カピス』という。意味は古代語で『神々のおやつ』という。

ビビはピंकスパイスを見てはルーファスの顔を見るという行動を何度も繰り返している。

「ラアマレ・ア・カピス食べたいなあ〜（口に入れた時の脳みそがスパークしそうな感じがたまらないんだよねえ）」

「でも、ピंकスパイスって高いんだけど」

ピंकスパイスの前にごんまりちよこんと置いてある値札には、ごんまりしてない値段が書いてある。

ー〇〇〇ラウル。

「ー〇〇〇ラウルくらいいいじゃん」

「ー〇〇〇ラウルもあつたら、ーラウルチョコが一〇〇〇個も買えちゃうよ（うめえばうだと五〇〇個だよ）」

「じゃあ、ーラウルチョコ一〇〇〇個でもいいよ（アタシチョコ好きだし）」

「はいはい、別の見に行くよあ〜（チョコに一〇〇〇ラウルも出せないよ）」

ルーファスはビビの腕をガシツと掴むと、引きずりながら別の場所へ移動しようとした。しかし、ビビは地面に根を下ろしてしまったみたいとその場を動かない。

「ほら、行くよあ〜」

「ラアマレ・ア・カピス食べたいなあ〜」

「まだ言ってるの？（はあ、どうしようかな？）」

ルーファスは財布の中と相談することにした。

財布との会議を終えたルーファスは結論を出した。

「無理無理、買いたいものがあるから、絶対無理」

「ルーちゃんのばかぁ（ケケケケケチ！）」

そんなことを言われても、財布と相談した結果なのだから仕方ない。

ため息を付きながら財布の中味を見るルーファスの傍らで、もうひとりルーファスの財布の中味を覗く人物がいた。

【???】「こんな財布の中味じゃピンクスパイスは買えないね（ふ〜）」

この声に驚いてルーファスは、すぐに横を振り向いて、すぐに見なかつたことにして、すぐに嫌な顔をした。

「どうしてローゼンクロイツがいるのさ」

ルーファスの財布を覗き込んでいたのは、なんとローゼンクロイツだったのだ。

「どうしてボクはここに存在してるのだろうね、実に興味深いよ（ふにふに）」

己の存在理由を問うローゼンクロイツの回答は、ルーファスの問いに対して大きく的を外していた。

今の今まで思想に耽っていたような感じのローゼンクロイツは、もう存在理由を考えることをやめたのか、正確な歩調でビビの目の前まで行き、ビビの瞳を見つめながらルーファスに話しかけた。そう、ビビを見つめながらルーファスに。

「ところでルーファス、知ってるかい？（ふあふあ）」

「なにを？」

「この国の法律のひとつにこんなのがあるよ。『悪魔及び悪魔に類する存在は、許可なく魔導関連の施設以外に現れてはならない。』（ふーっ）」

つまりビビがここにはならないということをお願いの
だろう。

ローゼンクロイツの態度と口調に、ビビは少しケンカを売られて
いるように感じ、そのケンカを買ってしまった。

「アタシに今すぐここから消えろって言ってるの？ それは無理。
だって、アタシルーちゃんの影に縛られて、ルーちゃんの傍から離れられないんだもん」

「……それは困った。けれど、ボクが 視る ところによると、
ルーファスの影の中に入れるみたいだね（ふにふに）」

エメラルドグリーンの瞳の中に浮かぶ五芒星。ローゼンクロイツの瞳は魔眼と呼ばれるもので、その瞳で見つめられている
ビビは、自分の全てを見透かされているような気分だった。

「だからなに？」

「影の中でずっとじっとしていれば、法律を犯すことにならな
いよ（ふあふあ）」

「そんなの絶対イヤ。影の中でじっとしてるだけなんてアタシ
には耐えられないもん（今でも、ルーちゃんから離れて自由に
行動できなくて困ってるのに）」

「それじゃあ仕方ない。実はねボク、将来、魔導学院を卒業し

たら政府の役人になろうと思っっているんだよ（ふあふあ）」

突然将来の夢を語りだしたのかと思ったら、ちよつと違つた。大氣中に散らばっていたマナがローゼンクロイツの周りに集まつている。マナの集合、つまりローゼンクロイツは魔導を使つ気なのだ。

「法律を犯す者は見過ごせないね（ふーっ！）。それにキミには、邪神七将の相が見えるよ。放つて置けば、きつとトラブルを起こすに違いないね（ふにふに）」

邪神七将と言えば、悪魔の中でもトップクラスの者たちだ。その者たちの相が出ているとは、ビビが破壊の限りを尽くし、人々を墮落させるとも言うのか？

悪魔とは本来そのような存在だが、まさか自称ちよー可愛い仔悪魔ビビがそんなことするわけない……よね？

「アタシのこと殺る気なの？（そつちがその気なら、アタシだつて悪魔の意地があるんだから！）」

ビビちゃんはヤル気満々だつたりしちやつたりした。

「もちろんだよ……殺るよ（ふっ）」

殺伐とした空気が辺りに立ち込めはじめ、ビビとローゼンクロイツに挟まれたルーファスは、背筋に冷たいものを覚えながら必死に止めに入った。

「まあまあ、二人とも、ケンカは良くないと思うよ。ほら、近くのカフェにでも行つて仲良く話し合おうよ、ね？（……なんというのは、二人の性格から考えて無理かも）」

ルーファスの頭の中では、二人を置いて『逃走』という選択

肢が有力だった。しかし、その選択を選ぶことはできない。なぜなら、ルーファスとビビは『どこに行くにも一緒』だからだ。

困り果てるルーファスなんて他所に、ビビとローゼンクロイツはすでに戦闘の構えを取っていた。

先に仕掛けるのは、どちらか!?

ローゼンクロイツの瞳の奥で、五芒星が妖しく輝いた。

「……捕捉（ふっ）」

この言葉が発せられた一瞬だけ、無表情な顔についた口が歪み、ローゼンクロイツは片手を大きく伸ばしてビビに向けた。

その刹那、振り動いたローゼンクロイツの指先から、光のチエーンがビビに向かって放たれたのだ!

ライトチエーン 都市警備隊も犯罪人を捕らえるときによく使用する魔法だ。

金色に輝く光の鎖は、鞭のようにしなりビビの首に蛇のように巻き付こうとする。

「ちよつと待って!」

声を張り上げながらビビの前に立ったルーファスの手には、ローゼンクロイツの放ったライトチエーンが力強く握られていた。

自分に背を向け立つルーファス。その背中はずいぶん、ビビは少し驚きと嬉しさを覚え、瞳を輝かせた。

「……ルーちゃん（アタシを守ってくれたの?）」

「ローゼンクロイツ、君は私の友達だけれど、ビビに手を出す

のは……出すのは……え〜と、ほら、こんな可愛らしい女の子に手を出すなんて道徳心に反する行動だよ、ねっ?」

苦し紛れに笑うルーファスの背中を見て、やっぱりビビはさつき思ったことを廃棄処分した。

「……ルーちゃん（カツコ悪すぎ）」

ライトチエーンを消し去ったローゼンクロイツは、ルーファスのことを見据えながら演技っぽく言ってみせた。

「可愛らしい女の子じゃないよ……こ・あ・く・ま（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。相手を小ばかにしているとしたか思えない態度だ。

ムカーッと脳天に来たビビが一步前へ出ようとしたが、それをルーファスの片腕が静止させた。そのままルーファスは後ろを振り向いてビビを見ることなく、ローゼンクロイツの顔をいつになく真剣な表情で見つめていた。

「ビビが傷つかずに済む方法はないの?」

「あるよ（ふあふあ）」

「はっ!?!」

思わぬローゼンクロイツのあっさり回答に、ルーファスは今日こそローゼンクロイツをぶん殴ってやるうと思っただが、絶対に勝ち目がないのであっさりやめた。それが正解。

「方法ならあるよ。はい、これ（ふあふあ）」

「なにこれ?（なにかの免許書かな?）」

ローゼンクロイツに手渡された謎カードをルーファスはまじ

まじと見つめた。そこにはいかにも隠し撮りされた、素のときのビビの顔写真が貼られ、なにやら『悪魔滞在許可書』と書かれている。

少し前にローゼンクロイツが言っていた言葉を思い出してみよう。

悪魔及び悪魔に類する存在は、許可なく魔導関連の施設以外に現れてはならない。

許可なく。

そう、許可なく。

「ボクが書類を書いて、役所でその仔悪魔の滞在許可書もらって来てあげたよ（ふにふに）」

「ありがとうローゼンクロイツ。やっぱり持つべきものは友だよね！（やっぱりローゼンクロイツは頼りになるときは頼りになつよね、うんうん）」

とルーファスは心の底からローゼンクロイツに感謝したが、ビビは。

「（だったら、なんでわざわざアタシにケンカ吹っかける真似したのよ。最初っから許可書渡してくればいいじゃん）」

と思ったが、ルーファスに迷惑をかけるのも嫌なので、そのことはローゼンクロイツに言わずに、ぐぐぐっと思いつきり胸の奥底に嚴重に鍵をかけて押し込んだ。無理やり。

これで用事も済んだのか、ローゼンクロイツは踵を返してルーファスたちに背を向けた。

「……じゃ（ふにっ）」

短く挨拶をしたローゼンクロイツは、背中越しに手を振って立ち去ろうとしたのだが。

「は、は、はつくしゅん！」

可愛らしいローゼンクロイツのくしゃみを聞いたルーファスは、口を半開きにして全身の血が足元に下がっていくのを感じた。ローゼンクロイツのことを知る者であれば、誰もが知っている最悪の事態が起ころうとしていた。

目を丸くするルーファスは脳ミソをフル回転させて、現状を分析した。

まず、ローゼンクロイツの頭に、なぜか猫耳が生えた。

おまけに、しつぽまで生えた。

そして、意味不明な言葉を発する。

「ふあふあ〜っ」

空を漂う羊雲のような声を発したローゼンクロイツ。これぞまさにローゼンクロイツの猫返りだ！！

目の前で猫人に変わってしまったローゼンクロイツを見て、一番驚いたのはビビだ。

「なに、なにが起きたの？」

「とにかく逃げるよ！」

「えっ？ なんで？」

「これはローゼンクロイツの発作なんだ。トランス状態でなにを仕出かすかわかったもんじゃないよ！（こんな人の多い場所で『ねこしゃん大行進』なんてされたら最悪だよ）」

ローゼンクロイツの猫返りとは、一種の発作のようなも

のである。いつ起こるともわからないその発作を起こすと、ローゼンクロイツの身体は猫人へと変身してしまうのだ。

しかもだ。

猫人となったローゼンクロイツの口元が一瞬だけ歪み、すぐに無表情になる。

「……ふっ」

次の瞬間、ローゼンクロイツの身体から大量な“ねこしゃん人形”が飛び出した。しかも、ねこしゃんは止まることなく放出され続けている。

『ねこしゃん大行進』発動！！

猫返り 時のローゼンクロイツは記憶がぶっ飛び、トランス状態になる。人間の言葉も通じないし、意味不明な破壊活動も行なっちゃうのだ。つまり、手に負えなくなる。

ローゼンクロイツの身体から放出される大量のねこしゃん人形。それは止まることなく、休むこともなく、二足歩行でそこからを元氣いっぱい走り回る いや、暴れまわる。

バザールで買いい物をしていた人たちは、突然の『ねこしゃん大行進』に驚き、辺りは一瞬にして大騒ぎだ。

買いい物袋が宙を飛び、色鮮やかな果物が踊りだし、鮮魚が生け簀から飛び出して宙を泳ぐ。

そして、最悪なのは、勝手気ままに走り回るねこしゃんたちは、何かにぶつかると『にゃん』と可愛らしく鳴いて、手当たり次第に大爆発を起こす無差別攻撃魔法であることだ。

しかも、一匹目がど〜んと大爆発すると、爆発が爆発の連鎖

を呼んで、そこら中で大爆発が起こってしまった。

辺りは一瞬にして惨禍となってしまった。

頭を抱えるルーファス。

「私たちはなにも見なかったことにして、逃げよう」

「そうだね」

しみじみビビも頷いた。

きつと、そのうち騒ぎを聞きつけた都市警備隊が駆けつけて
どうにかしてくれるだろう。たぶん。

ルーファスはこの場からこっさり逃げようと、足を一歩踏み
出そうとしたのだが。

「ま、マジで!？」

上げたルーファスの足の下で、微笑むねこちゃん人形。目と
目が合い、芽生えるトキメキ。そして、恋(?)は激しく燃え
上がった。

にゃ〜ん といっぱつ大爆発!

そして、白煙とともにあたりは真っ白の世界に包まれたのだ
った。

「ルーちゃん!！」

ビビの叫びが虚しく木霊した。

ルーファスはどうなってしまったの!?

「げほげほっ、大丈夫(魔法壁張らなかつたら大怪我してたか
も)。それよりも早くに逃げよう」

「ぜんぜん無傷で無事だったみたいだ。」

買い物客も店員も、とっくに逃げしまっている。逃げ遅れた

のはルーファスとビビだけだ。

今度こそ逃げるルーファスとビビの後ろで、ローゼンクロイツは駆けつけた都市警備隊をコテンパンにしていたのだった。

猫返り のローゼンクロイツは、いろんな意味で最強なのだ。

逃げながら走る最中、ビビは不思議な顔をしてルーファスの顔を覗き込んだ。

「あの人なに者なの？（意味不明）」

「私に聞かないで（長い付き合いだけど、未だによくわかんないなあ）」

このあと、騒ぎのあった場所から離れたルーファスたちは、別の場所で結構な量の買い物をしたのち、二人はまた乗合馬車に乗って家路についたのだった。

それは、ビビがルーファスに召喚される少し前の出来事だった。

渦巻き飛び交う歓声の中に、少女の名前を呼ぶ声も混じっている。

その名を呼ばれた少女は、いつもどおりの笑顔でステージに降り立った。

「みんな久しぶり、元気にしてた？（久しぶりだけど、みんないい顔してる）」

薄明かりのライブハウスの中でも、ステージからは来てくれている、みんなの顔がひとりひとり見えてしまう。

ライブをはじめた頃は、指で数えられる数しかいなかった観

客も、今じゃ口コミで広がってライブハウスいっぱい観客が入ってくれるようになった。

“家庭の事情”でここしばらくライブを開くことができなかつたが、常連さんの顔もちらほら見える。

歌がはじまるまえから、みんなノってる。熱気に押されそうになるが、今日は気付けのラアマレ・ア・カピスを楽屋で食べてきた。ラアマレ・ア・カピスを食べて、脳ミソがスパークしていい感じだ。

マイクスタンドの前に立ち、ビビは満面の笑みを浮かべる。自分の中に溜め込んでいる嫌なこと、自分を縛っている鎖を断ち切って、全部、吐き出してしまおう。歌にして。

演奏がはじまり、ビビが大きく息を吸った。

歌声は歓声なんかに負けないほどに、ライブハウス全体に響き渡った。

歌う時は、いつも完全燃焼。楽屋でぶっ倒れることなんてしよっちゆうだ。歌い終わってすぐに足から崩れちゃったこともある。けど、歌っている最中は、みんなから力を貰って絶対に歌いきる。

ノリノリで歌っていたビビの視線が、後ろの壁の近くで背筋を伸ばして立っている男たちに向けられた。きつちりとした正装をして、この中にまつたく溶け込んでない。

観客とは思えない。

歌に集中しようとするが、ビビの気持ちはすっかり醒めてしまった。後ろに立っている男たちが気になってしかたない。

「……きつと、アタシを連れ戻しに来たに決まってる」

曲目は全て終わり、はじめての不完全燃焼。

こんなにも気分が悪いことはない。

そして、もっと悪いことに、謎の男たちがステージに向かって歩いて来るではないか!?

【謎の男】「シェリル様を捕らえろ！」

謎の男の掛け声に合わせて、残りの男たちが急に素早く動き出して、ステージに上って来た。

シェリルという名は、ビビのファーストネームだ。ということは、やはり男たちの目的はビビだったのだ。

「まあ、やっぱりアタシを連れ戻しに来たのね（せっかく外の世界に逃げれたと思ったのに）」

【謎の男】「シェリル様、どうか城にお戻りください」

「イヤったら、イヤ。また連れ戻されるなんて絶対イヤ」

ステージからジャンプしたビビは、素早い身のこなしで観客の中を掻き分けて進む。その後ろではビビを連れ戻しに来た男たちが、観客たちにタコ殴りにされていた。

後ろを振り返ったビビは、タコ殴りにされている男たちを見て無邪気に笑う。そして、自分の仲間たちに感謝した。

「みんなあーっ、ありがとね」

ライブハウスを出る瞬間、ビビの鼻を甘い香りが突いた。

ビビにはすぐにわかった。その香りが、別の世界から香ってきていることを。

「……召喚術（向こうの世界に行けば、逃げ切れるかも）」

別世界の扉がすぐそこにある。

「誰かがアタシを呼んでいる」

そして、ビビは歪曲した空間の中に飛び込んだのだった。

帰りの馬車では何事もなく、一安心で家についたルーファスは安堵のため息をもらした。

「ふう〜、やっぱり家が一番落ち着くなあ〜」

「(年寄りくさいセリフ)」

注意しておくがルーファスは数日前に一七歳になったばかりだ。

「台所に行くついでに東方のおみやげでもらった緑茶でも飲もうかな」

「(緑茶ってしぶい紅茶のイトコみたいなのでしょ、やっぱり年寄りい〜)」

ちよつと軽蔑の眼差しで見るビビのことになど全く気づかず、ルーファスは買い物荷物を持って台所に行ってしまった。ビビは当然ながらそのあとをめんどくさそうについて行く。

台所に着くとルーファスは買ってきた食べ物などをしまったりしはじめた。その間ビビは食卓の椅子に腰掛けながら足をぶらぶらさせてひまそうに待っている。すると、そんなビビの目の前のテーブルにパンツと大きな魚が置かれた。

「この魚がどうかしたの？」

目を丸くしているビビの前に置かれた魚は、ルーファスが値切りに値切って買った大きめの生きた新鮮な魚だ。

魚屋の若主人曰く、その二人の買い物客が、彼女に尻を敷かれていたカップルのようであったとが語っている。

丸々生きた大きな魚をビビの前に出したのは、ルーファス的には理由がちゃんとする。

「この魚の魂食べたらしはお腹の足しになるでしょ？（我ながらいい考えだ）」

「まあ、魚の魂だつて食べれないことないけど（普通はやらな
いよ）」

のちにルーファスは人間の生贄の変わりに今回と同じく魚、それもマグロの刺身を使用したことにより大変な事件を起こすことになるのだが、それはまだまだ先のお話。

仕方なくビビは魚の魂を喰らうことにした。

ビビがゆっくりと目を瞑ると、アウトサイドとこの世界では呼ばれている、今二人がいる空間とは次元の異なつた空間に保存してあつた大きな鎌を取り出し構えた。その光景はマジシャンがどこからともなく物体を取り出すような光景に似ていた。

鎌を構えたビビの目がカツと見開かれ大鎌が魚に振り下ろされた。

鎌は魚を通り抜け、テーブルを通り抜け、何一つ傷を付けていない。鎌は物体を通過してしまつたのだ。

少しして魚から白い煙のような物が立ち上がり、それはビビの口の中にすーっと吸い込まれていった。

それと同時にビビのお腹がぐーっと鳴く。

「お腹空いた」

魚程度の魂ではビビのお腹を満たすことはできないということなのだろう。

「でも少しは足しになったでしょ？」

「少しはね。でもまだまだ足りないよ」

「あとは普通の食べ物で我慢してもらうしかないね」

「ええ〜っ！」

「しょうがないでしょ？」

「ダメ！（でも、このままじゃ……）」

ダメとは言ったものの、このままではビビは衰弱していつてしまふに違い無い、早く手を打たなくては……。

食事を終え、ルーファスはビビを連れてある場所に向かった。馬車に揺られて数十分、噴水のある円形の広場を抜けたその先にその建物はある。クラウド魔導学院。この学院はこのアステア王国一の規模を誇る魔法学校である。

ここでルーファスは魔導学院の教師であるカーシャのもとを訪れることにした。

直射日光を嫌うカーシャは学院の地下に自室を設け、ロウソクだけの薄暗い明かりの中で魔導の研究をしていた。

彼女は融通の利く合理的で利己主義で、自己中心的な美人教師として学園内で名が通っており、何か困ったこと、主に成績などで普通ならどうしようもないような問題を抱えた生徒たちが彼女のもとによく訪れる。

ルーファスとビビはその薄暗い部屋にいた。

「あのカーシャ、頼みごとがあつて来たんだけど」

ルーファスはカーシャのことを呼び捨てで呼んでいる。その理由はこの二人がただの生徒と教師に關係ではないということ、ただし、恋人同士とかいった關係でもない。二人はある意味腐れ縁といった關係だった。

薄暗い影の中に口ウソクの光がぼわあくと灯り、人の顔が現れた。その顔は白く美しかった。

&「わっ……」

ルーファス&ビビは同時に驚いた。ルーファス的には突然のカーシャの登場に驚き、ビビ的には幽霊かと思つて驚いたのだ。冷たい風がすうーつと部屋の中に吹いた。しかし、口ウソクは全く揺れていない。風が吹いたのはルーファスとビビの背中だけ。

「頼みごととはなんだ？（知らん女が一緒か……ま、まさかへつばこ魔導士ルーファスに彼女できる!?）なんてことはないな……ふふ）」

「脅かさないでよ！ 毎回そーゆー現れ方してえー」

「それよりも用件を言え、私も暇じゃない（給料が懸かっているからな……切実だ）」

「え〜と、こちらにいるのがビビ」

ルーファスはおすすめメニューを紹介する店員さんみたいに手のひらを返してビビに手を向けた。

「えっと、アタシの名前はシェリル・B・B・アズラエル、愛称はビビ、よろしくね」

可愛らしくあいさつをしたビビのことをじーっと見つめたカーシャはぼそりと呟いた。

「悪魔だな」

「わっかるうゝ、アタシはこれでも魔界ではちょゝ可愛い仔悪魔でちよつとは名前が知られているんだからな」

「わかるもなにもファウストが職員室で話していたのを昨日聞いた（ルーファスの人生は、やはり呪われている。……論文にまとめるとおもしろいかもな……へっほこ、ふふ）」

いきなりルーファスがカーシャに頭を下げた。

「お願い、どうかして！」

そんなルーファスにカーシャは、きっぱりさっぱりあっさり答えた。

「駄目だ。これは本来ルーファスの追試の一貫なので手伝うことはできない（しかも、ファウストのだからな）」

ファウストとカーシャの仲の悪さは学園内でも有名な話で、カーシャがルーファスの追試に手を貸したくない理由の九割がそこにある。

だが、カーシャは咳払いをひとつしたあと話を続けた。

「コホン、だがな、場合によっては手伝ってあげないこともない（ふふ……ふふふ）」

心の中で不敵に笑うカーシャ。善からぬことを考えているのは明々白々、お天道様も知っている。

ごくんとルーファスが唾を飲む音が聴こえた。

この時カーシャの瞳がキラリーン！ と光ったような気が

する。

「場合ってどんな場合？（嫌な予感はあるけど）」

何度も言っているような気がするが、ルーファスの嫌な予感は大抵当たる。

「ふふふ、聞いて驚け！ パラケルスス先生のホムンクルスを二体盗んで来い！！」

「はあ〜っ！！（無理）」

ホムンクルスというのは簡単にいうと人間の形をしている入れ物のことで、それをカーシャは盗んで来いと普通に言っていたのだ。

「盗んで来いと言ったら盗んで来い。そのホムンクルスを実験で使いたいがパラケルススが貸してくれないのだ（あのケチじじいが！）」

とカーシャは愚痴をこぼす。が、ルーファスは大反対だ。

「駄目、駄目、絶対駄目！！（あんな良い先生の物なんて盗めないよ）」

パラケルスス先生と言えば、優しくいつも笑顔を絶やさない人格者な先生で、ルーファスも普段から大変お世話になっている。

「ホムンクルスさえ手に入ればビビをルーファスの影ごとそのホムンクルスに移すことができる。そうすれば、ビビは身体を手に入れ、今よりは自由に行動ができるようになると思うが？（ふふ、私の研究も進んで一石二鳥）」

深く悩み苦悩するルーファスだったが、ホムンクルス強奪の

話はカーシャとビビの間で勝手に進められ、ビビは絶対にホームンクルスを盗んで来るとカーシャに約束していた。

「カーシャ、アタシ絶対ホームンクルス盗んでくるからね！」

「うむ、頼もしい娘だ」

ルーファスしばし沈黙。そして、

「なんで、勝手に話進んでるの？」

二人の女性が同時にルーファスのことを睨んだ。

「いいじゃん別にいゝ」

「ルーファスお前には選択の余地はない。選択権があるのはこのビビだ」

「……………（なんか、不公平だ）」

しかし、結局有無を言わせぬままビビはルーファスを引っ張って強引にホームンクルスを盗みに行ってしまった。

二人が部屋を出て行ったあと、カーシャは本棚から一冊の魔導書を取り出した。

「……………うむ（魔方陣を描くための水性ペンキを切らせていたな）」

コンコン！

ノックの音が聞こえ、カーシャは耳を尖らせ返事を返した。

「誰だ、鍵はかかかっていない、入って来い（あの叩き方からすると、あいつだな）」

扉を開けて入った来たのは、クリスチャン・ローゼンクロイツだった。カーシャの勘は的中した。

「なんの用だ？」

「……出席日数（ふにゃ〜）」

「わかった」

まだ、具体的な説明もないままカーシャは全てを理解し、必要な条件を提示した。

「大魔王ルシファアの羽根を奪って来い（どうせ出席日数が足りなくて私のところに来たのだろう）」

「……無理（ふにゃ〜）」

「魔導学院の出席簿を改ざんするのは容易ではない。それ相應の等価交換だと思うが？（本当はルシファアの羽根を奪って来るなど、世界を滅亡させると言っているのと同じくらいのことだがな……ふふ）」

「魔女、キミは人の足元を見過ぎだよ。下を見てるうちに、頭上から殴られても知らないよ（ふにふに）」

「私を殴れる者などいるものか」

「……それはどうかな？（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。この表情の仕方はローゼンクロイツのクセだ。

「まあ、いいだろう。今回は特別出血大サービスで、マスタードラゴンの鱗で勘弁してやろう（普通の学生なら死ぬだろうが、こいつなら平気だろう）」

「いいよ、それなら（ふあふあ）」

「商談成立だ。では、さっさと行け、私は忙しいのだクリスちゃんに構ってる暇はもうない」

「なにが忙しいのかい？（ふにゃ？）」

「ルーファスに取り憑いている仔悪魔をホームンクルスに移すため、今ルーファスにパラケルススのホームンクルスを盗み行かせているのだ」

とカーシャが説明し終わったときには、すでにローゼンクロイツの姿はなかった。説明損だ。

「……まあよかるう、さて（赤ペンキを取りに行くか）」

先ほど魔導書を読んで、これから行う儀式に必要な道具が足りないことに気が付いたカーシャは、足りない道具を探すために部屋を出た。

学園の地下から一階に上がったカーシャは、補給部のあるフロアに足を運ばせる。

一週間のはじめであるガイアに当たる今日は、一般的に休日であり、クラウス魔導学院も例外なく休校となっている。それでも教職員や生徒の中には休日登校する者も多く、廊下を歩くカーシャに何人かが挨拶をしてすれ違って行った。

挨拶をされても歩みを止めることなく、返事を返すこともないカーシャだが、その足が不意に止まった。

「ご機嫌いかがかな、カーシャ先生？」

「こんばんわ、ファウスト（お前に廊下で鉢合わせして、機嫌がいいわけなかるう）」

まだ昼下がりだが、カーシャはいつ何時でも『こんばんわ』と挨拶をする。そのことに関しては、ファウストも知っているので、わざわざ問いただすことはない。

代わりに、ファウストは決まってこう言うのだ。

「そうだ、カーシャ先生に貸した一〇〇〇ラウル、返して貰っていないのですが？」

「知らんな、お前に借りた覚えなどない（私は決して認めんぞ認めたら、負けだ）」

こうやって三年以上もの間、カーシャはファウストから借りたお金を踏み倒そうとしているのだ。

向かい合う二人の間に電気を帯びたピリピリした空気が流れる。

一歩前に詰め寄ったファウストが、いつも持ち歩いている契約書の一枚をカーシャに突き付けた。

「返済期限が二年ほど過ぎていることは、再三申し上げているのでご存知ですね？」

「記憶にないな」

「記憶になくとも、この際宜しい（シラを切られるのはいつものことだ）」

「ほう、なにをする気だ？（ファウストのManaが上昇している。なにか仕掛けて来る気か？）」

「一〇〇〇ラウルを返さぬというのなら、契約の名のもとに冥府に送って差し上げますよ」

「……………（たかが一〇〇〇ラウルで目くじらを立ておつて）」

『たかが一〇〇〇』ラウルを返さない方も、返さない方だ。

沈黙、そして緊迫。

ファウストの持っていた羊皮紙でできた契約書が風もないのに揺れた。それはまるで強風に揺れる旗のように揺れ動いた。

空気中に漂う水蒸気が氷結し、学院の廊下に薄い霜を降ろした。その発生源は、嘗て 氷の魔女王 の異名を持っていた魔女 カーシャだった。

カーシャVSファウストの構図がわかりやすく出来上がった。てしまった。

ファウスとの持つ契約書にただならぬ邪気を感じたカーシャは、氷の魔女王 ならぬ発想をした。

「……………うむ（焼くか）」

氷の魔女王 が“炎”を使う。この時点で反則ワザっぽいのが、『焼く』ということは契約書をなかつたことにするという意味だ。そう考えると、もつと反則ワザだ……というか、セコイ。

カーシャの右手が凄いスピードで動いた。

その手から放たれた炎の玉が、契約書を焼き尽くそうと飛ぶ。しかし、相手は魔導学院教員 一筋縄ではいかない。

「デウラハンの盾！（契約書を燃やそうとするとは小癪なことを考える）」

炎の玉は突如ファウスとの前に現れた魔法盾によってかき消されてしまった。

「ちつ……………外したか」

「契約書を燃やそうとした罪。契約書により制裁を下しましょう。出でよ、闇の眷属よ！！」

悪魔の笑みを浮かべたファウスの持つ契約書から、なにかが呼び出された。

威圧感を放つ存在。それは悪魔だった。契約を破った制裁として、契約書に宿っていた悪魔が、この世に召喚されたのだ。

筋肉質で赤黒い身体を震わせ、丸まった背中から漆黒の翼を羽ばたかせ、獣の頭を持つ悪魔は、金色に輝く眼でカーシャをギロリを睨みつけた。

だが、カーシャも負けていない。

冷めた瞳で悪魔を一瞥したあと、すぐに口元を歪ませた。

「ホワイトプレス！！」

氷系の高位魔法をぶっ放した。カーシャは学院内　しかも廊下で強力呪文をぶっ放したのだ。

ブオオオツツ！！

濃縮された吹雪が悪魔に直撃し、悪魔はすぐさま身体を氷で覆われてしまった。ここにもし一般学生がいたら、その学生の心も凍っていたに違いない。

凍りつき身動き一つしない彫像と化した悪魔の前にカーシャが立つ。

「ふふ、儂く散れ！」

着ている服からは想像もできない動きで、カーシャの回し蹴りが悪魔に炸裂！

悪魔は粉々に砕け散り、細かい結晶が宙に煌きを放ちながら舞った。

舞い散る結晶の中、カーシャは冷笑を湛え言った。

「もう終わりか？」

「いいえ、カーシャ先生が死ぬまで、制裁は続きますよ。早く一〇〇〇ラウルをお返しなさい（ただが一〇〇〇ラウルと言えど、契約を破った者は許しませんよ）」

「一〇〇〇ラウルなど、借りた覚えなどないな（こいつ、ただが一〇〇〇ラウルで私を殺す気か）」

カーシャはきっぱりはつきり断言した。「嘘は認めだが最後」これがカーシャの信条だ。

一〇〇〇ラウルと言えば、ピンクスパイス 別名ラアマレ・ア・カピス一個分。たかがラアマレ・ア・カピス一個、されどラアマレ・ア・カピス一個だ。

再びファウスの持つ契約書が激しく揺れ、悪魔が契約書から鋭い鉤爪を出したのだが、その悪魔はファウスの意思によって、再び向こう側の世界へ帰されてしまった。

なぜ、ファウストは一度召喚しようとした悪魔を帰してしまったのか？

「パラケルスス先生の気配ですね。この勝負、ひとまずお預けにいたしましょう。それでは、御機嫌ようカーシャ先生」

人の気配を感じたファウストは何事もなかったように、この場から風のように消えてしまった。

ファウストが消えたあと、カーシャは静かに冷静に取り乱した。

「……こんばんわ、パラケルスス（な、なぜこいつがここに……カーシャちゃんピンチの巻き……ふふ）」

「こんにちはカーシャ先生。こちらの方で騒ぎがして来てみたのじゃが、なにかあったのかね？（ファウストの後ろ姿を見かけたので、だいたいの見当はついておるがな）」

この場に姿を見せたのは、あのパラケルススだった。そう、今日、学院に来ていないハズのパラケルスス。そして、ルーファスたちが盗みに行ったホムンクルスの持ち主のパラケルススだ。

「いや、なにもない。それよりも、パラケルスス……今日は町内の老人会があったのではないか？（研究室にだけは向かわせられん）」

「老人会は午前が終わつての、やはりわしは学院にいないと落ち着かんのでな、ふおほほほ」

柔和に笑うパラケルススを前に反して、カーシャの頭の中はとても笑えない状態だった。

「（ふふ……笑えんな。へっぽこたちがホムンクルスを盗み、私が魂移しの儀をするまでの時間を稼がねば）そうだ、パラケルスス」

「なんじゃな？」
「クロウリー学院長が、急な用事があるとかで、おまえのことを探していたぞ」

表情の読めない顔つきで、カーシャはすらつとさらつと嘘を付いたのだった。

人の良いパラケルススは笑顔を浮かべ頷いた。

「そうか、それは教えてくれてありがとう。すぐにクロウリー

学院長に会いに行こう（ふむ、クロウリー学院長は海外に出かけているはずじゃが、まあ良かるう。学院長室に行ってみるかの）

「早急に会いに行った方がいいぞ」

「ではなカーシャ先生。ファウストとの喧嘩もほどほどにな」

「……うむ（余計なお世話だ、クソジジイめが）」

こうしてパラケルススが去ったあと、すぐにカーシャは廊下をダツシユで駆け抜け、廊下は走っちゃいけませんなどシカトして補給部で赤ペンキを受け取り、大急ぎで自室に戻ったのだ。

今日は休校日で教職員の大半はいつもどおり学院に来ているが、生徒は勉強や研究熱心な学生しか来ていないので、学院内にいる人数は普段の一〇分の一にも満たない。そのためルーファスは難なくパラケルスス先生の研究室の前まで来れた。

ビビは今ルーファスの影に戻っている。この方が行動しやすいからだ。

ドアの前で腕組みをするルーファス。

「カギどうやって開けようか？」

学院通のカーシャちゃん情報によるとパラケルスス先生は今日は学校に来ていないらしい。だが、研究室にはカギがかかっている。

取り合えず、ドアに手をかけて引いてみる、押してみる、ノックしてみる。

「開けてくださ〜い」

「ルーちゃんばかでしょ？」

「試しにやってみただけだよ！ ……でもどうやって開けようか？」

「魔法でドツカ〜ンってわけにはいかないの？」

「このドアは特殊合金でできていて、私の程度の魔導士の魔法は全部無効にされる」

「役立たずう〜」

突然ルーファスの後ろで誰かが呟いた。

「ボクも思うよ。ルーファス役立たず（ふにふに）」

バツとルーファスが振り返った。

その目線の先にいたのは空色のドレスを着た奇人変人　ク
リスチャン・ローゼンクロイツだった。

「なんで、ここにいるのぉ〜!?（あわわ〜!）」

ルーファス取り乱す。今から悪いことしようとしていたので、
余計に取り乱す。

「すごいよルーファス、今からボクが君に言おうとしたことを
当てるんなんて!」（ふあ〜）」

それは違うと思う。

「そうじゃなくって……」

「……ウソ。冗談に決まってるでしょ（ふっ）。出席日数が足
らなくて呼び出されたって言ったろ？　記憶力ないね君（ふ
う）」

ワザとだったらしい。つまりこいつの性格はそれなりに悪い

ということだ。

「そのくらい覚えてるよ！（絶対バカにされてる）」

「……でも、ルーファス。なんで君がここにいるんだい？ しかもそのドア開けようとしてたみたいだけど（ふーっ！）」

「ドキっ！（見られてた!）」

「……なんてね。どうしてかはカーシヤ先生に聞いてるよ。ボクも今カーシヤ先生の所に行つて来て、マスタードラゴンの鱗を取つて来いって言われたから（ふにふに）」

クリスチャン・ローゼンクロイツは人をからかうのが好きらしい。

「そんなに私のことからかかって楽しい？」

「……それはどうかな？（ふっ）」

「……………（遊ばれてる）」

「そうだ、そのドア開けてあげようか？（ふあ〜）」

「ホントに!？」

「もちろん、ボクとルーファスの仲じゃないか……」 恩を売つて”あげるよ（ふにふに）」

ローゼンクロイツの口もが少し歪みすぐに普段の無表情に戻つた。

『恩を売つてあげる』という言葉が多少引つかかったが、ドアを開けてもらえるならとルーファスはローゼンクロイツに頭を下げた。

「お願い!」

ローゼンクロイツはルーファスを押し退けドアの前に立った。

このドアはそんなじゃそこらの魔法では開かない。

意識を集中しながら立つローゼンクロイツの背中をルーファスが息を呑みながら見守る。

ローゼンクロイツが動いた。強力魔法が繰り出されるのか！！

ゴツッ！ ローゼンクロイツの蹴りがドアにヒットして特殊合金のドアは大きな音を立てながら外れ倒れた。

「ほら、開いたよ（ふにふに）」

『ほら』じゃないだろ！ と突っ込みを入れたくなるが、その前にローゼンクロイツはさっさと行こうとしている。

「……じゃ（ふにい〜）」

ローゼンクロイツは片手を上げると音も立てずに歩き去ってしまった。

呆然と立ち尽くすルーファスにビビが声をかける。

「ああいうのってアリなの？」

「さあ？ アリなんじゃない？」

部屋の中は実験器具などが整理整頓され、一目でどこになにがあるのかが確認できるようになっていた。パラケルスス先生の人柄が一目でわかるようになっていた。

ホームクルスは部屋の中にくつもあるガラス管の中にいた。ガラス管の中は液体のような物で満たされ、下から小さな気泡が上へ上がっている。そして、時折大きな泡がホームクルスの口から吐き出される。

これを見たルーファスは困り果てた。

「そうだった、この装置ごと運ばないといけないんだっ……」

「一つでも大変な物を二つもどうやって運ぶ？ しかもばれなように……？」

困った表情をしているルーファスの影から、ニヨキッと出て来たビビが、ルーファスの顔を覗き込み自分を指差した。

「アタシがいるじゃない？」

「どーゆーこと？」

「ルーちゃんの魂さえ少し食べさせてくれれば、カーシヤの部屋まで装置ごと瞬間移動させてあげるよ」

「……………（困った）」

「でも、ルーちゃんの寿命が三ヶ月ほど減るけどね」

満面の笑みで明るく言われても困る。

一年一三ヶ月三六四日。三ヶ月となると、八四日分の寿命が削られることになる。

「三ヶ月も減るの？ 一日とかに負けられないの？」

「無理だよそんなのお」

支払う魂と願い事の質の大きさは比例しているので、負けるというのは無理な話だ。

半人前の魔導士であるルーファスに、この装置をカーシヤの部屋に運ぶ術はない。ローゼンクロイツももうここにはいない。ビビはルーファスの服の袖をぐいぐい引っ張りながら、ルーファスの瞳を仔猫のような瞳で見つめている。自称ちょく可愛

いと言っているほどのことはある　激マブ。

ルーファスはしぶしぶビビの申し出を受けることにした。激マブに負けたわけではない、ルーファスには本当に成す術がなかったのだ。

もう一度、声を大にして言う、ビビの可愛さに負けたわけじゃない。

「よろしくお願いします（三ヶ月か……）」

「オーケー」

ビビは別空間に保管してあった大鎌を取り出し、その切っ先を天高く構えた。

「痛くないよね？」

「さあ、アタシ切られたことないし？」

「えっ、ヤダよ痛いのは!？」

「ウソだよ。痛くないから心配しないで……」

合図なしでいきなりビビはルーファスに大鎌を振りおろした!!

ルーファスは殺されると思い目をぎゅっとつぶったが　死ななかつた。

恐る恐る目を開けると、そこには“なにか”を呑み込むような仕草をしているビビがいた。

「ごくん。あゝ、おいしいいゝ（やっぱり魚なんかより、人間の魂だよね〜）」

ごくんとなにかを呑み込んだ様子のビビはお腹を摩りながら満足そうな顔をした。ビビは大鎌によってルーファスの魂の一

部だけを切り取り補食したのだ。

「え？ 今のでおしまい？（呆気なかったな）」

「うん」

ルーファスは実感が湧かなかった。本当に自分の寿命が三ヶ月減ったのだろうか？

魂を喰らい魔力を得たビビの足元の下から目に見えないオーラが発せられ、スカートが揺ら揺らとゆらめく。

魔力の解放。ルーファスは正直恐怖さえ覚えた。

「（な、なんてマナなんだ……）」、「これで三ヶ月？」

「いくよぉ〜！」

全てを呑み込んだ。ビビから発せられた影が、闇がこの部屋にあるものを全てを呑み込んだ。

グオオオッ！！ 耳元で鳴り響く風の流れるような轟音。

気づくとそこはすでに薄暗いカーシャの研究室だった。魔力を得たビビは瞬時にホムンクルスと装置、そして、自分たちまでも一瞬にしてカーシャの研究室に運んだ。

灯った口ウソクの中からカーシャが浮き出るように現れた。

「よくやった。すぐにビビをホムンクルスに移す儀式を執り行うぞ」

ルーファスとカーシャは直ぐさまビビをホムンクルスに移す儀式の準備をした。

カーシャの研究室は薄暗くてよく分からないが実際は異様なまでに広い、それはこの部屋でいろいろな儀式や実験をするた

めた。

「ルーファス、本棚から 魂移しの儀 の書かれた魔導書を取
つてくれ」

「オツケー」

魔導書を受け取ったカーシャは挟んであったしおりのページ
を開き、そこに描かれたとおりに準備をはじめた。

部屋の中を忙しく動き回るルーファスをあごで使うカーシ
ヤは、こちらはこちらで魔方阵を描くので手一杯だ。なにもす
ることがないビビはルーファスの影の中で邪魔にならないよう
に静かにしている。

そして、その広い部屋一杯に儀式の準備をして、ようやく準
備は整った。

魔方阵の真ん中にルーファスとビビが立つ。カーシャは口ウ
ソクを付けながら二人の周りを円を描くように歩き呪文を唱え
る。

窓のない部屋に風が吹く。

が、しかし、カーシャが思わぬビックリ発言を突然した。

「……違う儀式の呪文だ（あの魔導書ではなく、もうひとつの
しおりを挟んだ魔導書だった。準備の段階からなにか変だとは
思っていたのだ）」

呟いた。聞こえるか聞こえないほどの声でカーシャは『違
う』と呟いた。だが、ルーファスとビビの耳にはしっかりと届
いていた。

「なんだって!？」

「うっそ〜!？」

この儀式に使う呪文の書かれた魔導書は、儀式をはじめの前にカーシャが積み上げられた魔導書の中から、ルーファスに頼んで取ってもらったのだ。そこには似たような魔導書がいっぱいあり、似たようなしおりが挟んであった魔導書もいっぱいあったのだ。

儀式は見事失敗した。そして、辺に爆風が吹き荒れ、業火がルーファスたちの周りを包み込んだ。

「もしかして私のせいなの？（うそでしょ!）」

もしかしてではなく、ルーファスのせいである。最後まで気づかなかったカーシャにも責任はあるような気もするが、弱い立場に罪が擦り付けられる。

「ルーちゃんどうにかしてよ!？」

「どうにかって、カーシャどうにか……」

慌てふためくルーファスはカーシャに助けを求めようと彼女のいた筈の方向を振り向いた筈だった。そう筈だった。とにかく筈だった。

「マジでえ〜!!」

ルーファス叫ぶ。そりやもう心の底から叫んだ。

ルーファスは啞然とした。カーシャの姿はそこには無かった。いたのはうさぎしゃんのぬいぐるみと書き置きだった。書き置きにはこう書かれていた。

すまん、暑いのは苦手だ。

ルーファス的大ショック!

カーシャは一目散に逃げたのだ。騒ぎに巻き込まれるのはゴメンということなのか？

「ルーちゃん、あのどこ行つたの？ もしかして逃げたの!？」

(もう、サイテー!)」

「たぶん、逃げたのかなあ、よくあることだから……あはは(笑えないよ、毎回毎回いざつてとき逃げて!!)」

火に手は部屋中に広がって行く。それに比例してルーファスとビビは部屋の隅へと追いやられて行く。しかも、ついてないことに部屋の入り口からだいぶ離れてしまっている。

ルーファスの額から冷たい汗が流れ出る。

ビビは火に向かって大鎌をぶんぶんと振って、火を追い払おうとするが、それは無意味としか言い様がない。

いつになく真剣な表情なルーファスの手から吹雪が出た。

「これでどうだ!! (……お願いだから消えて)」

ルーファスの作り出した吹雪は猛吹雪だった。しかし、眼前に広がる業火にあっさりと呑み込まれてしまった。

「ルーちゃんダメじゃん(なんだ、ルーちゃん普通の魔法使えるんじゃない)」

「まだまだ、これでどうだ!」

ルーファスの身体にマナが集められる。しっかりと腰を据えて呪文を唱えた。

「ブリザード!!」

この呪文は今世界で使われている簡略化されたレイラなどの原型になったライラと呼ばれる呪文だ。

レイラなどの呪文は唱えなくても簡単に出すことができる。だがライラはいちいち声に出して呪文を唱えなくてはならない。しかし、その威力はレイラなどは比べ物にならない強力なものだ。ライラは別名『神の詩』と呼ばれている高等呪文だ。

業火を呑み込まんばかりの猛吹雪。背筋がゾクゾクするほど気温も下がっている。

「ルーちゃんがライラを使えるなんて!?（学生の間際でライラを……!?）」

猛吹雪が業火を呑み込んでいく。火は風前の灯火になった。

「治まったか……?」

「ルーちゃんカッコイイ」

が、この業火はただの業火に非ず、悪魔の炎だった。

一時は勢いを失った火が再び業火となり吹雪を丸呑みにした。ルーファス愕然、ビビ啞然。

切る札とも言えるライラを使ってもなお、火を消すことはできなかつた。ルーファスは決断を迫られていた。

「（もし、私がここで死ねば、私の影に依存関係にあるビビもたたじゃ済まないな」

そう、恐らくルーファスが消滅すれば、ビビも解放されるのではなくともに消滅してしまうだろう。

悪魔の契約は絶対。その契約のチカラが大きければ大きいほど、リスクは大きくなり、悪魔自身の力ではどうにもならない。まさにルーファスとビビの間に成されてしまった契約はそれだった。ビビは完全にルーファスの一部として存在している。

不安そうにビビがルーファスを見つめる。

「ルーちゃん、どうしよう？（このまま消えちゃうのかなアタシたち）」

「（……でもし私がビビに魂を全て捧げたら……）」

もし、ここでルーファスが魂をビビに全て捧げたら、火災は治まり全てを終えたビビはルーファスの影から解放されるだろう。

真剣な眼差しでルーファスがビビを見つめた。

「私の魂を全て狩るんだ。そしてこの火を止めれば……」

「ダ、ダメだよ。そんなことしたらルーちゃんが死んじゃうし、火を消すのに魂全部貰うなんて、契約を結んだ悪魔は必要以上の代償を求めちゃいけないんだよ、だから……だから絶対ダメだよ！！」

自分の魂を全て狩るように言われたが、ビビは困惑した。それが使命のはずなのに……。

「このままだと二人とも死んじゃうから、だから私の魂を……」

「（……短い人生だったな、でも仕方ないよね）」

確かにルーファスの魂を狩ることは彼女の使命のようなものだ。しかし、彼女はルーファスのことを……。

「できないって、ルーちゃんのこと……ダメだよ絶対」

「お願いだから……」

大鎌をルーファスの頭上へと振り上げた。しかし、鎌はそこから微動だにしない。

ガタガタと大鎌が震えている。ビビの目は少し潤んでいた。

ルーファスはビビを見てやさしく微笑んだ。

「（これがアタシの使命だから……）」

そして、大鎌はルーファスに振り下ろされた。

ルーファスの魂は肉体と切り離せれ、白い煙りのような物となり、大気中を漂い目を閉じたビビの柔らかな口の中へと吸い込まれようとしている。

その時、ゴオオオン！！ という轟音とともに爆発が起きた。ビビが目を丸くして辺を見回すと、そこにはカーシャと初老の男性　パラケルススが立っていて、火は瞬間に消え部屋には硝煙だけが残されていた。

パラケルススが叫んだ。

「ルーファスを早く！！（身体に戻さんと大変なことになる）」

ルーファスの魂は未だ大気を煙りのように漂っていた。

魂は肉体を離れて長い時間存在することができない。このままではすぐに消滅してしまう。一刻の猶予も許さない事態だ。

床を滑るようにしてカーシャが一早く動いて、ルーファスの魂を封じた。

ルーファスは助かったのか？　しかし、カーシャの顔は蒼ざめていた。

「……しまった（カーシャ不覚……ふふ、笑えない）」

呆れ顔でパラケルススはカーシャに向かって言った。

「自業自得じゃな（わしのホムンクルスを盗むからじゃ）」

「……………（ふふ、笑えない）」

無言のカーシャにパラケルススは話を続ける。

「研究室の結界が破られたと思って来てみれば、このありさまじゃ。罰として一週間そのままにいるように、二人ともわかつたな？（ひさしぶりに高等魔法を使ったんで疲れたわい）」

“二人”にそう命じたパラケルススは頭を抱えながら部屋を足早に出て行ってしまった。

「ヤダよそんなの（カーシャと一週間このままなんて）」

どこからかルーファスの声が発せられた。

カーシャは間違つてルーファスの魂を自分の影に封じてしまったのだ。

「私だつてルーファスとこのままなんて御免だ（トイレやお風呂もいつしよなのかしらして!）」

「カーシャがミスつたんでしょ？」

「これでは、ビビと同じではないか……ふふ」

「まあ、私は死なずに済んでよかったけどね（ふう〜命拾ひした）」

……この状況を見ながらビビはきよとんとしてしまっている。そんな彼女の元へ、パラケルススが再び姿を現した。

「忘れとつたわい（この子をどうにかしてやらんと）」

笑いながら現れたパラケルススはルーファスの抜け殻となつた身体の横に立ち、ルーファスの影からいとも簡単にビビを解放してして、ルーファスの肉体を魔法で宙に浮かして運び、カーシャに微笑みかけるとすぐに行ってしまった。

「あれ、もしかしてアタシ自由になったの？ やった〜」

ジャンプしながらはしゃぎ回るビビを見ながら、カーシャは肩をがくと落として、ひどい頭痛に襲われた。

これから一週間の間、カーシャは頭痛に悩まされることとなり。ルーファスはビビの時とは違って影から出ることが全くできなかつたために、暇を潰すためにカーシャに一日中話し掛け、カーシャの頭痛は酷くした。

「ねえパラケルスス先生」

「ん、なんじゃな？」

「ルーちゃんが元に戻るまで、パラケルスス先生の助手としてここに置いてくれない？」

「ふおほほほつ。まあ、いいじゃろう。ルーファスの肉体をしっかりと管理しておくれ」

「やったーっ！ ありがとう」

ビビは、ルーファスの魂から解放されたあと、パルケルススの助手として学院に少しの間居座り、ホムンケルスと一緒に保管されているルーファスの肉体の大切に管理をしていたという。

それから、もちろんルーファスの悪魔召還のテストは赤点が付いたらしい。

第二話 リューク国立病院の怪異

「ルーファス伏せる！！」

カーシャの声に合わせて、ルーファスは潰れたカエルのように伏せた。

「カーシャどうかしてよぉ〜」

地面に這いつくばるルーファスの視線の先には、魔導学院の長い廊下と、空色の物体エックスがいた。

「ふにふにい〜」

空を漂う羊雲のような声を発したのは、空色ドレスの変人クリスチャン・ローゼンクロイツだった。

しかも、なぜか頭に猫耳がついている。

もうひとつおまけに、しっぽまで生えている。

その姿はまさに猫人間、略して猫人。

ローゼンクロイツの無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

次の瞬間、ローゼンクロイツのお尻から生えているしっぽが、何メートルもの長さに伸びたり縮んだり、ゴムのように、鞭のように、蛇のように、魔導学院の廊下を縦横無尽にうねった。

「ひゃっ!？」

情けない声をあげたルーファスの頭上をしっぽが掠めた。しっぽが掠めたルーファスの頭は、髪の毛がなぜか逆立ってしまった。

っている。

「カーシャ、感電死する前に逃げようよ（……って）」

カーシャがいたはずの場所には桃色ウサギ人形と置き手紙があった。

「マジでーっ!？」

思わず声をあげるルーファス。

逃げられた。

ルーファスの位置からは手紙の内容を見ることはできないが、彼にはだいたいの予想がついている。

すまん、電流は苦手だ。

とでも書いてあるのだろう。なんせ、カーシャはなにかと苦手なモノが多い女だ。とにかく、なんでも苦手にして逃る。きつと逃げるのが趣味に違いない。

一本しかないはずのしつぽが何本にも見え、とにかくそこら中を勝手気ままに飛び交う。これこそ、ローゼンクロイツの必殺技のひとつ『しつぽふにふに』だ。

その『しつぽふにふに』の厄介な点は、しつぽに高圧電流が流れている点だ。しつぽに流れている電流の電圧は、ローゼンクロイツの気分しだいで、強くも弱くも変わる。つまり、運がよければ肩こり解消、運が悪ければ丸焦げご臨終ということだ。騒ぎを駆けつけて、魔導学院の黒尽くめ教員が駆けつけてきた。

「騒ぎの元凶は誰だ!」

黒尽くめ教員 ファウストの視線に乱れ飛ぶしつぽと、そ

の根元にいる空色ドレスの猫人が飛び込んできた。

「ローゼンクロイツの猫返りか!? (クク、厄介なことになったな)」

ファウストの言う『猫返り』とは、猫耳にしつぽが生えたローゼンクロイツのことを示している。この猫返りは一種の発作であり、猫返り時のローゼンクロイツは記憶がぶつ飛び、トランス状態になる。つまり、手に負えなくなる。

性格がひねくれていることを覗けば優等生のローゼンクロイツ。性格がひねくれているのに、『優等生なのかよ!』というツッコミは置いといて、とにかく猫返りをしてるローゼンクロイツは、大問題児の破壊者と化す。

ふにふにしていたしつぽの動きが止まった。

ファウストがいち早く動く。

「来るぞルーファス、デュラハンの盾!」

「えっ!?(な、なにが?)」

目を丸くするルーファスは脳ミソをフル回転させて、現状を分析した。

まず、ファウストは高等呪文ライラによって、防護シールドを作り出した。

とか、分析して間に来ちゃったりした。

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

「ふわふわあゝ」

来た。

ローゼンクロイツの『ねこちゃん大行進』だ!!

空色ドレスから放出される大量のねこしゃん人形。それは止まることなく、二足歩行で魔導学院の廊下に広がる。廊下を走つちやいけませんなんて、このねこしゃんたちはお構いなした。ねこしゃんが放出された直後、いろんな場所から爆発音が聞こえてきた。

煙に巻かれながら、ルーファスはむせ返る。

「げぼげぼっ（ねこしゃん大行進が来るなんて……）」

『ねこしゃん大行進』とはカーシヤが名付け親である猫返り時のローゼンクロイツの魔法だ。

この魔法は身体から放出される大量のネコのお人形さんたちが、二足歩行で勝手気ままに走り回り、何かにぶつかる時『にゃ〜ん』と可愛らしく鳴いて、手当たり次第に大爆発を起こす無差別攻撃魔法である。

二足歩行のねこしゃん人形がランダムに走り回り爆発を起こしていく。爆発が爆発を呼ぶ最悪な状況だ。

猫返りしてしまったローゼンクロイツには、人間の言葉が通じない。そのうえ、意味不明な破壊活動を行う。ある意味、最強最悪の状態なのだ。

爆発に紛れて、一匹のねこしゃんが地面に這いつくばるルーファスの元にやってきた。

ねこしゃんと目が合ったルーファスの思考一時停止。

「ストップして！」

猫語で言えば止まってくれたかもしれない。

しかし、ルーファスは猫語を知らなかった。

そして、にゃ〜んといっぱつ大爆発！

白煙といっしょにあたりは真っ白の世界に包まれたのだった。

日差し柔らかな正午前、一人の患者ズランゲがリユーク国立病院に担ぎ込まれた。

ルーファスである。

爆発に巻き込まれる寸前、ルーファスは魔法壁で身を守ったが、それでも全身に細かい擦り傷を負い、軽度の火傷も数箇所、右脚の骨折。そして、爆風に巻き込まれ、頭に大きなたんこぶをひとつ作って気絶した。

魔法処置で外傷はほぼ完治したが、骨折の治療には少し時間がかかるようで、二日間の入院が決められた。

副院長の計らいで、ルーファスには個室が与えられ、現在ルーファスはスヤスヤと寝息を立てて深い眠りに落ちていた。

幸せそうな顔をして眠っているルーファスに忍び寄る黒い影。その者の全身は本当に黒かった。黒い薄手のロングコートを羽織っているのだ。

黒い影から伸ばされる青白い手。

「まだ麻酔が効いているようだな」

低い男の声を発した唇は、真っ赤な薔薇のように色鮮やかだった。

青白い手がルーファスの首筋に触れた。その瞬間、氷にでも触られたような感覚を覚えたルーファスが飛び起きた。

「ひゃ!？」

奇声をあげて上体を起こしたルーファスと男の視線が合う。

「おはよう、ルーファス君。目覚めはいかがかな？」

低い声でボソボソしゃべる男の言葉を理解するのに、ルーファスは数秒を要した。

「(……………「」は、病院か) あ、おはよう、ディー」

ディーと呼ばれた男は静かに微笑み、近くにあつた椅子に腰掛けた。その間もディーはルーファスから視線を外そうとしない。ちよつと妖しい視線だ。

「君の負つた外傷はすべて完治させておいた。脚の治療には少し時間を有するので二日間入院してもらうが、いいかね？(できれば、もう少し入院してもらいたものだが)」

「入院ですか？(まいったなあ、再追試があるのに)」

ルーファスは『これでもかつ！』といった感じで包帯グルグル巻きにされている自分の脚を眺めた。脚は器具によって吊り上げられ、ベッドから身動きできない上体にされている。

このとき、ルーファスはとても嫌な予感がした。

「あのお、外傷は治したんだよね？(なのに、なんで脚が治つてないの?)」

「ああ、君に外傷は似合わんからね」

「……………(またかあ)」

なにかと病院に厄介になることの多いルーファスだが、この病院に来るとなにかと入院を勧められ、なにかと長期入院をさせられる傾向がある。その原因は今、目の前にいるこの病院の副院長の仕業だとルーファスは踏んでいる。

白衣ならぬ黒衣を身にまとった魔法医デューと言えば、この国はおろか隣国でも有名だ。黒衣をまとう医師というだけで、少し変わり者の臭いがプンプンだが、魔法医術の腕は超一流で、リューク国立病院が創立されて以来から、ずっと副院長の椅子に座っている。

ちなみにリューク国立病院は、この国の四代目国王が建設した病院で、ざっとその話は三〇〇年以上前のことだったりする。つまり、魔法医デューは長生きさんということになる。それでも、デューの見た目は若々しく二〇代半ばの外見を保っているのだ。

超一流の魔法医と、包帯グルグル巻きの自分の脚を眺め、ルーファスは疑問に思う。

「この脚……治してくれないかなあ？ 明日再追試があるんだけど」

「ふむ、君の脚は実に興味深い複雑な骨折の仕方をしていてね。治療には二日を有するのだよ。それでも最善を尽くして二日だ」

感情を消した表情からは相手の思惟を読み取ることはできなかったが、デューの瞳は妖しくルーファスを見つめていた。

なぜかこのとき、ルーファスは肉食獣に喰われる感覚に襲われた。

恐怖に身を強張らせるルーファスを見つめ気持ちを察したのか、デューは静かに微笑んで呟いた。

「君の父上には恩義がある。君には決して手を出さんよ（そし

て、誰にも手を出させない!」

手を出すってどういう意味だよ!!

ルーファスは生睡をゴツクンと呑み込んで、素早くディーから視線を逸らした。

「(やっぱり、この人そっち系の趣味があるんだ。怖いよお)あの、お仕事が詰まってるんじゃないですか? 私に構ってないで別の患者のところに行つたほうがいいと思いますよ」

「大丈夫、心配には及ばない。君のために時間を空けてきた」
甘く囁くように呟いたディー。

ルーファスの確信は強まる一方。

この副院長は女性じゃなくて、オトコに興味があるんだ!!
とルーファスは確信した。

黒衣から伸ばされた青白い手がルーファスの首筋に触れた。
とても冷たく死人のような手だったが、恐怖のあまりルーファスは逃げることもできなかった。そもそもルーファスの身体にベッドに固定されている。

ベッドに固定され、個室が与えられ、実は個室のドアには面会謝絶の札が立てかけられていたりする。

ピバ・拉致監禁!!

鮮やかな薔薇色をしたディーの口がルーファスの耳元でなにかを囁いた。

「実にきめ細かい肌をしている。この首筋を見ていると、噛み付きたくなってしまう」

「(く、喰われるー)」

そのときだった。個室のドアがガサツにドカンと開けられた。
「ルーちゃん、お見舞いに来たよぉ〜ん！」

個室に飛び込んで来た人影に、デイーはすぐさま顔を向けた。
ピンク色の髪をツインにまとめた少女　自称ちよー可愛い

仔悪魔B・B・シエリルだった。

ビビはデイー×ルーファスの攻め受けの構図を目の当たりにして、顔を真っ赤にして後退りをして壁に背中をつけた。

「あ、あ、イヤっ、ルーちゃんのえっち〜！（ルーちゃんのばかぁ、ルーちゃんにそ〜ゆ〜趣味があつたなんて〜）」

「ち、違うって、誤解だよ！」

取り乱すルーファスをさし置いて、デイーは何事もなかったようにルーファスの身体から離れ、落ち着いた口調でビビに問いかけた。

「面会謝絶の札が立てかけてあつたはずだが、見えなかったのかね？」

「見たよ」

さらっとビビは言った。

「見たけど、それがどうかした？　アタシには関係ないしい」
常識に欠けるビビに面会謝絶の札は、ただの札と変わらないらしい。

「ふむ、まあよかるう。それではルーファス君、また後で……
（仔悪魔の邪魔が入ってしまったな）」

デイーはルーファスの顔を妖しく見つめ、個室を音もなく去っていった。

そのときのデイーの妖しい　ビビにはイヤらしいと感じた目つきを見て、ビビはやはり不審そうにルーファスの顔を覗き込んだ。

「ルーちゃん、あの人だれ？」

「この副院長だよ」

「ふ〜ん、ルーちゃんとどんな関係？」

「医者と患者の関係だけど……（あっちがどう思ってるかは自信ない）」

「ふ〜ん」

鼻を鳴らすビビは少しほつぺたを膨らませて、そつぽを向いた。

「なに怒ってるの？（なにかしたかな、昼間の破廉恥な情事で軽蔑されたとか？）」

怒られているような気はするが、なにが原因でそつぽを向かれてしまったのか、ルーファスには見当がつかない。ルーファスにしてみれば、『なんで怒ってるんだらう、変なの』ってくらいにしか思っていない。

ルーファスの意図しない沈黙が流れる。

けれど、そんな沈黙も長くは続かなかった。

コンコンと規則正しい音色を奏で、空色の声が室内に流れ込んできた。

「お邪魔するよ、へつぽこくん（ふあふあ）」

面会謝絶の札は立てかけてあつたはずなのだが、この人物にも意味を成さないらしい。　ローゼンクロイツである。

「お見舞いに来たよ（ふわふわ）。ほら、果物でも食べて元気になるといい（ふにふに）」

ローゼンクロイツの差し出したカゴには、フルーツ盛り合わせが入っていた。お見舞いの定番商品だ。そのフルーツ盛り合わせの中に入っているフルーツの定番と言えば、これだ！

「ラアマレ・ア・カピス発見」

ラアマレ・ア・カピス 通称ピンクスボムを見たビビが声を弾ませた。

ピンクボムは高級高級果物として有名であり、学生の間際でお見舞いに持つてくる品ではない。

「ルーちゃんこれ食べていい？」

「……めっ！（ふっ）」

答えたのはルーファスではなく、ローゼンクロイツだった。

「だめだよ、これはルーファスのために持つて来たんだからね

（ふにふに）」

「いいじゃん別に。ねっ、ルーちゃんいいよね？（早く食べた

いなあ）」

「私は別にかまわないけど……」

「……めっ！（ふっ）」

無表情のままローゼンクロイツと頬つぺたを膨らませたビビが対峙する。

先攻ビビ！

「ルーちゃんがもらった物をルーちゃんがどうしようとしてルーちゃんの勝手でしょ。ルーちゃんがアタシにくれるって言ったん

だから、これはもうルーちゃんの物じゃなくて、アタシの物よー！」

ルーちゃんルーちゃんと連呼したビビの息はすで上がっている。対するローゼンクロイツはいつもどおりの表情で、汗一つかいていない。このビビVSローゼンクロイツの構図を見る限り、ローゼンクロイツが勝っているように見えてしまう。

しかも、ローゼンクロイツの態度と来たら、こうだ！

「ところでルーファス、再追試は事故ということで延期にしてくれるそうだよ（ふあふあ）」

ビビのこと完全無視だった。

「ちよつとあなたアタシのこと無視？（この大っ嫌い！）」

一人相撲状態のビビは頭から湯気を出して怒るが、ローゼンクロイツはまったく相手にしていなかった。

「じゃ、ボクは再追試のことを伝えに来ただけだから帰るよ

（ふあふあ）」

「ちよつと、まだアタシと」

ビビの声を背に受けながら、ローゼンクロイツは背中越しに手を振って病室を出て行ってしまった。

ボタンと病室のドアが閉められ、なんだかビビちゃん敗北

感！！

戦う前から負けた。

けど、ビビちゃんは強い子、泣かない子。気持ちの切り替えだつて早いんだもん。

「リアマレ・ア・カピス食べよお食べよお」

自分の顔ほどもあるピンクボムを両手で抱え、ビビは上機嫌だった。気持ちの面ではローゼンクロイツに負けたビビだが、ピンクボムを手に入れたので、その点では勝ったと言えるよう。

「ルーちゃん、包丁ないの？」

「ないよそんなの」

「ええ〜っ、包丁ないと皮むけないじゃん！」

「そんなこと言われても、ない物はないよ」

「いいよ、あれ使うもん」

「あれ？（あれってなんだろう、大変なことにならなきやいいけど）」

心配顔のルーファスのことなどすでにビビの脳内から追い出され、代わりにピンク色の果物がいっぱい詰められていた。

目の前にある果物を絶対に食べる。

ビビの手の周りの空間が歪む。

安易召喚だ。

突如として現れた大鎌がビビの手に握られていた。別空間にしまつてあつたビビ愛用の大鎌を召喚したのだ。

大鎌を構えるビビの姿を見て、ルーファスは思った。

「ありえない……（あんなので果物がむけるわけはないよ）」

ルーファスの予想はぴつたし当たった。

「あれ、あれれえ、おかしいなあ（皮がむけないよお）」

巨大な鎌をぶんぶん振り回したり、あーでもない、こーでもない、ビビは悪戦苦闘している模様だが、大鎌で果物の皮がむけるわけない。それでもビビはピンクボムとの戦いをやめな

い。そして、いつしかピンクボムはズタズタに切り刻まれ、見るも無残な残骸になっていくのだった。

アステア王国でのピンクボムの取引価格は一〇〇〇ラウル前後である。一ラウルチヨコー〇〇〇個分、うめえぼうなら五〇〇個分だ。残骸と化した物体に手を合わせ祈りを捧げようさよならピンクボム、君のことは忘れない。

ピンクボムの果実部分は真っ赤な色をしているため、赤い物体が飛び散る床と、その現場に赤い何かが付着した大鎌を持つ少女。しかも、その少女の目は“敵”との過酷の戦いのため眼が血走っている。まさに惨殺現場だ！

「ビ、ビビ、なんか怖いよ（鎌持って眼がいちゃってるし）」
「ラアマレ・ア・カピス食べたかったのに、もういいよ！」

もうよかない現状が床に広がっているが、プンスカプンと怒っているビビは病室を出て行ってしまった。

残されたルーファスは、
「……掃除、誰がするんだろう？」

脚を包帯グルグル巻きにされているルーファスはベッドから降りることもできない。

部屋中に甘ったるい匂いが立ち込めていく中、ルーファスは床に散らばる残骸を眺めることしかできなかった。

「気持ち悪くてはきそ……」
甘い甘い匂いに包まれ、ルーファスはベッドに沈んでいった。

その日の深夜。

トイレでルーファスは目を覚ました。

「……………漏れそう」

ダムが決壊する寸前だった。

冷や汗をかいて顔を青くするルーファスは、すぐさまナーズ
コールをした。

繋がらない。

ボタンを連打するが、やっぱり繋がらない。
焦るルーファス。

ボタンから伸びたコードを引っ張ってみた。すると、なんと
コードが切断されているじゃありませんか！

切断面は鋭利な刃物でスパッと切ったように鮮やかだ。

「……………あっ」

と、呟くルーファス。

「(ゴビ)のせいか」

大正解！

今日の昼間、どっかの誰かさんが大鎌を振りまして、フルー
ツを細切れの虐殺したせいだった。あのときに、運悪くコール
ボタンから伸びたコードを切ってしまったのだ。

ルーファス的大ピンチ！

脚を無意味に包帯でグルグル巻きにされたルーファスは、ベ
ッドから降りることができない。イコール、トイレに行けない。
これはピンチだ！

一七歳になってお漏らしなんてできない。

「誰か助けてーっ！」

とりあえず叫んでみた。

しかし、声は個室に響いただけ。

こうなったら治療器具を壊してでもトイレに行くしかない。その前にとりあえず吊り下げられた右足を動かしてみる。

まったく動かない。

なぜか頑丈に固定され、ビクともしないのだ。

「これって……ブチ監禁!？」

ルーファスの脳裏に浮かぶ黒い医師。

吊り下げられた脚に手を伸ばそうとするも、身体が硬くて腹筋もないルーファスには届かない。

やっぱり強引に破壊するしかなさそうだ。

破壊といっても、そんなたいした物ではなく、脚を吊ってる紐を切れはどうかかなりそうだ。

風の魔法を得意とするルーファスは、指先から小さなカマイタチを放った。

スパツと紐切ったことで、吊られていた脚がドスンと落ちる。

「うっ……（痛い）」

骨折した足に衝撃が加わった。

ジーンと来る痛みに耐えること数秒。

フリーズしていたルーファスがやっと起動した。

ベッドから這い降りて、片足でびよんぴよん跳ねながら病室を出た。

深夜の病院は薄暗く、静かでひんやりとしている。

廊下を照らす薄暗いライトが心もとない。

「夜の病院って怖いなあ」

怖いのを紛らしてわざと口に出して言ってみた。

が、やっぱり怖いものは怖い。

幽霊は一年中いるが、運が悪いことに今のシーズンは夏。と行きたいところだが秋だったりする。

それでも心霊スポットは一年中心霊スポットである。

心霊スポットの定番のひとつと言えば病院。

病気や事故で無念を抱き死んだ者たちの霊が……。

「……絶対いない」

ルーファス真つ向否定。

ここで公定してしまつたら、怖くてトイレに行けない。

負けるなルーファス！

勇気を振り絞ってトイレに向かうルーファス。

が、その足はなかなか進まない。

なぜならば、トイレにはオバケが出るから！

やっぱりオバケが怖いルーファス。

いつの時代も怖い話は子供たちの間でブームになるものである。ルーファスが魔導学園に通っていた頃も、そんな話がブームになったことがあった。

その中にはトイレにまつわる怖い話がいくつかあった。

トイレの中から手が出てきて引きずりこまれるとか、トイレが詰まって逆噴射するある意味怖い話だとか、とにかくいろいろな話があった。

そんなトイレにまつわる怖い話の中で、マスコットキャラ的

な幽霊が『トイレのベンジョンソン』だ。各地方によって伝わり方はいろいろだが、見た目はだいたい統一している。

ベンジョンソンさんの主な特徴は、アフロヘアで犬みたいな顔をしていると言う点だ。一説には犬憑きの人間の霊だとも言われるが確証はない。

トイレに出没するベンジョンソンさんはどんなことをするかというと、トイレトペーパーの切れた人に紙を渡してくれるのだ。ただし、一ロールにつき、財布から勝手に一〇ラウルがなくなる。

そして、もし一〇ラウルを持っていなくなったら……。

ブルブルとルーファスは身体を振るわせた。

ヤバイ、トイレに行きたくなくなってきた。

むしろ行けない。

行きたくない。

逝くもんか。

しかし、股間のダムは決壊寸前だ。このまま放流するわけにはいかない。

よし！

つとルーファスは拳を握って気合を入れた。

「大丈夫、トイレにいるのは妖精さんだけだ、オバケなんていないよね」

きつとトイレにはフローラルな妖精さんがいるだけだ。

ルーファスはびよんびよん跳ねながらトイレに向かった。

自分が跳ねる足音が静かな廊下に木霊する。それが怖くてた

まらない。もしも、自分以外の足音が……と考えると身の毛もよだつ思いだ。

そこでルーファスは両耳を手で塞いだ。これで変な足音が迫ってきても聴こえない。

「迫ってきたとき聴こえなきゃ意味ないじゃん」
セルフツツコミ。

もしも何者かが迫ってきたのに気付かなければ、逃げることもできないではないか。

結局、耳は塞いでも塞がなくても怖い。

怖いものは怖い。

こうなったらこれしかない。

「(なにか楽しいことを……)」

普段あまり使わない頭で楽しいことを一生懸命考える。

考える。

……考える。

……なにも浮かばない。

なんて想像力が乏しいんだとルーファスへこむ。

ブルーな気分になって落ち込んだら、余計に今の状況が怖くなってきた。

とか思ってるうちに、ついにトイレの前まで来てしまった。

深夜でもトイレの電気は煌々と輝いていた。これならぜんぜん怖くないかもしれない。

なんだかルーファスは勇気が湧いてきた。

すんなりトイレに入ったルーファスは思わず目を剥く。

なんと不幸なことに男性用トイレ全てに故障中の張り紙あった。

しかも、個室の方も一箇所を覗いて、ドアに故障中の張り紙が張ってあるじゃありませんか。

唯一使用可能な個室は某三番目の個室。

そう、トイレのベンジヨンソンさんが出るという個室だ！

「困った（おなか痛くなってきた）」

恐怖と緊張のあまり腹痛を起こすルーファス。

ぎゅるるるううう。

お腹が泣く。

ルーファスに選択の余地はなかった。

個室に飛び込み、念のためトイレトペーパーを調べる。

「……うそでしょ？」

紙がない。

神がない。

オーマイゴッド！！

危ないところだった。このまま知らずに用を足していたら、

トイレのベンジヨンソンさんを召喚するところだった。

昔からルーファスは召喚と相性が悪い。

一刻も早くトイレを出……れない！

閉めた覚えのない鍵が閉まっている。

ドゴドガドガドゴ！

必死になってドアを殴る蹴る。

「うツ！（蹴るんじゃなかった）」

骨折してる足で思わず蹴ってしまった。ドジだ。

ゴン！

と、ルーファスはもう一発ドアを殴りつけた。

「なんで紙がなくて、閉じ込められなきゃいけないのさ！」

「紙イリマスカー？」

蒼ざめた顔でルーファスは辺りを見回す。

「ギャアアアツ!？」

叫んだルーファスの視線はドアの上にある隙間に向けられていた。なんとそこに黒い手に握られたトイレトペーパーが!? しまった…… やちゃった。

召喚しちまった。

トイレのベンジョンソンさん召喚！

先ほどまで閉まっていたドアが自然に開き、アフロヘアの人影があっ！

ルーファスは声をあげるでもなく、真正面を凝視してしまっていた。

ボクサーの格好をした黒人男性。しかも犬顔をしたアフロ。

ヤヴァイ、ぜんぜん怖くない。

ベンジョンソンさんはトイレトペーパーをルーファスに差し出している。

「受け取ッテクダサイ」

カタコトの言語が胡散臭さ満点だ。

しかし、なんかの魔力なのか、ルーファスはトイレトペーパーを受け取ってしまった。

「あ、どーも。ありがとうございます」

「一〇ラウル貰イマス」

「はぁ？」

財布なんて持ってないし、一〇ラウルなんて持ってない。

「一〇ラウルクダサイ」

「あ、だから、ええつと……（一〇ラウル渡さないと、どうなるんだ？）」

ルーファスはトイレットペーパーを返そうとしたが、受け取ってくれない。

「返します」

「一〇ラウル」

「返すつてば」

「一〇ラウル」

「だから返すつて言ってるでしょ！」

「一〇ラウル！」

ついにベンジョンソさんがルーファスに襲い掛かってきた。しかもベンジョンソンさんつてばヤル気満々。

いつの間にかベンジョンソさんの拳には赤いグローブが嵌められ、シュツシュツと振られる拳からはなぜか赤い液体が飛び散る。

まさかその赤い液体つて……。

ルーファス爆逃！

片足でピョンピョン跳ねながら逃げる。

その後ろをダッシュしてくるベンジョンソンさん。

深夜の病院での奇怪な追いかけっこ。

長い廊下をひたすら逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

逃げる。

「……おかしい」

逃げても逃げても突き当たらない。

リューク国立病院はアステア王国一の敷地面積がある。が、

そーゆー問題以前の問題が起きているらしい。

「……同じ道じゃ……？」

そう、さっきから同じ廊下をリピートしているのだ。

こんなことでは体力が続かず、いつか力尽きてしまう。

そういえば、こんな怪談をルーファスは思い出した。

無限廊下の話だ。

永遠に続く廊下に閉じ込められた者が翌日死体となって発見された。不思議なことに、その被害者はたった一日しか行方不明になっていないはずなのに、何日も廊下を歩き続けたように痩せこけて力尽きていたのだという。

怖ッー

廊下に閉じ込められたうえに、後ろからはベンジヨンソンさんが追ってくる。

片足ピヨピヨンは想像以上につらい。

「もう……ダメだ……」

バタっとうつ伏せてルーファスは力尽きた。

「(きつとあのグローブでボコボコに殴られるんだ)」

死を覚悟したルーファスに迫るベンジョンソンさん。その影はもうルーファスの真後ろに立っていた。

「一〇ラウル」

「……だからないって言ってるのに」

ぐったりと伸ばされたルーファスの手になにかが触れた。

指先に触れた冷たく硬い感触。

それを握り締めたルーファスは、顔の近くで手を開いた。

「ああっ！」

ルーファスの掌に握られていたのは、なんと一〇ラウル硬

貨！

「やったーっ一〇ラウルだ！」

誰が落としたのか知らないが、落としてくれてありがとう。

ベンジョンソンさんに一〇ラウルを渡すと、グッドと親指を立てて笑って去っていった。

眩しすぎる笑顔だった。

「……いったなんだったんだアレ？」

トイレのベンジョンソンさん。そもそもオバケなのかもわからない。よくわからない存在だ。

腹痛はいつの間にかどっかに消えてしまったが、急な尿意がぶり返してきた。

だけど、もうトイレになんて行きたくない。

けれど、トイレに行かないと漏らしてしまいそうだ。

どうするルーファス！

そんなとき、廊下に響いた謎の足音。

ルーファスが床に這いつくばったまま、遠くの暗がりを目を凝らした。

Ｔ字路を横に抜ける影。

出たーっ！

「（絶対幽霊だ）」

と、ルーファスは思い込んだ。

謎の影が消えた方向は、ルーファスの病室がある方向だ。つ

まり返り道。

怖くて帰れないし！

かといって、トイレの方向に引き返すのもイヤだ。

そうだ、もしかしたら目の錯覚だったかもしれない。

一晩に二回も超自然物体に出遭うはずがない。

オバケなんていないのだ！

と、気合いを入れてルーファスは匍匐前進をはじめた。

一生懸命部屋に戻る途中、ルーファスは気配を感じて後ろを振り返った。

誰もいなかった。

気のせいかもしれないけど、怖いので匍匐前進のスピードアップ！

オマエの方が怖いよってな動きでガザガサッとルーファスは急いだ。

自分の部屋はもう目の前だ。

今日は電気をつけて眠ろう。

むしろ、朝まで起きてよう。

やっと部屋の前についてルーファスが立ち上がるうとした瞬間、

向こう側からドアが開いた。

「ギヤアアアアッ！」

悲鳴をあげてルーファスは立ったまま気を失った。

ルーファスの股間に染み渡るあったかいぬくもりが……。

嗚呼、放尿。

ルーファス一七の秋だった……。

ベッドの上でルーファスはハッと目を覚ました。

辺りを見渡すと、自分の病室だった。窓の外はいい天気らし

く、空が青く輝いている。

足は昨日と同じで吊り下げられ固定されている。

まるで病室から一步も出てませんよ的な現状だった。

まさか、昨晚の出来事は全て夢だったのか？

トイレのベンジョンソンさんとの交流も夢だったの？

そうだ、あんな故障中ばかりのトイレなんて、あまりにも

出来すぎな展開だ。

やっぱりオバケなんているわけないんだ。

ほっとため息をつくルーファス。

ベッドでルーファスが寛いでいると、コンコンと規則正しい

音色を奏で、空色の声が室内に流れ込んできた。

「お邪魔するよ、へっぼこくん（ふあふあ）」

ローゼンクロイツだった。

「あっ、ローゼンクロイツ。今日も来てくれたんだ」

「今日も来たらしいね（ふにふに）」

らしいってなんだよ。自分のことなのに疑問系。

ローゼンクロイツはツカツカと歩いて、椅子にちょこんと座った。今日はフルーツの盛り合わせはないらしい。

「ルーファス、これあげる（ふあふあ）」

フルーツ盛り合わせの代わりにローゼンクロイツが持ってきたのは、一冊のノートだった。

「なにこれ？」

ノートを受け取ったルーファスは、パラパラとページを開いて中身を確認した。

中には印刷されたような綺麗な文字が書かれていた。芸術的な美しい図解や図形も描かれている。これは授業ノートだった。

「もしかして僕の代わりに？（ローゼンクロイツもいいところあるなあ）」

「たまにはキミに恩を売っておくのもいいと思っただけさ（ふっ）」

腹黒いぞローゼンクロイツ！

ローゼンクロイツは一瞬だけ口をニヤリとさせ、すぐに無表情に戻った。

「ところでルーファス（ふあふあ）」

「なに？（話の切り替え早いよ）」

「さつきロビーで立ち聞きしたんだけど、昨晚この病院にオバケが出たらしいよ（ふあふあ）」

「えっ!？」

目をまん丸にしてルーファスはドキツとした。

まさかベンジヨンソンさん!？」

「あのね、廊下を這う蜘蛛男が出たってさ（ふにふに）」

「はあ？」

「深夜の廊下を這う蜘蛛男だよ（ふあふあ）。悲鳴も聴こえたらしいよ（ふあふあ）」

「はあ？」

ベンジヨンソンさん意外にも、この病院にはオバケが棲み憑いているのだろうか？

実は、蜘蛛男の正体は匍匐前進をしていたルーファスだったりするのだが、そんなことなど彼は思いもしなかった。

つまり、昨晚の出来事は夢ではなかったのだ。

ローゼンクロイツは椅子から立ち上がって背を見せた。

「帰るね（ふあふあ）」

「もう？」

「じゃ（ふあふあ）」

肩越しに手をひらひらと振って、ローゼンクロイツは病室を出て行った。

じゃなくって。

「ちよっと待ってローゼンクロイツ!」

「なに?（ふに）」

不思議そうな顔を作ってローゼンクロイツは振り返った。完全に作った大げさな表情だ。

「ノートはありがたいんだけど、今日の授業は？」

「なんだい、今日のノートも請求するのかい？（ふにふに）」

図々しいルーファス（ふにー）」

「そうじゃなくって、今日学校は？」

「サボったに決まってるじゃないか（ふあふあ）」

サラツと言った。

「新年度はじまったばかりなのにサボリ？ 今年の進級も暫定扱いなんだろ？」

「その問題なら解決したよ（ふにふに）」

「どうやって？（学院長の差し金かな）」

「魔女と取引した（ふあふあ）」

魔女とはカーシャのことである。

去年度の出席日数が足らなかつたローゼンクロイツは、マスタートドラゴンの鱗をカーシャに渡すことで出席人数を改ざんしてもらったのだ。

用事も済んで今度こそローゼンクロイツは去っていった。それと入れ替わるようにノックが聴こえ、黒衣の男が入ってきた。「ルーファス君、怪我の具合はどうかね？」

今日も妖しい目つきでルーファスを見るディーだった。

ルーファスしばし無言。

「（もしかしたら昨日よりも悪化してるなんてことは口にできないから）今日にも退院できるんじゃないかなー」

「それは私が決めることだ」

「(あっそ) だよ、でも明日には退院だよな？」

「さて、それは明日になってみないとわからないとわからんな(どのよう
理由で病院に引きとめようか……?)」

一刻も早く退院したい患者と、なるべく長く引き止めたい医
者。早く退院したいのは患者の当然の心理で、引き止めたいの
は悪徳医師であれば、治療代を多く請求するよくある方法だ。
けれど、この二人の場合は動悸が通常と異なる。

今もルーファスを色目で見ているデイーと、見られているこ
とに怯えるルーファス。その辺りが二人の動悸だ。

「ルーファス君、困ったことがあったら、いつでも私に相談し
てくれたまえ」

と、デイーの顔が近づき、逃げようにも動けないルーファス。
「(ちょっと近づきすぎ) ええっと、それでしたら早急にナ
ースコールを直して欲しいかなあって」

「ナースコールがどうかしたのかい？」

「不思議なことにコールボタンの線が切れちゃって」

不思議なことを言いつつも、実はちゃんとビビがやったこと
を知っているルーファス。

「ふむ、どのコードが切れているのかね？」

ルーファスに覆いかぶさるようにデイーは身を乗り出した。

少し回り込めばいいものを、わざとルーファスに覆いかぶさ
り、コールボタンを調べる。

デイーとルーファスの胸板が密着。

不可抗力でドキドキしているルーファスの心音に対して、デ
イーの心臓は動いていないように静かだった。

はたから見ると、デイーが患者をベッドに押し倒しているよ
うな光景の中、ノックもされずに病室のドアが勢いよく開かれ
た。

「ルーちゃん、お見舞いに来たよおくん！」

部屋に飛び込んできたビビを見て、瞬時にデイーはルーファ
スから退いた。

「また君かね」

デイーの瞳はビビを蔑む眼つきで見ている。完全に邪魔者扱
いだ。けれど、目では訴えてもそれを口に出すことはなかった。

デイーはビビの横を通り抜け病室を出ようとした。

「それではルーファス君、また後で……（また邪魔が入った
な）」

二人っきりの部屋で、ビビはルーファスを汚い物でも見るよ
うな目で見ている。

「ルーちゃん……不潔」

「ふっ、不潔ってなに？（なんか勘違いされてるっぽいな
あ）」

「あのヒトとどんなカンケイなの？」

「だから、デイーとは医者と患者の関係だから（向こうがどう
思ってるかは別として）」

「ホントにい？」

「ホントだってば！」

ムキになったのが逆効果で、ビビの瞳イッパイに疑惑が湧いている。

そして、ビビはそっぱを向いて頬を膨らませた。

「ならいいけど（ルーちゃんがそつち系だったら、アタシ一生トラウマになりそう）」

「（なんで怒られてるんだろっ）」

会話が途切れ、気まずい空気が流れる。

ルーファスはベッドから降りられないので、この場を逃げることもできない。方やビビは、キツカケを失っていた。

「（このまま部屋出るの気まずいし、でも話す話題がないよお……）」

そんなうちにも、気まずい空気は濃度を増していく。

こんなとき、誰かが病室に訪れてくれれば……なんてことも起きてくれなかった。

なにかを思い出したようにビビは手を叩いた。

「そうだ、ルーちゃん知ってる？」

作戦、無理やり話を切り出して、さっきのことは水に流してみろ。気持ちも心機一転、笑顔のビビ。笑顔をビビの得意技だった。

「なに？」

「この病院にオバケが出るらしいよ」

「蜘蛛男？」

「はあ？（それってオバケじゃなくて怪人じゃん）」

蜘蛛男（ルーファス）ではないらしい。となると、ローゼン

クロイツの話してくれた話ではないっばい。

話に乗ってきたルーファスを見るビビのキラキラ視線。ちょっと自慢げ。

「教えて欲しい？」

「いや、別に……（怖いからそんなに聞きたくないなあ）」

「もしかしてルーちゃん怖いのか？」

「ギクツ！ そ、そんなことないよ！」

「ルーちゃん焦りすぎ（ホントわかりやすいんだから）」

「焦ってなんかないよ！」

無意味に手で防御態勢をするルーファス。完全に取り乱していた。

ルーファスを困らせてやろうとビビは話を続ける。

「実はね……」

「実は……？（あんまり怖くありませんように）」

ゴクンとルーファスは咽喉を鳴らした。と同時にビビが大声を出す。

「ピヨンシーが出たんだって！」

「はあ？（なにそれ）」

「ルーちゃんピヨンシー知らないのか？（ダッサー、ちょーポピユラーな妖怪じゃん）」

ビビの主観なので本当にポピユラーがどうかはわからない。

なんだかルーファスの恐怖は吹っ飛んだ。聞いたことも見たこともなく、ネーミングもそんなに怖そうじゃない。

「ピヨンシーなんて聞いたことないよ。詳しく教えてよ（なん

か可愛いウサギの名前みたい)」

「元々人間の屍体なんだけど、そこに闇の力が宿って怪物になるんだよ。ピヨンピヨン飛んで移動するからピヨンシーって名前になっただんだけ」

「ジャンプしながら移動するアンデッドってこと？」

「うんうん、原産地は東方の国だったかなあ」

あまり怖そうな感じがしない。特にピヨンピヨン跳ねるところが、逆にユーモラスに感じられる。

けれど、実際に追いかけられたら怖いかもしれない。

ルーファスの脳裏にトイレのベンジヨンソンさんが思い浮かぶ。見た目は犬顔のアフロなのに、追っかけられたときはそれが怖かった。

「(でもあれは夢だ。絶対に夢だ)」

ルーファスは昨晚の出来事を夢とと思っているのではなく、夢だと思いたいようだった。

「そんなわけだからルーちゃん、今夜調べてみようよ！」

唐突なビビのセリフにルーファス驚く。

「はあ!？」

「ルーちゃんの代わりにアタシが夜までに準備しとくね」

「はあ？」

「じゃあねルーちゃん、またねー！(夜が楽しみ)」

元気よく笑顔でビビは部屋を後にしていった。一度火がついたビビは止まらないらしい。

「あの、だから、足治ってないんだけど……」

ルーファスは呟いた。だが、ビビはとづくに病室を後にしていた。

独り残された病室に思いため息が漏れた。

天井をボーッと眺めていると、しばらくしてノックが聴こえた。

「どうぞ」

と、ルーファスが合図をすると、ドアを数センチだけ開けて何者かの瞳が部屋の中を覗いた。

「ふふふっ、見舞いに来てやったぞ、へっばこ」

ドアを大きく開いて入ってきたのはカーシャだった。

ここでルーファスはローゼンクロイツにもした質問をする。

「学校は？（カーシャまでサボリつてころはないよね）」

カーシャは魔導学院の教員である。

「昼休みだ（ルーファスのところに来れば、なにか面白そうなのが有りそうだと思うたが、なにもなさそうだな）」

「もう昼休みの時間なんだあ。じゃなくて、昼休みって結構すぐ終わると思うんだけど」

「いざとなれば自習にでもすればよかろう（ぶっちゃけ、ルーファスのいない学院はつまらん）」

「（そろそろこの人クビになってもいいと思うんだけどなあ）ちゃんと授業しないとクビになるよ」

「そのときはそのときだろう。ところでルーファス、茶！」

病人にお茶を出せ攻撃！

人使いが荒いという限度を超えて、カーシャは怪我人を怪我

人と思つてないほど、自己中心的な女だった。

「お茶なら、そのポットで自分でいれてよ」

「客人に茶をいれさせるなど、どういう神経をしてるのだ（ホントつかえんやつだ）」

それはこつちのセリフだ。

ブツブツ愚痴を言いながらお茶をいれるカーシャ。その姿を見ながら、ルーファスはため息を吐かずにはいらなかった。

「……はあ（カーシャってホント人をいたわるってこと知らないよね）。ところでカーシャ何しに来たの？」

「見舞いに決まってるだろう、アホかお前は？」

「（アホじゃないし）だってさ、わざわざ昼休み来るなんて、なんかあるのなあって思うじゃん」

「特にない」

キツパリ、アツサリ、サツパリ答え、言葉を続ける。

「しいていうなら、面白いことを探しにきた」

「はあ？」

「なにかないか？」

そんなこと突然聞かれても困る。

「なにかって言われても……病院にオバケが出たらしいって話くらいしかないかなあ」

「どうしてそんな面白いことを早く言わんのだ」

「話の流れってあるでしょ」

「よし決めたぞ。今夜この病院を搜索するぞ。もちろんお前も一緒だ（今年初の肝試しだ……ふふ、楽しみ）」

「は、はい？」

「では、また夜に来る」

勝手に話を進めてカーシャは部屋を出て行ってしまった。

残されたルーファスは呟く。

「だから足が治ってないから……」

どいつもこいつもルーファスが怪我人だということが、頭からスッポリ抜けているらしい。

頑張れルーファス！

負けるなルーファス！

夜になって、ルーファスがぐっすり眠っていると、誰かの呼ぶ声がした。

「ルーちゃん起きて、起きてっばあ」

「……あと……五分……一分でいいから……ふにゃふにゃ」

「ルーちゃんってば、寝ぼけてないで起きてよお」

「ああ……もあ……もう少し……ビビ!？」

ビククリしてルーファスは目を覚ました。

「なんでビビがいるの？」

「忘れちゃったのあ？」

少しビビは顔を膨らませた。

そーいえば、肝試しだか、オバケ退治だか、花火大会だか、なんかの約束をしたようなしてないような気がする。

「ホントにやるんだ(っってことはカーシャも来るのかな)」

「バッチリ準備万端だよ」

ビビはお出かけ用のショルダーバッグと、脇には松葉杖を抱えていた。

松葉杖を持ってきたことから、相手が病人だという認識はあるらしいが、その認識がありながらオバケ探して引きずり回すのはヒドイ。仔悪魔っていうか、悪魔の所業だ。

なのに満面の笑みを浮かべているビビを見ると、なんか騙されてしまう。

「早く行こうよルーちゃん（ドキドキワクワク）」

「ここまで来たら行くけどさー、その前に足を外してくれないかな？」

ルーファスの右足は吊り下げられ固定されている。心なしか昨日よりも頑丈に固定されているような気がする。

それをビビちゃんが無理やり破壊。

「出来たよ、早く行こ」

ベッドの脇には、グチャグチャになっている布やら、引き裂かれたヒモやら、強い力で曲げられたアルミパイプが……。治療代から差し引かれるに違いない。

松葉杖を受け取りルーファスはベッドから降りた。

「行くのはいいけど、どこに行くの？」

「テキトーに行けばいいんじゃないのお？」

アバウトだ。

「この病院結構広いよ」

「じゃあ……トイレとか霊安室とか行く？」

「どっちもイヤだ（特にトイレは行きたくない）」

「ワガママだなあ」

そういう問題なのか？

ピヨンシーが本当にいると仮定して（ビビのモーソーの産物でないとは仮定して）、ビビの話によるとピヨンシーの元は人間の屍体らしい。ということは、霊安室がもっとも有力かもしれない。

しかし、ビビは！！

「末期患者を探せばいんだよね！」

「はあ!？」

「だって屍体は鮮度が重要なんだよ（魂を狩るなら元気な人の方が美味しいけど）」

いくら鮮度が重要でも、末期患者はまだ死んでいない。

「人がいつ死ぬかなんてわからないし、人が死ぬの待つなんて失礼だよ」

「これでもアタシ魂を糧にしてるちょーカワイイ悪魔なんだけど。末期患者の死期くらいなら視えるかな（もつと修行すればいろんな人の死期が視えるらしいけど、メンドクサイんだよね）」

そんなわけで、強引なビビに引きずられて病院の外に来た。

廊下はひんやりと静かだ。

耳をそばだてるビビ。

「……誰か来る！」

「えっ、どっち？」

足音が聞こえないルーファスは左右を見渡した。

すると、走っているような足音がだんだん近づいてくるのがわかった。

ルーファスフリーズ。

「ま、まさか……」

もうダッシュで近づいてくるアフロヘアーのシルエツト。

トイレのベンジヨンソンさんだ！！

って、なんでいるの！

ビビは呆然と走ってくるベンジヨンソンさんは眺めている。

「なにアレ？」

「トイレのベンジヨンソンだよ！」

「意味不明だよ（なにトイレのベンジヨンソンサンって）」

逃げようとしないうビビの手を引っ張り、ルーファスは必死こいて逃げ出した。

松葉杖を放り出して、ぴよんぴよん、ぴよんぴよん逃げる。

引っ張られるビビはきよんとしている。

「なんで逃げなきゃいけないの？」

「なんでって、追っかけて来てる人見た？！」

追いかけてくるのは、犬顔のボクサー。もちろん頭はアフロヘアーだ。

どう見ても怪しい！！

「でも、別に逃げなくてもお」

立ち止まったビビに合わせてルーファスも止まった。

「だって怖いでしょ、早く逃げ　ッ!?」

ルーファスとビビは目を丸くして口を大きく開いた。

次の瞬間、顔を蹴られてぶっ飛ぶベンジヨンソンさん！！
グフツ！

冷たい廊下にベンジヨンソンさんは沈んだ。

そして、一〇カウン트가過ぎた。

カンカンカン、ゴングが鳴り響き勝者　カーシャ！！

「はあ！　なんでカーシャがいるのさ！」

驚くルーファスの視線の先で、カーシャは静かに微笑んでいた。
た。

「いては悪いか？」

「そういうわけじゃないけどさ、なんでベンジヨンソンさんをしてるの……」

「こいつはベンジヨンソンさんではない。ただの変質者だ」

「そうなの？（でも話に出てくる格好と同じだけど）」

「うむ、ボクサーマニアの入院患者だそうだ」

トイレのベンジヨンソンさんでもなければ、マニアなのでボクサーでもない。ただの変質者だ。

怖がって損した。

しかし、本当に怖かったのはこの変質者だろう。

ボコボコに殴られたか蹴られたかして、この変質者の顔はボコボコで原型をとどめていなかった。誰がやったのかはあえて言わない。なんか赤い靴を履いてる人がいるけど、突っ込んではいけない。

カーシャは虫の息の変質者の足を持ち上げた。

「では妾はこやつを治安所に連行する（ふふ、懸賞金もらえる

「いいな」

変質者を引きずって、ついでに赤い線を引きながら、カーシヤは闇の中に姿を消した。

「いったいカーシヤは何しに来たんだ？」

「てゆーか、オバケを捜索しに来たんじゃないのか？」

「てゆーか、治安所より病院が先でしょ」

と、ルーファスは呟いた。

ちなみにここは病院だった。病院で大怪我をした変質者。カーシヤに出遭ったのが運のつきだったのだろう。

偽ベンジョンソンさんが現れたことにより、当初の目的が遠ざかってしまった。ここから軌道修正して、当初の目的を思い出そう。

「そうだ、ピョンシーを探しているのだ。」

「が、ここで問題発覚！」

「ルーファスが口にする。」

「松葉杖落とした」

落とし物としては、通常ではありえない落とし物だ。偽ベンジョンソンさんから逃げる際、どこかに放ってしまったのだ。

「ビビは自分より背の高いルーファスを、下から丸い目で覗いた。」

「元来た道にあるんじゃないの？」

「そうだね」

「それほど長い距離を逃げたわけでもなく、すぐに近くにあるはずだ。おそらく、ルーファスの病室を出てすぐの場所だ。」

ルーファスはびよんびよん、もちろんビビは普通に歩いて廊下を引き返す。

すると、ルーファスの部屋が近くなってきたところで、ビビが足を止め、ルーファスも慌てて足を止めた。

ビビは口の前で人差し指を立て、『しーっ』とルーファスに合図を送った。

そして、ルーファスの部屋のドアが開くと同時に、ビビはルーファスを引っ張って曲がり角に身を隠した。

何者かがルーファスの部屋から出てきた。

足音が遠ざかっていくのを確認して、ビビは曲がり角から顔を出した。

廊下の先を歩く長身の黒い影。ジャンプで移動していないのでピョンシーではないらしい。

しかし、あの影はどう見ても人間じゃない。

長く細い腕から伸びる手の先が廊下にまで届いているのだ。

「追いかけてよ」

ビビが小声で言い、ルーファスは首を横に振った。

「ヤダよ」

「いいから行くのよ」

ビビに強引に引っ張られ、ルーファスはびよんびよん跳ねながら影を追いかける。

松葉杖搜索はなかったことのように忘れられている。

謎の影は用心深いようで、何度も立ち止まっては辺りを調べている。その都度、勘のいいビビが隠れ、ルーファスは冷や汗

を掻きながら一緒に隠れる。

しばらくしてナースセンターの明かりが見えてきた。その明かりで、ルーファスたちは謎の影の正体を知るのであった。

謎の影の正体は、松葉杖を持ったディーだった。

松葉杖を抱えるのではなく、先を下に向けて持っていたために、腕の長い怪物に見えたのだ。

「(期待して損しちゃった)」

ビビがガツカリする横で、ルーファスはほつとしていた。

「(よかったオバケじゃなくて)」

ナースセンターに松葉杖を預けたディーが再び歩き出す。ビ

ビはそれを追おうとして、ルーファスに引き止められた。

「まだ追うの？」

「だってこんな夜中に病院を徘徊してるなんて怪しいじゃん」

「ただの夜勤でしょ？」

「ううん、絶対怪しい(はじめて会ったときから思ってたんだ

よね)」

アツチ趣味疑惑とかいろんな意味で。

とめても聞きそうにないので、ルーファスは仕方なくビビについていくことにした。

再び尾行開始。

ディーはいつたいたどこに向かっているのか？

しばらく歩いた後、ディーはとある病室に入っていた。

急患が出たのだろうか？

と、考えるのが普通だが、ルーファスとはある噂話を思い出

していた。

リユーク国立病院七不思議の一つ 副院長の怪。

病院創設以来からずっと副院長だったりする魔法医ディー。最低でも三〇〇歳以上なのに、見た目は二〇代半ばなのだ。

まあ、そんな存在はルーファスの身近に普通にいたりする。

魔導学院の教師であるカーシャだ。

かつて古の時代、アステア王国が建国されるよりも遙か以前。このウーラティア地方を支配しようとした一人の魔女がいた。と古い文献に記されている。どうやらそれが 氷の魔王王 と呼ばれていた時代のカーシャらしい。

つまりルーファスの周りには、ものすごいお年寄りが普通にいるのだ。

ただし、カーシャは人間ではない。そうなると、やっぱりディーも人間ではなさそうだ。

そして、ディーにまつわる黒いウワサ。

「実はディーって吸血鬼で夜な夜な患者の生き血を啜っていると
かつて……」

「うっそーマジで？」

「噂だよ噂。ほら、でもさディーって日中も病院にいるから、
たぶん吸血鬼じゃないと思うけど」

吸血鬼が太陽を苦手としているというのは定説だ。

腕組みをしてビビは『う〜ん』と唸った。

「ピョンシーってヴァンパイアの亜種だって聞いたことあるよ
ー（ピョンシーに噛まれると、ピョンシーになっちゃうんだっ

け？」

「だーかーらー、ディーが吸血鬼だつて決まったわけじゃないから（本当に吸血鬼ならとくに僕が餌食になつてるよ）」

そんな話をしているうちにディーが病室を出てきた。すぐさま二人は物陰に隠れる。

ビビは小声でルーファスに耳打ちをする。

「きつと誰かの血を吸つたんだよ（アタシが思うに男）」

早々と歩き去つていくディーを再び尾行。

病室から離れ、病院の奥へ奥へと進む。夜の静かな世界から、より濃い闇の世界へ。

ディーが足を止めたのは霊安室の前だった。

ピヨンシーの隠し場所！

霊安室に入っていくディーを追うのは躊躇われる。さすがに霊安室まで追つて入ったら、普通にバレてしまう。

でも、ビビは気になつて身体をウズウズくねらせている。

「気になるよ、中に入つて調べてみよ」

「ダメだよ」

「なにもなかったら『こんばんわあ』って言つておわりじゃん」

「なにかあったら『こんばんわあ』じゃすまないよ（場合によつたら命にかかわるかも）」

「行くよ、ルーちゃん！」

「はあ！」

ルーファスが止める前にビビが霊安室に飛び込んでしまった。

背を向けてゴソゴソしていたディーが鋭い眼つきで振り向いた。その口元は真っ赤に染まっている。

慌ててディーは口元を拭い、引き出しになっている屍体を安置する函を壁に押し込めた。

「キミたち、見たかね？」

冷たい口調でディーは言った。

ルーファスはこわばった顔で首を横にブルブル振った。

横に立っているビビはビシッとバシッとシャキッと、『犯人はお前だ！』的なポーズでディーを指さした。

「ピヨンシーを隠してもムダだかね！！」

「……………」

ディーはきょんとしてしまった。

その隙についてビビがディーの隠した函を開けようとした。

ディーは必死になってビビを止めようとする。

「やめろ、開けるんじゃない！」

「この中にピヨンシーが！」

「ピヨンシーなんか入ってない！」

「ウソばかり！！」

そして、ついにビビは引き出しを力いっぱい開けた！

ルーファスが見守る！

ディーが顔を歪める！

ビビが目を丸くする！

なんと、函の中に入っていたのは缶ジュース。函いっぱいにはジュースの缶が並べられていた。

ビビは一本手にとって缶を調べた。

「トマトジュース？」

「悪いか？」

デイーは少し怒った様子でビビからトマトジュースを取り上げ、函の中にしてしまって引き出しを閉めた。

「トマトジュースが好きでなにが悪い？」

デイーはそう言うが、問題はそこじゃなくて、ルーファスがツッコミ。

「どうしてこんな場所にしまってるのさ？（よりに寄って屍体の近くなんて）」

「この場所で冷やして置けば誰にも飲まれる心配がないだろう（それにこの場所が病院で一番落ち着く）」

そんなに人に盗られたくないのか！

オチのついたところで、ルーファスはどっと疲れた。

「私帰るね」

ぴよんぴよんと跳ねながらルーファスは去っていく。

「待つてよルーちゃん！」

ビビもルーファスを追って去っていった。

残されたデイーはトマトジュースを一缶開けてグビッと咽喉に流した。

「うん、美味しい」

翌日、ついにルーファス退院の日。

なんだかんだでデイーの策略により、朝一の退院が夕方まで

伸ばされた。

「ディーが見送りとかに来る前に、ルーファスはさっさと病室を逃げ出した。」

廊下を足早に歩く途中で、向かいから空色のローゼンクロイツが歩いてきた。

「奇遇だねルーファス（ふあふあ）」

「何しに来たの？」

「キミに会いに（ふあふあ）」

それなら、そんなに奇遇ってわけでもない。

ローゼンクロイツは自分の手提げバッグからノートを取り出した。

「はい、これ今日のノートだよ（ふあふあ）」

「ありがとう」

でも、昨日分だけ抜けている。

「ところで、ルーファス知ってるかい？（ふにふに）」

「なに？」

「またオバケが出たらしいよ」

「……ああ」

なんかいろいろ心当たりがあったりする。

「ロビーで話してるオッチャンの話を立ち聞きしたんだけどね（ふあふあ）。ピョンピョン廊下を跳ねるオバケが目撃されたらしいよ（ふにふに）」

「あはは、そうなんだあ（まさかそれって……）」

「その特徴が、頭から長い触手をなびかせてるとか」

「あはは、そうなんだあ」

ローゼンクロイツの視線は、ルーファスが後ろで縛ってる長い髪をチラ見している。

そう、ここまで来たら誰もがお分かりだろう。昨日ビビが話した病院に出没したと言うピョンシーも、今日ローゼンクロイツが話した話も、ぜんぶ正体はルーファスだったのだ。

ちなみに改めて言うが、昨日の蜘蛛男もルーファスが正体だった。

病院を出たところで、早足で黒衣を靡かせデイーが追ってきた。

ルーファスは気付かないフリをして逃げようとしたが、横にいたローゼンクロイツがデイーと目があつたために、必然的にもルーファスも足を止めることになってしまった。

デイーは紙の袋をルーファスに手渡した。

「ルーファス君、忘れ物だよ」

「忘れ物？（忘れ物なんかはないと思うけど）」

学院から病院に直行したルーファスは、特に荷物も持っていないで担ぎ込まれた。

紙袋を受け取ったルーファスは顔を真っ赤にして袋を抱きかかえた。

ルーファスが目を泳がせる前で、デイーは妖しく微笑んでい

る。
無表情でローゼンクロイツは尋ねる。

「どうしたんだいルーファス？（ふにふに）」

「な、なんでもないよ！」

顔を真っ赤にしてルーファス爆走。

ドン！

ルーファス誰かとぶつかると

「いった〜い！」

尻餅をついて倒れたのはビビだった。

「ルーちゃんばかあ！」

「ビビが私にぶつかってきたんでしょ」

「せっかく迎えに来てあげたのに」

立ち上がるうとしたビビが地面に手をつくると、その手になに

か柔らかい布の感触が……？

それはルーファスの紙袋の中身だった。ぶつかったときに飛び出したのだ。

そして、それを見たビビの顔が見る見るうちに真っ赤になっていく。

「る、ルーちゃんのエッチ！！」

ビビちゃんパ〜ンチ炸裂！！

その手には思わず握ってしまった謎の布。

ぶっ飛んだルーファスにビビはその布を投げつけた。

「もおルーちゃんのこと知らない！」

仰向けになっているルーファスの顔面に乗った謎の布の正体

は

ルーファスのパンツだった。

ルーファス一七の秋だった……。

第三話 ドカーンと一発咲かせましょう

教壇に立ったカーシャが咳払いを一つ。

「コホン、今日はクラスの新しい仲間を紹介する」

カーシャの視線がドアに向けられ、クラスの目もそっちに向けられた。

「ばーん！」

と勢いよくドアが開けられ、小柄な影がクラスに飛び込んだ。

「イエーイ！ ビビちゃんです！」

仔悪魔ビビ、クラスの召喚！！

それを見たルーファス驚愕！！

「な、ななななっ！（ビビがどうして！）」

声をあげたルーファスは無視で、転校生恒例の自己紹介がはじまる。

「えっと、アタシの名前はシエリル・B（ベル）・B（バド）・アズラエル。愛称はビビよろしくね　これでも魔界ではちよ〜カワイイ仔悪魔でちよつとは名前が知られてます。好きな食べ物チョコレートとラアマレ・ア・カピス。好きな音楽のジャンルはヘヴィメタルとか、あとね　」

パソコン！

カーシャの平手打ちがビビの脳天に炸裂！

「いった〜い！」

「もういい、さっさと席に座れ」

ほっぺを膨らませ、ビビはカーシャの言うとおり席に座った。もちろん席はルーファスの真横だ。

「ルーちゃんクピポー！」

「クピポーってなにそれ……じゃなくって、なんでビビがここにいるのさ？」

「クピポーって挨拶流行ってるらしいよん」

「そこは置いといて、なんでビビがここにいるのさ？」

「ああと、それはねえ」

黒板方向からマジックチョークがルーファスに飛んできた。

パチコーン！

見事ルーファスの脳天に直撃。的が描いてあれば一〇〇点満点だ。

マジックチョークを投げたのはカーシャだった。

「ルーファスうるさいぞ、赤点だ」

「はあ!? ちょっと待ってよ、ビビだっしてしゃべってたじゃん！（てーゆか、回りもいつも以上にざわめいてるぞ？）」

ルーファスが辺りを見回すと、周りの生徒たちの視線が痛いほどにルーファスとビビに向けられていた。

からかうように指さす者や、ひそひそ話にピンクの花を咲かしている者もいる。みんな注目の美少女転校生と、ルーファスのカンケイが気になっているのだ。

弁解しようとルーファスが席を立て、机を両手でバンと叩く。

「ちよつとみんな勘違い　　イイツ!?」

パチコーン!

カーシャのチョークがルーファスの脳天炸裂。

「うるさいぞルーファス(女のことで焦るなんて、ルーファスもまだまだだな……ふふっ)」

おでこを赤くしたルーファスは静かに着席した。

これ以上ここで話を進めるのは得策ではないと、やっと今さら気付いたのだ。

そんなこんなで朝のホームルームが過ぎ去り、ルーファスがいろんな意味で頭を痛めていると、クラス男子たちがルーファスとビビの回りに殺到。

「ルーファス、その子おまえのなんなんだよ?(まさかルーファスの彼女!)」

「ビビちゃんっていうんだ、家どこなの?」

「俺もヘヴィメタ好きなんだ、友達になるうよ!」

「ルーファス、おまえだけは俺たちの仲間だと思ってたのに、呪い殺してやる!!」

いろんな声が飛び交う中、壮麗な服に眉目秀麗な顔が乗った男子生徒が一括する。

「君たち、ルーファスもビビも困ってるだろ!」

この者の言葉で、周りは一気に落ち着きを取り戻し、みんな不貞腐れながら席に戻っていった。

周りを一掃し、一人この場に残ったのはクラウスだった。

「してルーファス、ビビとの関係を洗いざらい吐いてもらおう

か？」

「クラウスもおおっ!」

声を張り上げてルーファスは机に突っ伏した。

周りを追い払ったのは、自分が直接聞きたかったかららしい。「寄ってたかって質問されるのは大変だろうと思つて、僕が代表として質問するべきだと考えたんだよ」

「クラウスさあ、国王なんだからそんなマネしないでよお（ホント、自覚が薄いんだよねえ）」

ルーファスが釘を刺したとおり、クラウスは現アステア王国の国王なのだ。

国王が周りを追い払つて自分だけが　となると、偉さを鼻にかけて嫌なヤツを思われがちだが、クラウスはそんなを感じさせない物腰を持っている。

美麗な顔立ちに柔和な優しさが浮かび、今みたいな行為をしてもユーモラスと女子生徒に言われるだけだ。そう、人間顔が命なのだ。

ルーファスのセリフを受けて、クラウスは少しツンとした。

「国王つていうのはなしだよ。いつも言っているだろう、学院内や友達同士で集まつてるときは、国王だということを忘れてくれたら」

クラウスの趣味は城下をお忍びで歩くことなどで、普段から高い位置からではなく、同じ目線で国民と向き合うことをモットーにしている。そのためか、国王扱いされることが嫌いらしいのだ。

親しみを込めた笑みでクラウスはビビに握手を求めた。

「僕はクラウス・アステア。ルーファスとは魔導幼稚園から友達なんだ」

ニッコリ仔悪魔スマイルでビビはクラウスの手を握った。

「アタシはビビ、よろしくね（ちょーイケメンだ）」

二人が握手を交わしているとき、ちょうど授業開始のベルが鳴った。

「またあとでじっくり話そう、じゃあねビビ」

キラースマイルでクラウスは別れを告げ、自分の席に戻っていった。

授業さえはじまってしまえば、ビビと自分から注目が薄れると、ルーファスはほっと胸を撫で下ろした。

「（まだ授業はじまってないのにドット疲れた）」

ベルが鳴り終わると同時に、規則正しい時間で教室にパラケルスが入ってきた。いつも時間にきっちりしている先生だ。

一時間目の授業はマジックポジションの授業。

医学や錬金術などを得意とするパラケルスは、この授業の権威である。ちなみにルーファスは、難しい原子配列や公式を覚えるのが苦手だったりする。

授業がはじまってすぐに、ビビからルーファスに手紙が回ってきた。

女の子から手紙をもらうのは数年ぶりのルーファス。意味もなくドキドキしながら手紙を開いた。

『さっきのルーちゃんの問題なんだけど、パラケルス先生が

留学生扱いでこの学校に入れてくれたの、いいでしょー」

すぐにルーファスは手紙の返事を返した。女の子との文通（？）はこれがはじめてだ。

『この学校入るの難しいんだよ、なんでそんな簡単に入れるの？』

『ええ、ルーちゃんだって入れたんだからアタシだって入れるよ』

『もちろん筆記とか実技試験したんだよね？』

『するわけないじゃん』

『そんなのズルイよ。あとでパラケルスス先生に抗議する！』

丸めた紙がビビから投げられ、ルーファスは中を開いた。

『ルーちゃんのばかあ！』

『バカってなんだよ！』

つつい声に出してしまったルーファス。シーンとしたクラスで注目を集め、ルーファスは気まづくなって顔を真っ赤にした。

そして、パラケルススが一つ咳払いをした。

ルーファスは肩を落として俯いた。

「(なんで僕だけがまた怒られなきゃいけないの)」

静かになった教室で再び授業が再開しようとしたとき、大声をあげてカーシャが教室に飛び込んできた。

「おいパラケルスス、緊急事態だ！」

「授業中じゃぞ。おまえも授業中のはずじゃが？(カーシャが慌てるのは珍しいのぉ)」

「悠長なことを言うな、ファウストが学院地下で……なんて説明はどうでもいい。とにかくファウストがクラスを引き連れて、超古代兵器を……とにかく来い、他の教師どももファウストを追って出た」

カーシャの慌てように、パラケルススもただならぬ雰囲気を感じ取った。

「ふむ、またか（ファウストは魔導実験のことになると、たまたに見境がなくなるからのあ）。授業は自習じゃ、みな静かに各自自習をしておるように」

ざわめき立つクラス。

ビビはワクワクしていた。

「ねえルーちゃん、楽しそうじゃない？」

「……別に（なんかビビの目輝いてるよ）」

「行こ、絶対楽しいよ！」

「はあ？」

「レッツ・ゴー！」

ルーファスが止める間もなく、ビビは教室の外に飛び出していた。

虚しく伸ばされたルーファスの手が、何者かにつかまれた。

「ルーファス、僕らも行こう！」

クラウスだった。

「クラウスまで……パラケルスス先生が自習って言っただろ」

「そう硬いこというな、行くぞルーファス」

「……はぁ（いつもこうなんだから）」
クラウスは決して模範的な優等生ではない。悪友に振り回されているのは、ルーファスのほうだった。

教室を出て校舎を飛び出す。

ビビの姿はもうない。

他の人影も……一人だけあった。

空色ドレスに乗った中性的な顔が無表情で挨拶をした。

「おはよう（ふあふあ）」

羊雲みたいな声を発したのはローゼンクロイツだ。

ローゼンクロイツは二人の顔を見つめた。

「キミたちも遅刻かい？（ふにふに）」

「君と同じにしないでくれよ」

と、クラウスは苦笑いを浮かべた。

無断欠席、大幅遅刻はローゼンクロイツの得意技だ。そんな人物と同じにされたくないのは当然だった。

無表情のままローゼンクロイツは首をかしげた。

「じゃ、サボリだね（ふにふに）」

ルーファスがすぐさま反論。

「違うから。なんかまたファウスト先生が事件を起こしたとかで自習になったんだよ。それで私たちは事件の見物に行く途中」

「それってサボリっていうんだよ（ふにふに）」

無表情のままローゼンクロイツツッコミ！

自習をサボったことはたしかで、否定の『ひ』の字も返せない。

なぜかローゼンクロイツはクルツと身体を回転させ、来た道を戻りはじめた。その背中越しに手をひらひら振っている。

「じゃ、ボクは帰るね（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの背中にルーファスが手を伸ばす。

「ちょちょちょっ、今学校に来たばかりなのになんぞ？

（また出席日数危うくなるよ）」

「自習なら行かなくていいと思うけど？（ふにふに）」

「そーゆー問題じゃないでしょ？」

「そーゆー問題だよ（ふあふあ）」

サラツと言っのけたローゼンクロイツの肩をクラウスが叩いた。

「それでは僕らと行くか？」

「……興味ない（ふあふあ）」

無表情だった顔が一瞬だけ、凄く嫌そうな顔を作って、すぐに元の無表情に戻った。

「無理やり誘うのは良くないな」

と、クラウスは諦めてルーファスに視線を向けた。

「では、僕ら二人で行くか」

「ちよつと待って、行くって言ってもどこに行くかわからないよ（カーシヤもパラケルスス先生も先に行っちゃったみたいだし）」

困って腕組みをするルーファスは、視線を感じて顔を上に向

けると、ローゼンクロイツがエメラルドグリーンの瞳で、じつとなにか言いたそうに見ていた。

「魔女ならあっちの方向に箒で飛んで行ったよ（ふあふあ）。ボクが思うに、駅かな？（ふあふあ）」

その言葉を聞いてクラウスがすぐに走り出した。

「ありがとうローゼンクロイツ。行くぞルーファス！」

「うん、またねローゼンクロイツ」

「また（ふあふあ）」

機械的に手を振るローゼンクロイツを尻目に二人は駅に向かった。

正門から続く噴水広場を抜け、駅はすぐ近くにある。クラウス魔導学院が建設されたときに、同時に建設された「クラウス魔導学院前」駅だ。

駅に着くところで問題発生。

どこまでの切符を買ったらいいかわからない。

てゆーか、本当に駅で良かったのかどうかすらわからない。

二人が路線図を睨めっこしていると、鼻を押さえた駅員がフラフラした足取りで歩いてきた。

クラウスが駅員を呼び止める。

「少し聞きたいことがあるのだが？」

「なんですか？（あれこの顔どつかで見たことあるな？）」

クラウスの顔の認知度は意外に低い。公式の行事が苦手なために、建国記念日くらいにしかクラウスは国民に顔を出さない。それに国王がこんなところにいるはずがないという先入観から、

バレても勘違いにされるかソツクリさんで通ってしまふ。

「箒を持った長い黒髪の女性を見なかつたか？」

「あーっ！ おまえあの女の知り合いかッ！」

突然、駅員はクラウスの胸倉に掴みかかり、眉間に青筋を浮かせて怒り出した。

なんで起こられているのかわからないクラウスは、きょとんと目を丸くしてしまっている。

二人の間にルーファスは割って入る。

「まあまあ、ちよつと冷静に（まさかカーシャがなんかやったのかな？）」

ルーファスが二人を引き離すと、駅員は荒々しい鼻息を出しながら地団太を踏んだ。

「あの女に言つとけ、治療代出してちゃんと俺に謝れつて（クソー鼻が痛え）」

真つ赤に腫れた鼻にルーファスとに視線が向けられた。

「たぶんそれうちの教師です。なにされたんですか？」

「殴られたんだよ。『退けーッ！』っていきなり走ってきて、俺を殴つて改札口を通つて行つたんだよ」

「はあ、そうなんですか（まったくカーシャッたら）。それでその女性がどこに行つたか知りませんか？」

「知るかよ！」

鼻を押さえて駅員は怒鳴った。かなりイライラしているらしい。イライラにはカルシウムがいい。この駅員には牛乳を飲むことを推奨する。

駅員が客の行き先を全部把握しているはずがない。どうやら駅に来たのは正解だったが、ここで打つ手なしになってしまった。だが、クラウドスは諦めなかった。

「では、長髪で魔導具をジャラジャラ腰から下げて歩いている黒尽くめの男性と、それに引き連れられた生徒の一団を見なかつたか？」

「生徒かどうかはわからないが、そんな客がいたなあ」

魔導学院は制服がなく私服のために、ひと目で学院生だとはわからないが、そんなような一団に駅員は見覚えがあった。

難しい顔をして考えた駅員は、パツと明るい顔になって閃いた。

「そうだ、湿地帯に行くとか……？（ミ……ミがつく場所だったような気がするな）」

クラウドスも閃いた。

「この辺りで湿地帯と言えば、ミズガルワーム湿地帯か？」

「そうそう、ミズガルワーム湿地帯だよ。そこに行くとか騒いでたそんな気がするな」

「よしっ、ミズガルワーム湿地帯に行こう！」

クラウドスの白い歯がキラリン！

拳まで作って行く気満々、ヤル気満々、そんなクラウドスを止める術はなかった。

重いため息がルーファスの口から漏れた。

ミズガルワーム湿地帯はアステア王国の首都から、だいぶ東

方に行った場所にある。

魔導式蒸気機関車でも、長い距離があるために、どこかでワイプ装置を使ったと予想される。

世界各地に点在するワイプ装置は、決まった場所と場所を結ぶ瞬間移動装置で、これが量産化できれば世界に革命が起こると言われている。だが、この装置はロストテクノロジーの中で、も解析不可能とされ、今までに何度も研究が行なわれてきたが、みな失敗に終わっている。

機関車とワイプ装置を使い、ルーファスとクラウスはミズガルワームの湿地帯に来た。それも湿地帯のど真ん中に位置する場所だ。

古代人が作ったとされる塔の中に二人はいた。すぐ近くには今通ってきた水溜まりにも似たワイプ装置がある。

ここまででなんとなく来てしまったが、ルーファスはどんより暗い影を落としている。

「あゝあ、着ちゃったよ（よ）りによってミズガルワームなんつ」

ミズガルワーム湿地帯は湿地帯の中でもたちが悪い。巨大な樹海の中に湿地帯が点々と存在し、数多くの肉食生物が弱肉強食の戦いを繰り返している場所なのだ。

伝説によると、この湿地帯には巨大な水蛇がいるらしく、その名前がミズガルワームというのだ。

こんな場所に来るのは自殺志願者くらいのものだ。
もちろんルーファスは自殺志願者じゃない。

ただし、今はとつてもウツ状態だった。

「最悪だ、塔の外には凶悪な爬虫類とか両生類がウジャウジャいるんだよ？（弱肉強食の原理から行って僕が食われるし）」

「ルーファス、ここまで来て引き下がったら男じゃないぞ！（でも、ルーファスはへっぴりだからなあ、心配だ）」

「この際、男じゃなくていいし。やっぱり帰ろう、それがいいよ（まだ死にたくないし）」

「そんなこと言うなよ。たぶん先に行った教師たちが一掃してるところが？」

そういう推測も一理ある。

ぐあつ、しかし！

ネガティブキャンペーンのルーファスはそんな考え持つてない。

「あのねクラウス、例えばファウスト先生が強行突破で破壊活動して、そのあとをカーシャが大暴れしたとするでしょ、それで一掃できると思う？」

「カーシャ先生なら向かってきた敵を残らず消滅させると思うが？（外に出たら湿地帯がなくなっていたりしてな）」

「違うよ、みんなが大暴れして湿地帯の動物を煽って、今は湿地帯中ギラギラ光った眼でいっばいだよ。きつと塔の外は殺気立つてるに違いないよ」

それもありえる。

結局のところ外に出てみないとわからない。

どーしても外に出たくないルーファスと、外に出たくてたま

らないクラウス。

「ルーファス、せっかくここまで来たのだから、外の様子だけでも窺おう。危ないと思っただらすぐに引き返せばいいさ」

「ええ〜っ（でもねなあ、ビビも先行っちゃってるんだよね）」

先の飛び出していったビビの背中姿が、ルーファスの脳裏に浮かぶ。

そして、ビビの笑顔。

仔悪魔スマイルがルーファスの脳裏に炸裂。

やっぱりビビは放っておけない、ルーファスは決意した。

「よし、行こう！（僕の気が変わらないうちに）」

言葉は気合いが入っているが、心はまだ弱気だった。

ついに塔の外に出ることになり、黄土色で石造りの床を踏みしめて出口に向かった。

もう出口から外の景色が見えてきたところで、塔に入ってくる人影を見つけた。

背中を丸めて人を背負ったパラケルススだった。

すぐにクラウスがパラケルススに手を貸した。

「大丈夫ですかパラケルスス先生！」

「おぬしら、自習しとれと言っただろう。じゃが、今はそれよりも手を貸してくれ」

パラケルススを手伝い、背負われていた女子生徒を床に寝かせた。

蒼ざめた顔で生徒は気を失っている。ファウストのクラスの

生徒だ。

パラケルススは生徒の脈や瞳孔を調べ難しい顔をした。

「おそらく毒じやな。わしが治療すれば命は助かるが……（外には他にも生徒が）」

パラケルススはルーファスとクラウドの顔を、真剣な眼差しで見つめていた。

「おぬしら、湿地帯にはまだ負傷した生徒がいるかもしれん。無理はせんでいいから、探してきてくれんか？」

「無理です！」

ルーファス即答。授業の答えもこのくらい即答ならいいのだが。

「僕が行きます」

クラウドスヤル気満々。授業もこんな感じで成績優秀だ。

だが、ルーファスは心配でたまらなかった。

目の前には毒にやられた生徒がいる。普通に入ってこれだ。

搜索なんかで入ったら、難易度アップで、ミイラ取りがミイラになること間違いなし。特にルーファス。

クラウドはすぐに外に駆け出してしまった。

仕方なくルーファスもあとを追う。

二人の背中にパラケルススが声をかける。

「決して無理はするな！（クラウドとルーファスなら平気じゃろっ）」

成績優秀のクラウドならともかく、へっぽこ魔導士とあだ名されるルーファスは心配だ。

だが、パラケルススはそうは思っていなかった。

「(たしかにルーファスはおつちよこちよいじゃが、秘めている実力ならば学年で一、二を争う。それに強運の持ち主じゃ)」

不幸体質で有名なルーファスだが、パラケルススはただの不幸でないと見抜いていた。

湿地帯は深い森に潜んでいる。

木漏れ日が森に差し込んでいるにはいるが、それでもどんよりと薄暗く、遠くは密林で見渡すことができない。

前ばかりに気を取られていると、足元に突然現れた湿地に足を取られてしまう。

身体をブルブル震わせながら、ルーファスは辺りをキョロキョロした。

「なんか奇声っていうか、変な鳴き声聴こえるし」

「ルーファス、僕の近くを離れるなよ」

「死んでも離れないから平気(死んでも取り憑いちゃおうかな)」

足元の湿地帯を確かめ、慎重に前へ進む。

水の中にはどんな生物が潜んでいるかわからない。迂闊に足を踏み入れることはできない。

のに、ルーファスはまる。

「わあっ!？」

ズボツと両足を膝まで沈め、ルーファスは両手を振って慌て

た。

「たたた、助けて！（死ぬし、死ぬし、死んじゃうよ！）」

ぬかるんだ水の底に足を捕られ、ルーファス脱出不可能。

クラウスが手を伸ばす。

「今助けるから落ち着け」

「早く助け　ぎやつ！？」

水飛沫があがる眼前で、クラウスはルーファスが水の中に引きずり込まれるのを見た。

瞬時の判断でクラウスは魔導チエーンを放ち、ルーファスの身体に巻きつけた。

「ルーファス平気か！」

「ぐわっ……平気じゃない……見て……わかるだろ（ちぬ、ちぬう……）」

濁った水面から顔を出したり沈んだり。必死にもがくルーファスは死相を浮かべている。

銀色に輝くチエーンを拳に巻きつけ、クラウスは渾身の力を込めて引く張った。だが、足元がぬかるんでいて思うように力が入らない。

それだけではない。ルーファスを引きずり込もうとする何者かの力が強い。

大きな水飛沫があがった。

一瞬だけ、太いまだら紐のようなものが見えた。

近くにいたルーファス。というか、ソレに引く張られてるルーファスは、ソレがなんだかわかってしまった。

「(巨大蛇!?)」

水の中で巨大な蛇がうねっている。その太さはルーファスの太腿より太い。

湿地帯で大蛇に襲われたルーファスはアンラッキー。けれど、いきなり丸呑みにされなかったルーファスはラッキー。まさに不幸中の幸い。

しかし、このままの状況では、ルーファス死ぬ。

クラウスはすでに膝まで水に浸かり、已然としてルーファスは水面でアップアップ。

「(やっぱり来るんじゃないかった)」

と意外に冷静なルーファス。自分の死期を悟って逆に冷静になつてしまったのだ。

ネガティブ冷静化現象だ!!

そんな現象名があるのはわからない。

クラウスは両手で鎖を引っ張っているが、なんとルーファスは両手が空いている。

これって不幸中の幸い?

冷静モードのルーファスはすぐに呪文を放った。

水をも切る風の刃。

見事に風の刃は大蛇の肉を裂いた。

しかし、やはり水で勢いが弱まったのか、大蛇の皮膚が厚かったのか、切断には至らずに大蛇は暴れ狂った。

その衝撃でルーファスは遠くに投げ出された。

放物線を描いて落下してくるルーファスを見事キ

ヤツチ。

若い国王によるお姫様抱っこだ！！

んなことを言ってる場合じゃなかった。

憤怒した大蛇はその全容を現し、三メートル以上の高みからルーファスたちを見下ろし、長い舌を出し入れして風のような鳴き声を立てている。

どうやら大蛇を怒らせてしまったようだ。

が、しかし！

そのとき大蛇の上空から飛来してくる物体エックス。

それは大蛇にも優るとも劣らない巨大な怪鳥の影だった。

鋭い爪を地面に向け、怪鳥は大蛇を驚掴みにした。

そして、そのまま大蛇を上空かなたへ搔つ攫って行ってしまったのだ。

大蛇を怒らせたのはアンラッキー。

怪鳥が現れたのはラッキー。

まさに不幸中の幸い。

へっぽこ魔導士ルーファス不幸中の幸い説浮上。

不幸ゆえにへっぽここと呼ばれ、重大故にも度々巻き込まれるルーファス。しかし、先日の『ねこしゃん大行進』の爆発に巻き込まれ入院した件に代表されるように、死亡してもおかしくないような事故にあっても、生き残ってしまうある意味強運の持ち主。

そう、魔導士ルーファス、その実体は不幸中の幸い体質なのだ。

けれど、たぶんアンラツキーの割合のほうが多い。

お姫様抱っこされているルーファスが、クラウドの後ろを指差した。

「クラウド逃げて！」

「どうした？」

振り返ったクラウドの目に映ったのは、毛むくじゃらの野人だ。

あんまり友好的じゃないようで、野人は雄叫びをあげている。たぶんルーファスたちは今夜のディナーだ。

不幸中の不幸体質。一難去ってまた一難。やっぱりルーファスはただの不幸体質かもしれない。

クラウドはお姫様抱っこをしたまま走った。

逃げた。

逃亡した。

とんずらした。

とにかくただでさえ歩きづらい湿地帯を走り、樹海の奥へ奥へと進んだのだった。

抱っこされているルーファスは耳を立てた。

「助けてーっ！」

女の子の声がした。ヒーローの登場を願う助けてコールだ。

気付けば後ろから迫っていた野人の姿も消えている。

「クラウド、今の聴こえた？」

「ああ、助けを呼ぶ声だ」

クラウドはすぐに声のした方向に足を運んだ。

「助けてーっ！ あっルーちゃん！」
ビビの声だ。

名前を呼ばれたということは近くにいまするはずなのだが、辺りを見回してもビビの姿が見当たらない。

「ルーちゃんってば！」

ルーファスは上を見た。

蔓に吊され木の上にいるビビの姿。逆さ吊りにされているために……パンツ丸見えだった。

お尻にクマさんがプリントされたパンティーだ。

「えっち、見ないで！」

ビビはえっちな視線に気付いてすぐにスカートを押さえた。

急いでルーファスとクラウスは首を横に振った。

「見てない、見てない！」

見事なハモリだった。でも、実は二人ともバツチリ心の写真館に保存されている。

そんなことより、なんでビビが木の上に吊されてるのだろうか？

なんてことをクエスチョンタイムする前に、ビビにアクションが起きた。

突然、ビビの身体がより高く上に引っ張られたのだ。

「助けて、これ生きてるの！」

補足をする、この蔓は知能を持ってます、ということだ。

その危険性に気付いたクラウスは両手が塞がっている、その塞いでいるものを現場に投入した。

「行けルーファス！」

クラウス、ルーファスを全力投球。またの名を人間ミサイルという。

「ぎゃ〜〜っ！（なんで投げられてるの!?!）」

ルーファスは一直線にビビに向かってぶっ飛び、そのままビビの身体に抱きついた。

ビビの顔に触れるふにふに感。

顔面にルーファスの股間ぐあっ！！

「いやああああん！！（ルーファスのばかあああん！！）」

思いつきり突き飛ばされてルーファス再びぶっ飛ぶ。人間ミサイル返しだ！

軌道の先にはクラウスがいるが、今回はお姫様抱っこなしだ。クラウスは空いた両手から風の刃を放っていた。

鋭い風の刃はビビを捉えていた蔦を切り、自由になって落下してくるビビの身体をクラウスは見事お姫様抱っこキャッチ！

代わりにルーファスは地面に激突つきっす！

「（なんか……そんな役回り）」

蛙のようにルーファスは地面で伸びていた。

そんなルーファスを放置プレイして、ビビとクラウスは見詰め合っていた。

お姫様抱っこされるビビは顔を桜色に染めて、突然のグーパーチ！

クラウスの鼻から鼻血プー！

「ぐはっ！（なぜに!?!）」

「えっち！」

クラウスの腕から降りたビビはプンスカプンと起こっていた。
「今アタシのお尻触つてたでしょ、えっち痴漢、変態！」

ちなみにえっちの語源は『変態』の頭文字の『H』なので、
えっちは重複だ。

「僕がそんなことするはずないじゃないか……」

鼻を押さえながらクラウスは弁解した。

その鼻血は本当に殴られたときに出たものかな……うふふ。

「誤解だよ、誤解！」

そうやってムキになるところが……うふふ。

木の陰から誰かがこつちを見ていた。

「うふふふ……ふふふふつ、クラウスもやはり男の子だな」

低い女性の声。

その正体はいつたい!?

カーシャだった。

物陰からひょこつと現れたカーシャを見てビビが叫ぶ。

「あゝつ、アタシを置いて行った薄情者！」

「それは誤解だぞビビ。妾はおまえを置いていったのではなく、
捨てたのだ」

もつと最悪だった。

途中までビビとカーシャは共に行動していたのだが、いつの間にかカーシャが消えてビビは独りぼっちで彷徨っていたのだ。
地面で死の境を彷徨っていたルーファスのそつと立ち上が

った。

「あー、質問。じゃあなんで戻ってきたわけ？」

「そんなこと決まっておるだろう。道に迷ったのだ（景色が全部同じに見える）」

堂々と迷子です発言。

ここでカーシャ以外が冷や汗たらり。

ルーファスはクラウスに顔を見合わせた。

「クラウス……道覚えてる？」

「いや、大蛇に襲われた場所までは記憶してたんだが、そのあと必死に逃げたから……」

不安顔のルーファスは次にビビを見た。

「ビビは？」

「アタシに聞かないでよあ」

絶望の顔で最後にルーファスはカーシャを見つめた。

「カーシャは……迷子だよね」

「あはははは」

「きやははは」

「ふふふふつ」

「あゝははは」

乾いた笑いが木霊した。

一同遭難。

ビバ・遭難！！

周りは危険なアニマルでいっぱい。

暗くなったらもつと絶望的だ。

いち早くクラウスが冷静さを取り戻した。

「みんな、大丈夫だ。少し冷静になろう（来た道を戻ればいいだけじゃないか）」

クラウスは辺りをゆつくりと見回した。

「みんな冷静になれば帰り道がわかるはずだ。帰り道は……あつちだ！」

一斉に四人で帰り道を指さした。それが見事にバラバラの方向。絶望色が濃くなった。

こんなことじゃへこたれない。クラウスは冷静さを保った。

「カーシャ先生、箒に乗って上空から現在地を確認してください」

「……箒か……あれならさつき野人に盗まれた（イタズラ好きな野人さん……なんて笑えんぞ……ふふっ）」

かなり絶望的な展開にルーファスは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「どうしよう、不安でお腹が痛くなってきたあ……」

ポンとビビが手を叩いた。

「そうだっ、まだ昼ごはん食べてないよ。お腹すいたあ、お腹すいたあ、お腹すいたあ」

駄々をこねはじめたビビ。

横ではカーシャが暗い影を落として、含み笑いで肩を震わせている。

パーティーメンバーが次々と役立たずになっていく中で、さすが一国の王クラウスは希望を捨てていなかった。

「ルーファスしっかりしろ、魔導学院の遠足に比べたらミズガルワーム湿地帯で遭難なんてたいしたことない。グラージュ山脈の登山や帰らずの樹海でのサバイバル合宿、他にもゴングル火山に飛び込めだなんて無理難題もあつたじゃないか！」

魔導学院で初の課外授業を行なったのがグラージュ山脈だった。温泉遠足だと騙されて連れて行かれた雪深い極寒の山脈。見事にそこでルーファスは遭難した。

そして、その遭難時にルーファスはカーシャと初めて出逢ったのだ。いや、遭つちやつたのだ。

遭難から帰ったルーファスの口から、そのときの詳細は今もなお語られていない。

たしかに今まで行なってきた魔導学院の、理不尽かつむちゃくちゃな課外授業に比べれば……いつもと同じくらいだ。ただし、いつもと同じでも、いつも同じ絶望感や恐怖などを味わっている。

今まで乗り越えてきたといえ、絶望は絶望なのだ。

まあ、しかしこんなところでじっとしていても話は進まない。クラウスが別の場所に移動しようと提案しようとした、そのとき！

ビビの身体に細い蔓が巻きついた。

先ほどの蔓がまだ近くに潜んでいたのだ。

遭難した絶望感で、そんな蔓のことなどすっかりさっぱり忘れていた。

「きゃあ！」

蔓に捕らえられたビビの後ろには巨大な影がそびえていた。ニメートルもありそうな花卉。グロイというか、毒々しく赤い花。強烈に甘い臭いがあたりに立ち込めはじめた。

何本もの蔓を足のように使い、巨大な花がこちらに向かってやってくる。

「ルーちゃん助けて！」

ビビの叫びを聞いてルーファスが立ち上がる。

「ビビ！」

気持ちの切り替えも早く、ルーファスは風の刃を放った。

ビビを拘束していた蔓が切り裂かれる。

自由になったビビはルーファスに駆け寄り抱きかかえられた。その間にクラウスが両手から炎の玉を放つ。

炎の玉は巨大な花に見事命中。だが、花に穴を開け焦がしただけだった。

カーシャは冷静に花を見つめていた。

「湿地帯は湿気が多い、炎は不利だ。加えて水分量の多い敵は燃やすことはできない」

「そんなこと言われなくてもわかってますよ先生。咄嗟だったので得意な炎が出ただけです」

クラウスの守護精霊は炎を司るサラマンダー。ちなみに今日の曜日はサラマンダーだ。つまりクラウスの魔力が普段よりも上昇している。

再びクラウスは構えて魔法を放った。

「喰らえ！」

また炎の塊だ。しかし、今度は違った。

炎の塊は花にぶつかつた瞬間、大爆発を起こして木っ端微塵に標的を吹っ飛ばした。

爆発系の魔法を放つたのだ。

感心したようにカーシャは頷いた。

「見事だ。申し分ない破壊力だな」

巨大な花は跡形もなかった。

ビビもおおはしゃぎだ。

「クラウスかつこいいい！ ルーちゃんとは大違い」

と、ボソツと最後に付け加えた。

「私もいちようビビのこと助けたんだけど？」

恨めしそうにルーファスは目を細めていた。

たしかにルーファスも風の刃で蔦を切つてビビを救出した。

けれど、クラウスのほうが目立つちゃつたのだ。仕方ない。

とりあえず一件落着だ。

カーシャは目を細めて何かに振り向いた。

「捕まえる！」

カーシャの声で三人はその方向を見た。

箒を持った野人が立っている。それ以上の説明はいらない。

あれこそ希望の光だ。

必死こいて四人は野人に向かって飛び掛つたのだつた。

カーシャがボソツと呟く。

「なぜ四人もいて見失う」

見事なまでに野人を見失ってしまった。

追跡時間は十数分だったが、ルーファスはもうすでに息を切らしてゼーハーしている。

「ムリ、あの猿自由に動きすぎだよ」

「だな、この樹海じゃあいつの方が有利だ」

と、クラウスは言いながら、前方から目を離していなかった。カーシャもビビも、クラウスと同じモノを見上げていた。

両膝から手をあげたルーファスも顔を上げ、その巨大な塔を見上げたのだった。

「帰ってきたっていいところだけど、あの塔じゃないね」

ワープ装置ではじめにやってきた塔ではなかった。また別の塔がそこには立っていたのだ。

カーシャはさっさと塔に向かって歩きはじめた。

「別のワープ機関があるかもしれん」
ナイス推測。

カーシャに続いて三人も塔に向かって歩き出した。

塔の周りには草木が生い茂っていたが、何者かが強引に通ったような伐採跡がある。木の断面が新しいことから、もしかしたらファウストたちかもしれない。

塔に入ったカーシャは渋い顔をする。

そこは小さな個室だった。塔の外観から考えて、三メートル四方しかない部屋はおかしい。しかし、ここには先に続く道がないのだ。

ビビが天井を指差した。

「見て、天井に穴あいてるよ」

人為的に切り取られたであろう四角い穴。先に進む道はそこ
しかなさそうだ。

ビビはジャンプをして穴に手を伸ばそうとするが、到底届き
そうもない距離だ。肩車しても無理だろう。

腕組みをしてルーファスが唸った。

「うゝん、他に入り口があるのかな」

「この部屋に仕掛けがあるのかもしれない」

そう言つて、クラウドは仕掛けを探しはじめた。

それに続いてカーシャも部屋を隈なく探しはじめた。

「ファウストが先にこの塔に來ていると仮定すると、最近にな
つてついた痕跡が残つてるやもしれんな」

塔の周りの草木が伐採されていたように、真新しい痕跡がこ
の部屋にも残つていいる可能性がある。

ビビは壁に出つ張りを見つけた。

「ここに出つ張りがあるよ」

とりあえず押してみる。

別の部屋から物音が聞こえたと思った瞬間、ルーファスの眼
前を矢が横切った。

目を丸くしたままルーファスフリーズ。

満面の笑みを浮かべるビビ。

「きやは、失敗失敗（危うくルーちゃん殺すところだった）」
「私のこと殺す気？」

目を細めて自分を見るルーファスに、ビビは首を大きく横に

振った。

「そんなわけないじゃん、アタシがルーちゃんの魂を貰うのは契約のときだけだよ」

「だってさつきお腹すいたって喚いてたじゃん」

「あ、そういえば……お腹空いたあ」

ぐうぐうと、ビビのお腹が鳴いた。

クラウスは袖をまくり、魔導式腕時計で時間を確かめようとした。外部から魔導を遮断する最新モデルだ。これで外部の魔導や磁場から狂わされることがない。

「もう二時過ぎだ」

今から学院に戻っても放課後になってることは間違いない。なんだかんだで、一日丸まるサボってしまった。ちなみにビビは初学食を食べ損ねた。

また別の部屋から物音が聞こえた。

矢が飛んでくるのかとルーファスは身構えたが、それは上から落ちてきた。

「ぎゃっ!？」

ルーファスは間一髪で飛び退いた。

上から落ちてきたのはハシゴだった。

あの四角い穴からハシゴが降りてきたのだ。

「うむ、こちらが正解だったようだな」

出っ張った石を押し終えたカーシャが呟いた。

カーシャはじーっとルーファスとクラウスを睨んでいる。先に登れの合図だ。

そんなのヤダよおっつとルーファスが首を振る。

ならば僕が行こうとクラウスがハシゴに登りはじめた。
続いてビビがハシゴに登ろうとした。

「次アタシ登るねっ！」

少し登ったところでビビは下からの熱い視線を感じた。

……パンツ見られた!?

ルーファスは上を見ていた顔をすぐに下に向けた。

「見てない、見てない！（本当は見ただけ）」

「ルーちゃんのエッチ！」

ビビちゃんキック炸裂！

「ぐはっ！」

顔面に蹴り喰らってルーファスは床に沈んだ。

そんなルーファスなど放置プレイで、さっさとカーシャもハシゴを登って行ってしまった。

いち早くハシゴを登ったクラウスは辺りを見回した。

また同じような大きさの部屋だ。けれど、今度は出口がすぐ

そこにあつた。出口は塔の外に続いている。

先走った気持ちを抑えられず、クラウスはすぐに出口を飛び出した。

塔の側面に沿って続く螺旋回廊。

緩やかな傾斜の廊下が、塔の周りを何周もしながら頂上まで続いている。

横幅はひと二人が通れるほどだが、壁がなく足を滑らせれば塔の下にまっ逆さまだ。

塔を登るクラウスの耳に誰かの叫び声が届いた。

「ぎゃあああ！！！」

塔の下を見るとルーファスが落ちていくのが見えた。

さよならルーファス、君のことは忘れない。

クラウスは再び走りはじめた。

なぜルーファスが落ちたのか、はたしてルーファスは無事なのか、その話は完全に素通りだった。

ついでにクラウスをカーシャが素通りで乗り越した。

何気にカーシャ足速い。

そのままカーシャは一位で頂上に到着。と、いきいたいところだったが、頂上には先客がいた。

二人の人影を見てカーシャは呟く。

「オル&ロスか……（ファウストの犬め）」

赤い法衣と青い法衣を着た双子の兄弟。学院の強硬派ファウストのシンパだ。

「ファウスト先生の読みが当たったなロス」

「そのようだなオル」

オル&ロスは左右対称に魔力増幅器のロッドを構えた。

この場所でカーシャは待ち伏せされていたのだ。

すぐにクラウスが追いついてきた。

「おまえたちロッドを置き、無用な戦いはしたくない！」

クラウスの言葉にオル&ロスは顔を見合わせた。

「聞いたかロス？（クラウスまでいるのか）」

「いや聞こえなかった（厄介だな）」

「オレもだ（行くぞロス！）」

示し合わせたようにオル&ロスが先に仕掛けてきた。

二体二の戦いがはじまろうとしていた！

が、そんな中に第三者が現れる。

「もおー疲れたよあ！」

やっと頂上に辿り付いたビビだった。

ビビは周りの戦いなどシカトで辺りを散策している。

「わあ、すっごーいコレ見て見て」

誰も見てくれなかった。

赤い光や青い光が辺りに飛び交い、戦いの真つ最中でそれどころではないのだ。

ビビが見たものは、塔の頂上にあつた円形の池のようなものだった。池に満たされているのは水ではなく、夜空色をした液体だった。液体は黒く、時おりキラメキが星のように流れる。

誰もかまってくれないので、ビビは辺りを歩き回り、階段発見！

「ねえ、ここに階段あるよ？」

やっとここでオル&ロスがビビの存在に気付いた。

「しまった」

双子ならではのシンク口発言。

階段を下りようとするビビを阻止しようとオル&ロスが動く。しかし、その前に立ちはだかるカーシャ！

「逃がさんぞオル&ロス！」

道を阻まれたオル&ロスの後ろにはクラウスも迫っていた。

「僕のことも忘れるな！」

そして、もうひとり忘れちゃいけない人物がひとり。

「あーっ！！ やつと頂上に着いたよ。ってみんななにやってんの？」

全身びしょ濡れのルーファスだった。

塔から転げ落ち、下の湿地帯に飛び込み、どうにか無事でびしょ濡れのルーファス。

やつと塔の頂上にたどり着いたときには、なぜか四人があいでもないこーでもないと戦闘を広げていた。

氷系魔導を得意とするカーシャの攻撃は、同じ氷系を得意とするロスに防御され、カーシャが苦手とする炎系魔導でオルが攻撃を繰り出し、それを同じく炎系を得意とするクラウスが防御し、クラウスは氷系を得意とするロスに攻撃すると、それをオルが防いで、オルはカーシャに……。

とにかく！

赤い光と青い光があつちに来たり、こつちに来たりを繰り返していた。

ビビの姿はない。とつくに階段を下りていつてしまったらしい。

ルーファスに気付いたカーシャが声をあげる。

「ルーファス、一匹任せた！」

「はあ？」

と、理解できないルーファスが、もっと理解できないことに

カーシャに投石ならぬ投人された。

人間ミサイル発射！

投げられたルーファスはオルに向かってぶっ飛ぶ。

オルはロッドをバットのように構えて、カキーンとルーファスを打った。

さよならホームラン！！

さよならルーファス。

ルーファスはお星様になったのだった……じゃなくて、またもや塔の下にまっ逆さま。今度は高さに危ないかもしれない。ご冥福をお祈りいたしますルーファス。

塔の上に残った四人が黙祷。

カーシャが嘘泣きで涙を拭う。

「ルーファス、お前の意思は妾が……」

「勝手に殺さないでよ！！」

塔の淵からルーファスの声が聞こえた。よく見るとかろうじてルーファスの手が見える。

井戸から這い上がってくる死者のような形相で、ルーファスは必死に塔の側面をよじ登った。

「……まだ死んでないから」

生き絶え絶えのルーファスを見ながらカーシャは舌打ち。

「チツ（香典は妾の懐に入る予定だったのに）」

ルーファスの葬儀で集めたお香典を懐に入れる気だったのか！！

そんなサイドストーリーが繰り広げられる中、クラウドの不意

打ち攻撃発射！

エナジーチェーンと呼ばれる拘束魔導。湿地帯でルーファスを引つ張ろうとしたときに放つたモノと同一だ。この魔導は世界でもポピュラーなもので、治安官などが犯人を捕らえるときにも使用される。

そんなわけで、あっさりと捕らえられたオル&ロス。

「クソっ、クラウス早く解け！」

「解かないとあとで仕返しするぞ！」

赤と青のどっちがオルでロスなのか、そんなのはどうでもいい話で、とにかく二人は喚いた。

しかし、そんな二人組みはシカトでクラウスは話を進める。

「先を急ぎましょう、カーシャ先生」

「うむ、ファウストを探すのが先決だ」

走る二人の背中に、オル&ロスが罵声を投げる。

「「チェーン解け！」」

やっぱり見事なシンクロだ。

ルーファスもこっそり二人を素通りしようとした。

が、やっぱり呼び止められる。

「「ルーファス！」」

「は、はい！（この二人苦手なんだよねえ）」

ビクツと身体を震わせルーファスは足を止めた。

オルがまず最初に話す。

「チェーンを解けとお前に言ってもムダなのはわかってる」

エナジーチェーンは基本的に術者しか解くことができない。

だが、今の言い方はルーファスが無能で役立たずのへっばこだから解けないと言ってるようにも聞こえる。あくまで解釈の範囲で聞こえる。

次にロスが話す。

「だが、せめてこの場所から移動させてくれないか？」

「どうということ？」

ルーファスが尋ねると、オル&ロスが同時に話しはじめた。

「あれを見る」

と、二人同時に顎をしゃくって示したのは、塔の頂上に存在する謎の池。

「「ファウスト先生の話によると、あれは砲台でいう口に位置する場所だそうだ」

「つまり、この塔そのものが砲台ってこと？」

「「そうだ」

通常の二倍で公定。

てゆーか、こんな場所でクズクズしてたらルーファスも危ない？

ドーンと発射されたら、ルーファスたちも余波でドーンだ。

冷や汗の出たルーファスは急いで二人を移動させようとしたが動かない。

身体をグルグル巻きにされた人を運ぶのは容易ではない。

一人ぐらいなら担げばいいが、相手は双子。二人が重なってグルグル巻きだった。

「……ムリ」

ルーファス断念。

「「オイー！」」

ツッコミ二倍。

赤いオルが犬のように咆える。

「ここにオレたちを置いていたら、次に会ったときにギタギタにしてやる！ なあロス？」

「そうだ、半殺しじゃ済まないからな！」

二人に咆えられ、ルーファスは重いため息を付いた。

「はあ……なんとかするよ……」

と、見せかけてルーファス逃亡。

「やっぱりごめん、運べない！」

背中を見せてルーファスは逃げた。

オルとロス兄弟の喚き声が塔の屋上に響いたのだった。

古文書を片手にファウストは扉の前に立っていた。

その耳に届く足音。

ファウストは振り向いた。

「たしか……ピビと言ったかな？」

「フルネームはシエリル・B・B・アズラエルだよおん」

「どうしてここにいるのだ？」

「楽しそうだから決まってるジャン！」

わかりやすい行動動機だ。

いや、しかし、ファウストが聞きたかったのはそんなことではなくて。

ビビの後を追ってカーシャとクラウスも駆けつけてきた。

「やはり来ましたね……カーシャ先生、ククツ」

「当たり前だ、お前に古代兵器を渡してなるものか」

もちろん我が物とするためにだ。

でなきゃ、こんな湿地帯の奥まで来るはずがない。どこまでいってもカーシャは利己的な女だった。

いつの間にか、カーシャとファウストの間には火花が散り、バーサスの構図がわくわくりやすくできてしまった。毎回毎回、こんな調子で二人とも疲れないのだろうか。

カーシャはファウストの真後ろにある扉に目をやった。

「その奥に制御室があるのだな？」

「確かめるには私を倒さねばなりませんよ？」

「望むところだファウスト！」

「ククツ、お相手いたしましょう」

魔導学院に伝わる暗黙のルール。

カーシャとファウストのケンカは犬も食わない。

つまり、二人のケンカは放置するのが一番だ。

正義感をかざして渦中に飛び込んだらケガをする。

ファウストは一枚の契約書を取り出した。そこにサインされたカーシャの印。一〇〇〇ラウルの借用書だった。

しかし、これはただの借用書ではない。

悪魔の契約書レッツ封解！

契約書が風もないのに揺れ、どこからともなく餓えた野獣の呻きが聴こえた。

「出でよスライム！」

ファウストの掛け声と同時に、緑色の物体が契約書から吐き出された。

流動するネバネバの生き物がカーシャの身体に張り付いた。

「クツ……小癩な！」

しかし、振り払おうにも振り払えない。スライムはカーシャの手足を包み、身動きを封じてしまったのだ。

それを見てファウストは満足そうだった。

「今日は無駄な小競り合いなどしていられないのでな。カーシャ、そこでじつとしていたまえ（今は一刻も早く魔導実験をしなくては）」

カーシャの動きを封じ、扉の前に立ったファウストはさっそく古文書の解読をはじめた。

扉はなにかの力で封印されている。それを解くのにファウストは神経を使っていた。

いつものパターンなら、ノリノリで挑んでくるファウストに裏切られ、カーシャは思いも寄らないショックを受けていた。

「ファウスト、この卑怯者めが！ 男なら正々堂々と戦え！」
「卑怯はカーシャの十八番でしょう。貴女にそんなことを言われる筋合いはありませんよ」

「自分の卑怯など知るか、今はお前の話をしておるのだ！」
「少し黙っていてくれませんか、集中できないのだよ！」

少し語尾をあげてキレ気味のファウスト。魔導のこととなる
と、視野が狭くなると魔導学院でも有名だ。

今回の事件もそんな感じだ。

魔導学院の地下書庫に安置されていた古文書を発見。それを持ち出して授業をほったらかし、勝手にクラスの生徒を数人引き連れてこの場所に来た。もちろん途中で脱落した生徒は放置だ。今もきつと湿地帯では救出劇が繰り広げられている。

超古代兵器があるらしいとファウストは睨んでいるが、それをどうこうして戦争をしようとか、誰かを脅そうとか、そんな考えは持っていない。

あくまでそーゆーものを実際に見て、なんとなく使ってみただけ。

本人を前にして誰も言わないが、ファウストは魔導学院でこう言われている。魔導具オタク。

まだファウストは扉の封印に神経を削いでいる。

カーシャはなんとか逃げ出そうと踏ん張って頑張っていた。

その視線に入る二人組み。しかも、その二人ったら床に座ってトランプをしていた。

「ビビならともかく、クラウドまでなにをやっておるのだ！

遊んでないでファウストをどうにかせんか！（クラウドまで：

…あれも仔悪魔の魔力か？）

クラウドは済まなそうに頭を下げた。でも手にはトランプを握ったまま。

「すまない。ビビがどうしてもババ抜きをしたいっていうから

……（レディの誘いは断れないからな）」

「カーシャもやる？」

ニツコリ笑顔でババ抜きのお誘い。

「お前らアホか……二人でババ抜きをしてなにが楽しいのだ。ではなくて、手が使えないからお前らにどうにかしろといっておるのだ。トランプができるくらいの余裕があるなら、妾がファウストをとめておるわ!!」

そんなこんなをしているうちに、いざファウスト扉を開かん!

重く閉ざされていた扉が歯軋りのような音を立て、ゆっくりとその口を開きはじめた。

ファウスト拍子抜け。

カーシャ 啞然。

残りはトランプに夢中。

なんと、扉の先にはまた扉があった。二重扉だったのだ。

再びファウストは黙々と扉の封印解除をはじめた。

カーシャも再びスライムから抜け出そうと頑張った。けど飽きた。

「さすがにもう疲れたし飽きたな。おいファウスト、この塔にはどんな兵器が隠されておるのだ?」

ファウストの眼がキラリーンと輝いた。

「よくぞ訊いてくれたカーシャ。まだ私もはつきりとわからんのだが、空に輝きを放つ砲台があると比喩されている。つまりだな、私が考えるにそれは魔導砲の一種ではないかと思うのだが、カーシャはどうかね?」

水を得た魚のように熱弁を振るうファウスト。魔導具の類が

大好きなのだ。説明を求められたら答えずにいられない。

「ふむ、魔導砲とな？　しかし、それにしても砲台など屋上にはなかったぞ？（あつたのは黒い水溜まりだけだ）」

「塔の頂上にあるエネルギー蓄積装置を見たかね？　あれは月の光をエネルギーとして蓄積し、あの場所から放出する砲台の口なのだよ」

「天に撃つても標的には当たらんと思うが？」

「それは作動してみなくてはなんとも言えませんねえ。塔自体が傾くのやもしれません」

「……なるほど」

塔が傾くなんで、んなアホな！

なんてこともなく、カーシャの常識では納得してしまった。

そんなこんなをしているうちに二番目の扉も開いてしまった。こんなことをしてる場合じゃないとカーシャ焦る。

「お前ら、さつさとファウストを追わんか！」

と、カーシャが向けた視線には三人の仲むつまじい人影が……ひとり増えてる!?

ルーファスだった。

ランプのメンバーにルーファスが追加されていた。ちなみに今ババを持っているのはルーファスだ。

じゃなくって！

「ルーファス！　さつさとファウストを追え！」

カーシャの叱咤を受けて反射的にルーファスは動いた。まさに脊髄反射の域に達している。

「は、はい！」

トランプをぶちまけてルーファス出動。勝負はおじゃんで、ババを持っていたルーファスは大助かり。将棋で大手をかけたときに駒がぶつ飛ぶのと同じだ。

ファウストを追ってルーファスが走り、そのあとを釣られてクラウスとビビが追う。が、クラウスはカーシャに呼び止められる。

「おまえは妾からスライムを引き剥がせ！」

「はい！」

一国の国王に私情で命令できるのは、この国広しと言えどカーシャだけかもしれない。

ファウストは石碑の前で立ち止まり窪みを見た。そこに古文書と同時に見つけた“鍵”を差し込んだ。鍵と言っても、それは石のような形をしていた。

搭全体が動くような音がした。

天井からは何百年、何千年もの間に積もった埃が落ち、長い間、起動されることなかったロストテクノロジーが動き出す。

もし、この力が暴走したら、どこかの国が滅びるかもしれない……。

ルーファスがファウストに飛び込む。

「ダメだファウスト先生！」

ファウストの身体を押し倒し、ルーファスの手が……ポチツとな。

発射スイッチオン！！

「ルーちゃんの……ばか」

ビビの眩きを掻き消すように、唸り声をあげた搭が、その頂上から七色の輝きを放った。

その光景はルーファスたちがいる制御室でも、3Dホログラムでモニターされていた。

ドジッ子ルーファスのせいで、世界は未曾有の恐怖に……。と、思ったら天高く昇った輝きは、パーンと弾けて辺りに綺麗な華を咲かせた。

一同沈黙。

これってまさか？

ここでビビちゃんが笑顔で掛け声。

「たつまやーん！！」

綺麗な花火が昼間の空を彩った。

クラウスは俯いて肩を震わせていた。

「くくっ、はは、あははは！　なんだ花火じゃないか」

横にいたカーシヤも残念そうに。

「そのようだ（チツ、古代兵器ではないのか）」

そんな軽いオチで包まれるこの場で、たたひとりルーファスだけが顔面蒼白だった。

自分がスイッチを押してしまった罪悪感で、その瞬間に気を失って倒れてしまっていたのだ。

「ルーちゃん、カッコ悪」

呆れたようにビビはため息を落とした。

こうして今回の騒動は呆気なく幕を閉じたのだった。

ちなみに、この事件で大火傷を負ったオル&ロス兄弟に、ルーファスが追っかけられるのは後日談である。

第四話 空色ドレスにご用心

クリスチャン・ローゼンクロイツ たぶん一六歳。

一六年ほど昔のこと、雪の降る寒い晩に彼は修道院に扉の前に捨てられていた。

それは三が日の一月三日のことであつた。世間は年明けでめでたい最中のことだ。

生まれて間もない赤子だつた彼は、修道院に引き取られ、洗礼名のクリスチャン・ローゼンクロイツを授かつた。

比較的裕福な階層が多いはずの王都で、金銭的な問題で子供を捨てる者は少ない。ローゼンクロイツはそれ以外の事情で捨てられたのだと噂された。

なにより、捨てられていた時に着ていた衣が、上等な絹織物であつたことや、いくばくかの金品が一緒に置かれていたこと、それを考えると裕福な階層が捨てたという説が色濃い。

のちの精霊検査によつて、ローゼンクロイツの守護精霊は“ガイア”と判明し、生まれて間もないことから、おそらく誕生日は一月一日とされた。

一月の守護神は無を司るケイオス。そして、一日は世界を意味するガイアが守護している。年のはじめという滅多にない取り合わせの日に生まれたのだ。

このような特別な日に生まれた者は、例に漏れず特別な力を

持つて生まれてくる。

ローゼンクロイツにもそれがあつた。

魔導学院の廊下を歩く空色ドレスのローゼンクロイツ。

後姿は一五七センチと小柄で、水色のショートカットヘアはキューティクルが美しい。どっからどー見ても女の子そのものだった。なので町でナンパされることが多いが、彼は男だ。

カワイイ男の子だ！！

未だにローゼンクロイツを男だと認めない輩も多いが、幼馴染みでお風呂を何回も共にしたルーファスや、学校の合宿などで風呂を共にした者たちはこう証言している。

ローゼンクロイツの股間にはブツがあつた。

女の子っぽいのに男の子という、両生類的要素に萌えを感じるローゼンクロイツ信者も少なくなく、彼にはファンクラブ団体がいくつも存在していた。

特に薔薇十字というファンクラブ団体はかなりの規模だ。その女性会長アインは熱烈な追っかけ魂が講じて、一般家庭に生まれながらも名門クラウス魔導学院に入学するという快挙を成し遂げた。しかも、彼女、もともと魔導学校の出ではないので、一から魔導の勉強をしたつわものだ。

そう、全てはローゼンクロイツへのラヴ。

アインはピカピカの一年生、まだ今月のはじめごろに入学式があり、まだ魔導学院生活が一ヶ月も経っていない。

部外者立ち入り禁止の魔導学院で、公然的にストーキングが

できる。

一生懸命勉強した彼女へのご褒美……なのに、なのに!!

ローゼンクロイツの背中に軽々しく声をかける男。

「おいローゼンクロイツ待つてよ!」

「なんだいルーファ……ふぁ……ふぁっ!」

振り返ったローゼンクロイツの鼻がムズムズしている。

クシャミをしようとするローゼンクロイツの口を、ルーファ

スが超慌てて塞いだ。

「ストップ!!」

くしゃみは寸前で阻止された。

薔薇の蕾のようなローゼンクロイツの唇。それを手で触れる

なんて……。

アインは廊下の物陰で思った。

「(許せん……)」

けれど、所詮アインは日陰の女。ストーリーカーは日の目を見ない。見るときは、ストーリーキングが事件沙汰になったときくらいだろう。最近はそのような事件も増えている。物騒な世の中になったものだ。

しかし、ストーリーカー本人はそんなこと思っていない。

アインに言わせれば。

「(ローゼンクロイツ様、ラウ)」

純愛なのだ。

ローゼンクロイツは視線を感じ、そちらを振り向いた。

目と目が逢う瞬間。

ローゼンクロイツのエメラルドグリーンの瞳がアインを見つめた。あの瞳に見つめられると、かなりトキメク。

五芒星ペンタグラムの浮かぶローゼンクロイツの瞳は、聖眼と言っても特殊でプレミアもので、かなりの魔力がこもっている瞳なのだ。

ローゼンクロイツはスタスタと歩き出した。呼び止めたルーファスを無視である。

「ちよつと待ってよローゼンクロイツ！」

「あれ……いたのルーファス？（ふにゃ）」

心底驚いたような顔をするローゼンクロイツ。どこか作り物っぽい表情だ。

「あれじゃないよ、さつき呼び止めたときからいるじゃん」

「……忘れた（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの致命的な欠点の一つ、異常なまでに物忘れが激しい。ワザとかどうかの境界線の見極めが難しい。

無表情で仕切りなおすローゼンクロイツ。

「で、ボクになんの用だい？（ふにふに）」

「教室に日傘忘れていっただろ、はいコレ」

ルーファスは日傘をローゼンクロイツに手渡した。その日傘をまじまじと観察するローゼンクロイツ。

「これボクのだっけ？（ふにゃ）」

「そんなことも忘れたの？」

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

完全にルーファスはバカにされている。

「はあ？ ウソってなんだよウソって」

「そのくらいのことボクが忘れるはずがないだろう……心外（ふう）」

ワザとかどうかの境界線の見極めが難しい。

そんなローゼンクロイツにアインは。

「萌えっ！」

思わず声を出してしまった。

廊下を歩き交う生徒たちがアインを変な目で見て、アインは恥ずかしそうに口を両手で塞いで、ササツと物陰に身を潜めた。それをバツチリ見ているルーファスが、ローゼンクロイツにヒソヒソ話をする。

「ローゼンクロイツ、また君の追っかけの子が来てるよ」

「……らしいね（ふにふに）。ボクを追って学院にまで入学したそうだよ（ふあふあ）。奨学生でバイトでここの授業料を払ってるらしい（ふあふあ）」

「何気にチェックしてるんだね、あの子のこと（まさかローゼンクロイツ、逆ストーリーカー!?!）」

「彼女のブログを見た（ふあふあ）」

最近アステア王国でも普及してきたパソコン。

魔導師たちが使っていた通信魔法のひとつを、より使いやすく一般家庭向きに改良したネット。

そんなネット世界でブログという日記のようなものが流行っているらしい。

何気にそんなものをチェックしているローゼンクロイツ。

やっぱりアインの逆ストーカー!?

なのではなくて、最近のファンクラブはネットで活動していることが多いのだ。ローゼンクロイツのファンクラブも例外ではなかった。

ボソツとローゼンクロイツは呟いた。

「……肖像権侵害（ふー）」

「なに？（突然？）」

ルーファスは不思議そうな顔をローゼンクロイツを見た。

「ボクさ、夏休みに弁護士資格を取ったんだ（ふあふあ）」

「そうなんだ（初耳だし、そんな資格取るなんて聞いてもなかった）」

「それで肖像権を侵害しているボクのファンクラブを訴えようと思うんだ（ふあふあ）」

「はあ？」

ファンクラブで流用されるローゼンクロイツのマジカルフォト。プライベートのローゼンクロイツが激写され、写真の多くがネットの流出してしまっている。彼が訴えたいというのももつともだ。

と思いきや、ちょっと違った。

「散歩中のABCの写真がネットに載ってるんだ（ふあふあ）。
彼たちのためにボクが立ち上がらないといけないと思うんだよ

（ふあふあ）」

「はあ？」

ABCとはローゼンクロイツの飼っている熱帯魚の名前である。AとBとCという三匹だ。

てゆーか、熱帯魚を散歩させるって犬じゃないんだから。じゃなくって！

「熱帯魚に肖像権とかないでしょう（そんな裁判聞いたことないよ）」

ルーファスのツツコミ炸裂。

「まずはABCたちの住民票を作るところからはじめようと思うんだ（ふあふあ）」

「たぶん交付されないと思うけど」

「外国人や悪魔や亜人、その他の種族にも権利はあるよ？（ふにふに）」

「それは彼らが知性と文明を持った生物だからで、熱帯魚になんかに国で与えられる権利なんかないよ」

「……あつ！（ふにゃ）」

天地がひっくり返るような、驚き顔をローゼンクロイツは作った。

そして、ボソツとひと言。

「ABCに餌あげるの忘れてた（ふあふあ）」

そんなに大事な熱帯魚なのに、なぜ餌を忘れる！！

それはローゼンクロイツの物忘れが激しいから。

そんなローゼンクロイツにアインは。

「萌えっつ！」

再び声をあげて周りの視線を集めるアイン。顔を真っ赤にし

て物陰に潜んだ。

そんなアインを見ていたルーファスが、再びローゼンクロイツにヒソヒソ話をする。

「いい加減ビシツと言ったほうがいいよ。そうでないといつまでも付きまとわれるよ（なんか芸能人みたいでカッコイイけど）」

「そうだね（ふにふに）。ビシツと言って来よう（ふあふあ）」

ツカツカと正確な歩調でローゼンクロイツは進み、アインは緊張で逃げることもできなかった。

そして、ローゼンクロイツはビシツと指を差して言う。

「ビシツと！（ふにゃっ！）」

文字通りビシツと言って、踵で一八〇度回転してローゼンクロイツは去っていく。

ビシツと指さされたアインは、キューピッドの矢に射抜かれたように、胸キュンだ。

余計にアインはときめいてしまった。逆効果だ。

トキメキすぎてアインはその場で気絶した。

気絶したアインはニタニタ笑いを浮かべて幸せそうだった。

これで死ねるなら本望だろう。

ビシツと効果でストーカーを振り切ったローゼンクロイツ。ルーファスと魔導学院の正門を出る寸前だった。

突然、ローゼンクロイツが足止めた。

「……そうだ（ふにゃ）」

「なに？」

「朝食食べるの忘れた（ふあふあ）」

「はあ？」

「……そうだ（ふにゃ）」

「なに？（二回連続？）」

「昨日寝るの忘れた（ふあふあ）」

「はあ!?（寝るの忘れるって異常だよ）」

「……そうだ（ふにゃ）」

「また？（三回連続なんて珍しい）」

「ABCに餌あげるの忘れてた（ふあふあ）」

「それさつき言ったし（なんかいつもより重症だぞ）」

心配そうにルーファスはローゼンクロイツを覗き込んだ。

日ごろから物忘れの激しいローゼンクロイツだが、いつも一

緒のルーファスはなにか不安を感じた。

そういえば、最近“発作”もよく起こしているようだった。

ローゼンクロイツの発作というのは　　なんて言ってる先か

ら！

「はつくしよん！（ふにゃ）」

大きなクシヤミをしたローゼンクロイツ。ルーファスが止める間もなかった。

これはあまりよろしくない事態だ。

周りには下校途中に生徒もたくさんいらっしやる。

メタモルフォーゼ！！

つまりローゼンクロイツ変身！

ローゼンクロイツの頭に、ひょこつとネコミミが生えた。

ローゼンクロイツのお尻に、ぴょんとしつぽが生えた。

ローゼンクロイツの口が、ニヤリと笑う。

「ふにふにい〜」

羊雲のような声を発したローゼンクロイツ。今の彼はまさしく猫人間 略して猫人。

一月一日生まれのローゼンクロイツの特殊体質。クシャミをすると猫人になる。

しかも、人語もまったく通じずトランス状態のローゼンクロイツは、理不尽な破壊活動を行なうのだった。

デンパを発する人畜有害生物だ。

そんなローゼンクロイツがルーファスの手に負えるはずもなく、ここは逃げるしかない。

ルーファス逃亡！

しようと思つたのに遅かつた。

電気を帯びた伸縮自在のしつぽがルーファスを襲う。『しつぽふにふに』という打撃魔法（？）だ。

ローゼンクロイツのお尻から伸びたしつぽが、自由気ままに縦横無尽に暴れまわる。

辺りを歩いていた生徒たちも一目散に逃げる。

そんな中、逃げ遅れたルーファスにしつぽ直撃！

ビリビリと肩に電気が走つたルーファスは腰痛回復。

『しつぽふにふに』の電力は低圧から高圧。気分と運次第で

違う。今のは運がよかったほうだ。

次のしっぽがルーファスの足元に迫る！

ルーファスジャンプ！

しっぽは一周して再びルーファスの足元に迫る！

ルーファスジャンプ！

またしっぽは一周して再びルーファスの足元に迫る！

ルーファスジャンプ！

またまたしっぽは一周して再びルーファスの足元に迫る！

ルーファスジャンプ！

ローゼンクロイツとルーファスの奇跡のコラボレーション技、

しっぽ大縄跳びが生まれた。

自然と生徒から拍手がもらえる必殺技だ。

なんてことをしているうちにローゼンクロイツが飽きた。

突然、四つ足をついてローゼンクロイツが走り出した。

通常のダッシュよりも早く、運動苦手なルーファスには到底

追いつけない。

しかし、ルーファスは行き先の見当がついていた。

学院内で発作が起きたとき、いつもローゼンクロイツが行く

場所があるのだ。

寄り道しながら破壊活動を行なうローゼンクロイツをほっと

いて、ルーファスは一直線での場所に向かった。

寄り道のせいも、ルーファスとローゼンクロイツがその場に

たどり着いたのは、ほぼ一緒。

学院の時を司る何十メートルもある時計塔。入り口からロー

ゼンクロイツは一気に駆け上る。すぐにルーファスもあとを追った。

階段をゼーハーゼーハー置いてけぼりのルーファス。

その耳に甲高い金の音が鳴り響いた。

ゴーンと一発、ローゼンクロイツが巨大な鐘にヘッドアタック！

そのままローゼンクロイツは気を失った。

駆けつけたルーファスはローゼンクロイツを抱きかかえる。

「大丈夫ローゼンクロイツ？」

「……ふにゃ？（ふにゃふにゃ）」

目をパツチリ開けたローゼンクロイツからは、耳もしっぽも消えていた。元の人間に戻ったのだ。

なぜか近距離で見詰め合う二人。

ここでローゼンクロイツがひと言。

「ボクの唇を奪う気？（ふあふあ）」

「違うし！」

「……知ってる（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。いつものように、またからかわれた。

ローゼンクロイツはルーファスト別れたあと、お世話になっている修道院には戻らず、国立図書館に足を運ばせた。

図書館の中に入ったローゼンクロイツは、案内板も見ずにスタスタと歩いていく。まるで図書館の見取り図と、本の配置を

完璧に覚えている足取りだ。

そして、迷わず手を伸ばして一冊の本を取る。

分厚い表紙の本だ。この本は枕になるほか、武器にもなる代物だ。実際の用途は薬草全集の第一巻だ。

ページをパラパラと開き、中身を確認していく。パラパラ漫画を見るときのスピードだ。

パタンと本を閉じて、本棚に戻して代わりに本を取る。薬草全集の二巻目だ。

再びパラパラとして、パタンと閉じて、本棚に戻して代わりを取る。

その作業を何度も何度も繰り返した。

薬草全集は今のところ一〇〇巻以上を数え、新しい薬草が出るたびに続巻されている。

そんな本を全部確認する勢いでローゼンクロイツはパラパラしていた。本当に確認できているのかは疑わしい。はたから見たらパラパラしてるだけだ。

そのとき、ローゼンクロイツの手がピタリと止まった。

指先はある項目に置かれている。

レインボーマタタビと呼ばれる植物だった。

そして、閉じた。

読むの早っ！

数秒でローゼンクロイツはページ丸ごと記憶した。文字情報としてではなく、映像情報として脳には保管されている。けれど、この人間コンピューターは不良品なので、いつ忘れるとも

限らない。

「…… 忘れた（ふにゃ）」

貸し出し不可、コピー厳禁、盗難はもちろんだメ。

仕方なく再びページを開く。

「…… ページ忘れた（ふにゃ）」

いつにも増して深刻そうな表情を作るローゼンクロイツ。自分の不調に自分が一番気付いているのだ。

あまりにも物忘れが激しすぎる。

生活に支障が出るレベルまで達している。

昨日の晩御飯なんて忘却の彼方だ。

今日の朝食だって忘却の彼方だ…… 食べていないことすら、

もう覚えていなかった。

急にローゼンクロイツは辺りを見回した。

そして、ボソツと。

「…… ここどこだっけ？（ふにゃ）」

重症だ。

生活に支障が出るどころではなく、生きることすら困難になりそうな状況だ。

しばらくローゼンクロイツは辺りを見回して、なにか納得して頷いた。

「…… 図書館か（ふあふあ）」

よかった、かろうじて思い出したようだ。

だが、今手にしている本を、なぜ手にしているのか思い出せない。

とても重要な本だったはずなのに、なんで図書館にやって来たのか思い出せなかった。

しかし、偶然にも今手が乗っているページこそが、レインボーマタタビのページだった。なのに、それすらローゼンクロイツは気付いていない。

結局、ローゼンクロイツは家路に着くことにした。

もちろん、出した本を本棚に戻すことを忘れて図書館をあとにした。

そんな一部始終を本棚の影からウオッチングしていたのは、アインだった。

ローゼンクロイツが机の上に残っていた本を、すかさず確認するためにダッシュ。

「(ガイア出版の薬草全集?)」

開かれたページにはレインボーマタタビのことが、ズラズラ一つと書いてある。

ポイントだけ押さえると、レインボーマタタビは猫の霊と交霊したり、猫憑きと呼ばれる猫に憑依された人物の猫の人格を呼び起こしたり、時には取り憑いた猫を惹き付けて引き剥がすことにも使えるらしい。

猫人に変身するローゼンクロイツは、もしかして猫に憑依された猫憑きなのだろうか?

だとしたら、このレインボーマタタビを使えば、クシャミで発作が起きることがなくなるかもしれない。それは周りの人々にとっていいことだ。

しかし、アインにとっては違うらしい。

猫人に変身したローゼンクロイツをモーターするアイン。顔がニヤけている。

「萌え〜」

ローゼンクロイツのネコミミは、マニアの間では萌えなのだ。しかし、本人が困っていて、治したいというのならばアインも協力を惜しま……ないかもしれない。

揺れ動くアインの心。

ネコミミのローゼンクロイツも捨てがたいのだ。

あんなカワイイ姿が見納めなんて、そんなこと耐えられないでも、それでローゼンクロイツが喜んでくれるなら……。

揺れる乙女心。

急に熱が冷めてアインは視線を止めた。

「(絶滅種?)」

そう、絶滅種。

レインボーマタタビは絶滅種だったのだ。つまり、この世にはもうない。

万が一、秘境や魔境の奥地には、生息している場所があるかもしれない。が、そんな場所がどこにあるかもわからない。塩に埋もれた砂糖粒を探すようなものだ。

アインは微笑んだ。

ネコミミローゼンクロイツ安泰

激しい物忘れと格闘しながら、ローゼンクロイツは通常の二

倍の時間をかけて宿舎に戻って来た。

聖カッツサンドラ修道院。この場所でローゼンクロイツは一六年以上過ごしてきた。

あの雪の晩、ローゼンクロイツを拾ったのは、ルーファスの母だった。ルーファスが生まれる以前のことだ。

夕食を断り、ローゼンクロイツは早い時間からベッドで横になつた。

記憶が抜けていく感覚がする。

風が抜けるように、次々と記憶がどこかに抜けていく。

深い闇が瞼の裏に現れる。

そして、再び瞳を開くと光が広がる。

見覚えのある景色。

噴水のある広場から空を見上げると、時を奏でる時計塔が見えた。

そこはクラウス魔導学院の中庭だった。

中庭は昼寝をしていた“彼”は誰かに声をかけられた。

「　　ちゃん！」

桃髪の仔悪魔が駆け寄ってくる。

“彼”は『違う』と呟いた。

それと同時に桃髪の仔悪魔が消え去り、空色のドレスを着た人影が現れた。

“彼”はその人物の名前を思い出そうとした。

空色のドレスを着た人物は、幼馴染みの。

「やあ、ローゼンクロイツ」

と、「彼」が言った瞬間、「彼」の身体から何かを飛び出し、空色の身体に吸い込まれていった。

「やあ、へっぽこクン（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは意識を取り戻した。夢の中でローゼンクロイツは具現化したのだ。

なにが起きたのかルーファスは理解できなかった。

夢なのに意識がはつきりしている。そんな感覚をルーファスは感じていた。

「これ……夢だよな？」

尋ねるルーファスにローゼンクロイツは頷いた。

「そうだよ（ふあふあ）」

「なんか変な感じがするんだけど？（夢なのに夢じゃないような）」

「ごめんよルーファス、キミの夢を借りたんだ（ふにふに）」

「はあ？」

やっぱりルーファスには理解できなかった。

夢を夢だと理解できることは珍しいが、ルーファスはこれが夢だと理解できた。

目の前にいるローゼンクロイツは夢の住人。ルーファスが作り出した幻想であるはずだった。

頭の整理ができないルーファスを置いてローゼンクロイツが歩き出した。

「じゃ、ボクは先を急ぐから（ふあふあ）」

「ちよっと待ってよ、夢を借りたってどういうこと？」

「そのままの意味だよ（ふあふあ）」
夢ならでは意味不明さだ。

ため息をついて嫌そうにローゼンクロイツは説明をはじめた。
「ここはキミの夢で、ボクは別の場所で眠っているんだ（ふう）。ボクはボク自身を忘れそうになって、ボクをよく知る人物が感知する特殊な電波を出し、夢の中でボクを召喚してもらうことによって、記憶とアニマを取り戻したわけさ（ふにふに）」

「はあ？（意味がわからない）」

「わかりやすく言うと、ここはキミの夢だけだけど、ボクはボク自身の意志を持って活動しているということだよ（ふあふあ）」

「はあ？」

「……バカ（ふー）」

いかにも作った呆れ顔でローゼンクロイツはため息をついた。
挨拶もなしてローゼンクロイツは踵を返して歩きはじめた。
もうルーファスなんかにかマッてられないといった感じだ。

スタスタ歩くローゼンクロイツの肩をルーファスが掴んだ。

「待つてよローゼンクロイツ」

振り返ったローゼンクロイツは、いつも以上に無表情で言う。

「私的な用事があるから、じゃ（ふにふに）」
片手をあげてさようなら。

再びローゼンクロイツは歩き出した。

ルーファスは少し不満そうに頬を膨らませ、それでもローゼ

ンクロイツの後を追った。

今しがたまで魔導学院だったはずなのに、気付けばそこは国立図書館の中だった。

本棚に手を伸ばすローゼンクロイツ。

しかし、その手は本棚ではなく、自分の頭に寄せられた。

「……頭痛が痛い（ふにふに）」

言葉の誤用だ。正確には『頭が痛い』もしくは『頭痛がする』だろう。

頭を押さえたローゼンクロイツは動かなくなってしまった。

心配するルーファスがすぐに駆け寄った。

「だいじょぶローゼンクロイツ？」

「……ムリ（ふにゃー）」

普段、無表情のローゼンクロイツが、マジで痛そうな顔をしている。

ローゼンクロイツはそのまま床にぺこっと座り、本棚を指差してルーファスに頼みごとする。

「本を探して欲しいんだ（ふにゃー）」

「どんな本？」

「……忘れた（ふあふあ）」

「はあ？ それじゃ探せないよ（なに探すかわかってても、この図書館迷うんだから）」

困ってしまったルーファス。

王都にある国立図書館は世界でも有数の規模を誇る大図書館だ。この図書館に務めている司書ですら、自分が担当する区画

以外の本棚になにがあるか知らない。この図書館の本を全て把握しているのはただひとり、いや一匹。館長の老ネズミだけである。

ルーファスは何者かの視線を感じた。しかも、かなり強い視線だ。なのに姿が見えない？

「この視線って……まさか……アインさん！」

ルーファスは本棚の影に向かって声をあげた。

「はい！」

という声が帰ってきたのは、ルーファスが向くあさつての方向。そこからアインがひよこつと顔を出した。

さすがローゼンクロイツのストーカー。夢の中まで追ってくる執拗さだ。だが、ここはルーファスの夢だ。

ローエンクロイツは瞬時悟った。

「しまった、ボクの電波が彼女まで呼んでしまったらしい（ふにふに）」

その意味するところは、ルーファスの夢の中にあつて、ルーファスから独立した固体を意味する。

簡単にいうと、ローゼンクロイツと一緒に、人の夢に他人が土足で上がりこんだ状態だ。

ローゼンクロイツを強く想うアインは、ローゼンクロイツの発したSOS電波をキャッチして、ルーファスの夢の中にまで追っかけてきたのだ。

アインは背中の後ろから、一冊の本を胸の前に出した。

「これをお探しじゃありませんか？」

ガイア出版の薬草大全集。

それを見たローゼンクロイツの眼が、カツと見開かれて五芒星が浮かんだ。

「……それだ（ふにふに）。やっと全てを思い出したよ（ふにふに）」

テーブルに座ったローゼンクロイツは、受け取った薬草全集のページを開いた。

「現実世界のボクは物忘れが激しくて、そのまま放置すればボクは全ての記憶を忘却して廃人になるんだ（ふにふに）。けれど、夢の世界でのボクは深層心理に近く、忘却してしまった記憶も思い出すことができる（ふにふに）」

「でも、現実の君はどうすんだよ？」

ルーファスが尋ねると、ローゼンクロイツはページを指さした。

「だから今からそれを治すために、ドリームランド夢の国 に向かうんだよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの指先はレインボーマタタビの挿し絵を指していた。

申しわけなさそうにアインがボソツと。

「あの、絶滅と書いてありますが？（いや〜ん、あたしったらローゼンクロイツ様に物申しちゃった）」

「夢の国 は現実世界から失われたモノがある場所（ふあふあ）」

パタンと本を閉じて、ローゼンクロイツは席から立ち上がり、

辺りをゆっくりと見回しはじめた。

ローゼンクロイツの頭で、ぴよんのアホ毛が立った。電波を受信したのだ。

「あつちだよ（ふあふあ）」

さつさと歩くローゼンクロイツに二人は無言でついて行った。ピタリと止まったローゼンクロイツ。微動だにしない、機械的な止まり方だ。

そこには扉があつた。

ローゼンクロイツは知っていたが、残る二人はそれを知らない。この扉は現実世界の図書館にはないのだ。

懐から銀の鍵を出したローゼンクロイツは、それを差し込み扉を開いた。

下へ続く階段が長く伸びている。先は暗く見通すことが出来ない。いったいどこに続いているのだろうか？

無言でローゼンクロイツは階段を下りること七〇段。

大きく広がった世界に、ただひとつの神殿が存在していた。

古代文明が栄えていた頃に良く見た、石の柱が立ち並ぶ石造りの白い神殿だ。

神殿の中はそこら中に蠟燭が立っていた。

無限とも思える蠟燭の山の中には、火の灯っているものとそうでないものがある。

神殿の中をキョロキョロ見渡すルーファス。

「どこここ？（ものすごく熱いよ）」

アインは空色ドレスの背中ばかり追いかけている。

「（ローゼンクロイツ様、颯爽と歩く後姿も萌え〜）」

見られているローゼンクロイツは無言で歩みを続ける。

長く続いた廊下の先には、十数メートルの高さを誇る扉が聳え立っていた。

その前にひっそりと立つ神官。

「この神殿になんの用かね？」

永遠に若い神官はローゼンクロイツに尋ねた。

「夢の国 に行きたい（ふあふあ）」

夢見る神殿 の神官は、どこまでも澄んだ瞳でローゼンクロイツを見つめた。

ローゼンクロイツの瞳はエメラルドグリーンに輝いていた。

「宜しいでしょう、この扉を開けられるのならば、先に進むことを許可しましょう」

巨大な扉に鍵穴は見当たらない。力で開くとも到底思えない。

ローゼンクロイツは扉にそつと触れた。

片手で触れただけなのに、重く重い扉は動きはじめた。

扉はローゼンクロイツを受け入れたのだ。

力ではない。扉は人を見た。その者が秘めたるモノを視たのだ。

巨大な口を開けた夜よりも深い闇。

臆することなくローゼンクロイツは足を踏み入れた。

続いてアインも追っかける。

残されたルーファスも意を決した。

「待つてよ、ひとりにしないでよ」

深い闇は三人を跡形もなく呑み込んだ。

目は意味を成さなかった。

真つ暗な闇の中を、ただひたすら階段を下りる。

ルーファスは不安そうに呟く。

「ローゼンクロイツいるよね？」

返事は返ってこなかった。

「アインはいるよね？」

「いますよー」

「よかつた（僕独りだつたらどうしようかと思つた）」

「ローゼンクロイツ様もちゃんといいますよ、匂いでわかります

（アフロディテのローゼン・サーガという香水を使つてるのチ

エック済みです！）」

アフロディテとは大手香水メーカーの名前だ。

階段は一〇〇段、二〇〇段と続き、先の見えない闇に不安は募つた。

「アインいるよね？」

またルーファスが尋ねた。

「いますよー」

「ローゼンクロイツは？」

返事はなく代わりにアインが答える。

「ちゃんといいますよ、匂いでわかります！」

匂いでわかるわかると言われているが、別に香水の匂いがきついわけじゃない。アインが変態なのだ。

階段はさらに続き、五〇〇段を数え、ついに七〇〇段を数えたとき、世界が光と闇に分かれた。

左右に置かれた蝋燭台の上で炎がゆらめいている。その中心にあるのは真鍮の扉。そして、その前には門番が二人いた。

二人の少女は同時に口を開いた。

「私たちはナイとメア。夢幻の扉を守る者」

明るい顔をした少女と、陰気な顔をした少女。表情こそ違えど、二人は瓜二つの双子だった。

ローゼンクロイツは両手をぐーにして、ナイとメアに差し出した。開かれた拳から金貨が一枚ずつ、二人の少女の小さな掌に落ちた。それは古い時代の金貨だった。

門番は左右に分かれた。

真鍮の扉が開かれる。

「足元に注意ください」

扉の向こうに広がる空色の光。

ローゼンクロイツはどこかに隠し持っていた日傘を開き、後ろの二人に命令する。

「どこでもいいからボクの身体に捕まって（ふにふに）」

言われたとおり、ルーファスとアインはローゼンクロイツの二の腕に捕まった。

「（二の腕萌え）」

何気にアインはローゼンクロイツの二の腕をふにふに。本当は後ろから足を絡めて抱き付きたかったが、そこは強い精神力で抑えて抑えて抑えきった。

「行くよ（ふあふあ）」

ぴよんとローゼンクロイツは扉の中に飛び込んだ。つられて二人も青い世界へ飛び込む。

どこまでも続く青い空と巨大な入道雲。

今日もとってもいい天気

真下を見たルーファスが叫ぶ。

「ぎゃああああ！」

「うるさいよルーファス（ふー）」

「だ、だつて……」

ガタガタ震えるルーファスの視線の下には、キラキラと輝く海が広がっていた。

日傘をパラシユート代わりにして、ふわりふわりと綿毛が舞うように、ゆっくりと三人は落ちていった。

海の上にはただひとつ、降りられそうな場所があった。大きな船の甲板だ。

ふわりとふわりと風に運ばれながら、見事三人は甲板に無事着地した。

が、ルーファスの目に飛び込んできた帆に描かれたマーク。蛇と髑髏のマークはどー見ても正義の味方には見えない。

甲板に下りてきた三人組のせいで、船内は少し慌ただしくなり、物騒な武器を装備したガラの悪い男どもが湧いてきた。

中でも目を引いたのは、大きなハットを被り眼帯をした男。絵に描いたような海賊の親分だ。

とりあえずルーファスは笑っつけ。

「あはは、ちょっと邪魔しますよー（笑えない笑えない）」
物騒な輩を前に、アインはささっとローゼンクロイツを背に
隠した。

「ローゼンクロイツ様には一步も指を触れさせま……せん？
（消えた？）」

ローゼンクロイツの姿が消えた。

いた。

「この船は只今よりルーファス海賊団が占拠するよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは親分の首に短剣を突きつけていた。

海賊船ジャック！

しかも、ルーファスの名前勝手に使ってるし！

敵の親分を人質に取るなんて、なんて卑怯な方法だ。それを
無表情でやってのけたローゼンクロイツ。

「萌ええ〜」

そんなローゼンクロイツにアインは萌えていた。

が、自体はそんな甘くはなく、キツネみたいな顔をした海賊
がローゼンクロイツに銃を抜いた。

「そんな野郎死んだってかまわねえよ、そいつが死んだら俺が
この船の船長だ」

こんなときに内情のゴダゴダが発生した。船長の座を狙って
いたナンバー二が叛逆を起こしたのだ。

しかし、アインは瞬時に動いていた。

ナンバー二の首元にナイフを突きつけ、なんと人質に捕って

しまったのだ。

「これでこっちの勝ちですね！」

が、自体はそんなに甘くなく、クマみたいな顔をした海賊がアインに銃を抜いた。

「そんな奴が死んじまつても、おらがこの船の船長だべ」

船長の座を狙っていたナンバー三だった。

これには船長も怒りを爆発させた。

「どいつもこいつも、この船の船長は俺様だ！！」

何気にさっとローゼンクロイツは船長を解放すると、船長は謎の侵入者三人のことなど忘れ、叛逆を起こしたナンバー二と三に襲い掛かった。

船上の争いはもう止められなかった。

撃ち合い斬り合いの血で血を洗う無残な戦いがはじまった。

その惨禍の中で、ローゼンクロイツはルーファスの腕を引く。

「ルーファスこっち（ふあふあ）」

ローゼンクロイツはルーファスを樽の陰に誘導した。

二人はさっさと身を隠したが、アインはチャンス逃していった。

「あっ、いつ、うっ、えっ、おーっ！」

壺刀をかわし、流れ弾をかわし、強烈なパンチをかわす。トリプルAクラスの運動神経の良さだ。魔導士よりも格闘家に向いていそうだ。

樽の陰から物音が聞こえ、海賊のひとりそれぞれに気付いた。

「そこにいるのは誰だ！」

「は、は……はつくしょん！」

血相を変えたルーファスが樽の陰から飛び出した。

次に樽の後ろからネコミミがひよこつと見えた。

そして、ワケがわからないうちに、海賊は何か横殴りされて、樽と一緒に海へ飛ばされていた。

まさか、巨大海蛇の襲来か！！

と、海賊たちが間違える物体エックスが、縦横無尽に船上で暴れ回っていた。

アインは萌えた。

「しつぽふにふに萌え〜！」

トランス状態のローゼンクロイツが発動した『しつぽふにふに』が暴れていたのだ。

強大な敵を前に海賊たちは結束を取り戻した。

覇権争いなんかよりも、ローゼンクロイツを倒さねばならぬ！

威勢のいい海賊どもがローゼンクロイツに襲い掛か……つたにも関わらず、ひとり、またひとりと空を飛ぶ海賊。

まるでハエでも叩くように、ローゼンクロイツのしつぽが海賊を飛ばす。

ルーファスも必死だった。さっさと隠れて状況を見守る。

「こんな逃げ場のない船上でトランスするなんて……（でも、ねこしゃん大行進じゃなくてよかった。あんなのやられたら確実に船が沈むもんね」

世の中、思ったり口にしたことが現実になることが多い。

ねこしゃん大行進発動！

ローゼンクロイツの身体から、ねこしゃんのぬいぐるみが放出。しかも、これ爆弾。

勝手気ままに走り回るねこしゃんは、物理的衝撃などが与えられるたびに、可愛らしく鳴いて爆発を起こす。

しかも、爆発が爆発を呼び、大爆発になるというオマケつき。船上の大混乱はさらに大混乱になり、硝煙が辺りに立ちこめ、船は揺れに揺れて甲板が噴水を上げた。

誰かが叫んだ。

「甲板に穴があいたぞ！」

言われなくてもわかっている。もうそこから中水浸しだ。

船が徐々に傾き、船首が空に向かってこんにちは。

海賊船が沈むのは時間の問題だった。

ついでに最悪なことに、電気を帯びたローゼンクロイツのつばが、水浸しになった甲板を叩く。

塩分を含んだ水はとても電気を通し易い！

ビリビリつと甲板に立っていた海賊が一気にノックダウン。

痙攣している姿が診るに無残だ。みんなチリチリパーマになっ
てしまった。

そんなとき、ルーファスはアインと一緒にさっさと帆によじ登っていた。ローゼンクロイツとの付き合い方を心得ている。

が、もうすでに帆の先端も海に沈もうとしていた。

ここでルーファス衝撃の告白。

「私泳げないんだけど？」

「マジですかルーファスさん！（運動神経悪いですもんね）」
そしてマジですかついでに、ローゼンクロイツが四つ足で帆を駆けて来ていた。

「にやーっ！」

猫みたいな鳴き声をあげてローゼンクロイツがルーファスに飛び掛かる。

押し倒されたルーファスは海に投げ出され、伸ばした手がアインの服を掴んで道連れに。

三人仲良く海の中にドッポーン！

荒波がすべてを呑み込んでしまった。

「へつくしよん！」

ルーファスは自分のクシャミで目を覚ました。

「……ここは？」

視線を動かすとすぐそこでアインが焚き火をくべていた。

「あ、起きましたかルーファスさん」

「うん、なんとか永眠せずに助かったみたい。君が助けてくれたの？」

「はい、死に物狂いでお二人を運びました（本当は途中で一人捨てようかと思っただけだよ）」

もちろん捨てられるのはルーファス。そんなことも知らずにルーファスは御礼をいう。

「ありがとう、君は命の恩人だね」

「いえいえ、人道的に頑張っただけですから」

人道的にルーファスを捨てなかった。

辺りは砂浜のようで、少し先には森らしき緑が見えた。

しかし、ローゼンクロイツが見当たらない。

「ローゼンクロイツは？」

「ボクならここだよ（ふあふあ）」

ピクツとして振り向くと、ローゼンクロイツはルーファスの真後ろに立っていた。

「脅かせないですよ」

「脅かしてないよ（ふあふあ）。ちょうどコツチの方向から歩いてきただけさ（ふあふあ）」

「何してたの？」

「見ればわかるだろ？（ふー）」

ルーファスは目を凝らしてローゼンクロイツを見た。空色ドレスの裾がひらひら揺れている。いつもと変わらない見た目だ。「どこが違うの？（つむじの位置が一センチ移動してたり、そんなのだったらもわからないよ？）」

そんなアホなことはない。

「服が乾いているだろ？（ふう）」

「あ、ホントだ……ハックション！」

大きなクシャミをしたルーファス服はびしょびしょだ。焚き火に当たっているアインの服もびしょびしょ。海水なのでベトベトもプラスだ。不快感満点！

「どうやって乾かしたの？」

と、ルーファスが尋ねると、

「……企業秘密（ふっ）」

軽く鼻であざ笑われた。

「はくしゅん！」

今度はアインのクシャミだ。

「まさか着替えとがありませんよねえ？」

アインは鼻をすすりながら二人に尋ねた。

するとローゼンクロイツは砂浜に打ち上げられた貝殻を指さした。

「貝殻水着に着替えるといいよ（ふあふあ）」

「そんな恥ずかしい格好できません！（でもローゼンクロイツ

様は言うなら……）」

「……ウソ（ふっ）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。

そのローゼンクロイツスマイルにアインシヨック！

でも、なぜか顔がニヤけてしまう。

ぶつちやけ、アインはローゼンクロイツになにされても『萌

え』で片付くのだ。

ルーファスはびしょ濡れの服を脱ぎはじめた。そこへローゼンクロイツがすかさずツツコミ。

「貝殻水着に着替えるの？（ふあふあ）」

「違うよ！ 私の魔法で服を乾かそうと思っただけだよ」

とりあえず分厚い上着の魔導衣を脱ぎ、砂浜の上にポイと投げた。

そして、得意の風魔導エアプレッシャーを放った。

圧縮された空気が魔導衣にぶつかり、舞い上がった砂と一緒に魔導衣もぶっ飛んだ。

そして、そのまま魔導衣は強風に煽られ飛んでいく。しかも砂まみれの魔導衣。

「ま、待ってよ！」

魔導衣を追いかけるルーファス。その姿がかなり滑稽だ。

そんな姿を見ながらアインがボソツと。

「あの本当にクラウス魔導学院の生徒なんですか？」

「入学に運を全部使ったんだよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの言うとおりのような気がする。

「そうなんですか……（あたしのほうが魔導の才能あるかも）」

ちなみにアインは努力と根性と、ローゼンクロイツへの“愛”で入学した。

ちなみにローゼンクロイツはなんとなく入学できた。

「じゃ、そろそろ行くよ（ふあふあ）」

ルーファスが走って行った方向とは真逆にローゼンクロイツは歩き出した。アインも構わず歩き出した。もちろんカマってもらえてないのはルーファスだ。

「ま、待ってよあ〜！」

ルーファスは海に落ちた魔導衣を拾い上げ、森に入っただけ二人を追った。

ちなみに、言うまでもないが、魔導衣はさっきよりもびしょびしょだ。

マジ頭弱いルーファス。
通称へっばこ魔導師の二言なし！

森の入る前から、島の中心に高い丘があるのが見えていた。

そこへローゼンクロイツは向かうのだと言う。

「なんで？」

と、ルーファスは尋ねた。

「あつちに何かあるような気がする（あふあふ）」

漠然としない答えが返ってきた。

“何か”とはいったい何か？

無人島の定番といえば、海賊の隠した財宝やそれを守る怪物？

ふと、アインは昔読んだ小説を思い出した。

「昔『宝島』という小説読んだことありますよー」

その話にルーファスは乗った。

「知ってる知ってる、洞窟に隠された財宝をドラゴン守ってる話でしょ。財宝に取り付かれた人間が欲のあまりドラゴンになつたとか？」

「違いますよ」

アイン否定。ルーファスは話に乗れなかった。

「ドラゴンなんて出てきませんし、財宝は丘の上にあるんですよ」

「そうだったけ？（あれ）、だったら欲深いドラゴンが出てくるのなんだっけ？」

ルーファスの悩みはローゼンクロイツが解消した。

「ルーファス、それ小説じゃなくて伝承（ふあふあ）。ファブニルという猛毒を持ったドラゴンの話だよ（ふにふに）」

「あーそれぞれ、たぶんそれ（のような気がする）」

なんて雑談に花を咲かせようとしたとき、三人の足が急に止まった。

ドドドドドドツと走ってくる音が後方から聞こえる。

振り返るとノッポとチビの二人組みがこつちに近づいてきた。ノッポは羽こそ見えないが、どう見ても首から上がニワトリだ。もう片方のチビはシャツから飛び出た出べそを覗かせ、巨体をゆっさゆっさ揺らし、首から上は控えめに見てもブタだった。

ルーファスたちに追いついてきたニワトリマンは、ビシッと白い羽に覆われた手で指さした。

「おまえら、オレたちの財宝を横取りする気だな！」

ブヒブヒ息を切らせたブタマンも追いついてきた。

「アニキの言うとおりだ。おまえら、ポクたちの財宝を横取りする気だろ！」

ルーファスは呆気に取られ口をポカーン。

「はあ？ 財宝ってなに？」

ルーファスが不思議な顔で尋ねると、ニワトリマンがトサカを立てて詰め寄ってきた。

「財宝っていったら、丘の上にある財宝に決まってるじゃねえか！」

「アニキの言うとおりだ！」

ブタマンが言った。

そんなこと言われても、別に財宝を探しに来たわけでもなく、ローゼンクロイツがなんとなく歩くほうにみんな歩いてただけだ。

が、すでにアインの目は輝いていた。

「財宝って本当ですか？ ローゼンクロイツ様財宝ですって聞きましたか!？」

「……興味ない（ふあふあ）」

さらっとローゼンクロイツは流した。

だが、ニワトリマンとブタマンは信用してない。

「ははくん、オレたちをそうやって油断させる気だな？」

「だなー！」

させる気もなにも、最初から財宝目当てではない。

だが、ニワトリマンとブタマンは疑いを深める。

「オレたちクック&ロビンを出し抜こうなんて甘いぜ」

「甘いぜ！」

威勢良く決めたところで、アインが質問。

「あの、お二人は何なんですか？」

この質問にクック&ロビンはシヨック！

「オレたちクック&ロビンを知らないだど？」

「知らないだどー！」

「オレたちは世界を股に掛けるとレジャーハンターだ」

「だー！」

トレジャーハンターとは、簡単にいうと宝探しを生業にしている人たちのことだ。

宝探し それは男の夢とロマン！

クック&ロピンは三人組みを追い抜いて走り出した。

「宝はオレたちがいたたくぜ、あばよ！」

「あばよー！」

後姿がどんどん小さくなって見えなくなった。

ルーファスがボソツと。

「なにあれ？（変な人たち）」

トレジャーハンターだ。ニワトリ人間とブタ人間のコンビの。

アインは目を輝かせていた。

「この島に財宝があるんですね！ きっと大海賊の船長が『処刑の瞬間に、オレの財宝を見つけられるもんなら見つけてみな！』なんて遺言を残した財宝に違いありませんよ！」

あくまでアインのモーソー。

「あたしたちも早く行きましょう！（金銀パール、もしかしたらもつとスゴイものかも！）」

財宝を探したくてウズウズ。

でも、ルーファスとローゼンクロイツは探す気なし。

「あの二人の言っただこと信用できないよ（ノリからして胡散臭い）」

「……興味ない（ふう）」

でも、アインはめげない子。

「宝探しは男のロマンなんじゃないんですか！」

うえーん、と大粒の涙をこぼしながらアインは走って行ってしまった。

ルーファスはローゼンクロイツと顔を見合わせた。

「どうする？」

「なにが？（ふあふあ）」

「なにつて、アイン行っちゃったよ」

「うん、知ってる（ふあふあ）」

「知ってるじゃなくて、一人で行かせていいの？」

「知らない（ふあふあ）」

「知らないとかじゃなくてさー」

「じゃ、知ってる（ふあふあ）」

絶対考えて返答してない。

スタスタとローゼンクロイツは歩きはじめた。アインが泣きながら走って行った方向だ。だが、アインを追うためではなく、はじめからそっちに進んでた方向だからだ。

男のロマンを男にわかってもらえず、一三歳の乙女アインは泣きながら走っていた。

森を抜け、小高い丘を猛ダッシュで駆け上る。足腰が丈夫なアインだった。

そうしてしばらく走るうちに、丘の頂上に到着してしまった。丘の上には大きな湖があり、巨大な影と二人組みがいた。

クック&ロピンを発見！

しかも、二人はドラゴンに襲われていた。

トカゲを大きくしたような地竜が暴れ回っていた。

身長の高いクツクよりもドラゴンの頭は上にあり、全長はクツクの三倍以上もありそうだ。

アインは見てみないフリをした。

「あたしはなにも見てません、ごめんなさい！」

そして、ドラゴンに襲われている二人を見捨てて逃亡。

丘を全速力で駆け下りた。昇るときの一・五倍のスピードだ。三分の二くらい下ったところで、アインは二人を発見した。

ルーファスとローゼンクロイツだ。

「助けてくださいピンチです！」

大声をあげてアインは駆け寄る。

「なにかあったの？」

首をかしげてルーファスが応じた。

「クツク&ロビンさんがドラゴンに襲われています！」

それを聞いたルーファスは凍った。顔が青くなってしまうている。

少しして解凍したルーファスは無言で丘を下りはじめた。のを、ローゼンクロイツが袖をグイと引っ張って止める。

「行くよ、ルーファス（ふあふあ）」

「ウソだろ、なんで行かなきゃいけないんだよ」

「用事があるからに決まってるだろう（ふあふあ）」

「じゃあ私はここで待つてるから、頑張つてよ」

自ら危険な場所に飛び込みたくない。けれどローゼンクロイツはルーファスの裾を放さない。

「行くよ（ふあふあ）」

「ヤダ」

「行くよ（ふーっ）」

「絶対イヤだ」

「行くよ（ふーっ！）」

「絶対にヤダからね！」

ついにルーファスは地べたに座り込んだ。

ローゼンクロイツはそれを無言で見つめ、突然魔導を放った。放たれたのは白銀に輝く魔導のチエーン。拘束魔導のエナジーチエーンだ。

エナジーチエーンはルーファスの首に巻かれた。

「行くよ、ポチ（ふあふあ）」

「ポチじゃないし！」

ペット扱いされたルーファスは怒りを露わにするが、首を引っ張られて息を詰まらせた。

「うっ！（苦しい）」

「行くよ、タロウ（ふあふあ）」

名前変わってるし！

ぶっちゃけ、なんでもいいのだろう。

ローゼンクロイツに引きずられるルーファスを見ながら、アインはニヤニヤしていた。

「ご主人様とペット……萌え」

趣味が怪しい路線に入っている。

抵抗しても首が絞まるだけなので、ルーファスは仕方なく鎖

を引かれた。

丘をどんだん登り、頂上がそこまで迫ってくると、不気味な悲鳴が聴こえた。

「コケコツコー！」

かなり不気味な悲鳴だ。誰の悲鳴なのかは見なくてもわかった。

続けて悲鳴第二弾

「ブヒーッ！」

こつちも誰の悲鳴かすぐにわかった。

まるで動物鳴き声当てクイズだ。

クック&ロビンの悲鳴を聴いて、アインは内心ホッとした。

「よかった、まだ生きてた。死んでなければ見捨てたことにならない、あたしルール！」

頂上に三人が到着すると、クック&ロビンは湖の周りをドラゴンと追いかけてこしていた。

ドラゴンは四つの足で走り、口からは炎を吐いていた。

ニワトリとブタの丸焼きは目前だ！

でも、二足歩行するニワトリとブタは食べるのに気が引ける。ニワトリは元々二足歩行だけれど。

空に逃げれば助かるだろうに、かわいそうなことにクックはニワトリ人間だった。

飛べない鳥の代表ニワトリ。

ドラゴンの吐いた炎がロビンの尻を撫でた。

「ブヒーッ！」

「おいしそうな匂いが辺りに漂う。

ジュルつとアインはヨダレを拭った。

「美味しそう（お肉最近食べてない）」

バイトで授業費を稼ぐアインの私生活が垣間見れた。

見ているだけで自分たちを助けようとしなない三人組にクックが叫んだ。

「助けるコンチキショー！」

いつもならここでロビンが続くのだが、鼻息ブーブー息絶え絶えでそれどこじゃなかった。

助けると言われた三人組は動こうとしなかった。

ルーファスは、

「危ないし」

ローゼンクロイツは、

「……関係ない（ふにふに）」

アインは、

「（早く焼けないかなあ）」

食う気満々だった。

クック&ロビンがルーファスに向かって来る！

当然、ドラゴンも向かってくる！

ルーファス逃げる！

「助けて！ 助けてローゼンクロイツ！」

助けてくれるかは別として、メンバーの中では実力ナンバーワンだ。

「仕方ないなあ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは日傘を剣のように構えた。

「ライラライラ、宿れ光よ！（ふにふに）」

古代呪文ライラによって、日傘に聖なる光が宿った。

ルーファスの真横を抜ける蒼い風。

疾風はクック&ロビンの横も抜け、ドラゴンの真後ろに回った。

振り下ろされる光の剣。

閃光は連続して放たれて、輪切りにされたドラゴンの尾が山積みされた。

華麗なる包丁さばき……じゃなかった。剣さばきだ。

ローゼンクロイツが肉弾戦で戦う姿を見て、アインはちょー感動していた。

「萌えっっ！！ ローゼンクロイツ様って足も速かったんですね！」

まさに瞬く間に駆けたローゼンクロイツは、一瞬にしてドラゴンの尾を輪切りにした。

ルーファスは別に驚くわけもなかった。

「そうだよ、ローゼンクロイツは私の逃げ足より早いよ」

「だってローゼンクロイツ様が徒競走で堂々と歩くのは伝説じゃないですか！（しかも聞いた話によると日傘まで差してたとか）」

ローゼンクロイツ伝説のひとつだった。

大地を揺らし、炎を吐くドラゴン。尾を斬られてかなり激怒している。

が、ローゼンクロイツはそんなことなど気にせず、黙々と次の攻撃の準備をしていた。

日傘をバットのように構え、振りかぶった！

積み重ねられてダルマ落とし状になった輪切り肉を打つ！

打つ！

打つ！

そして、また打つ！

ぶっ飛んだ輪切り肉はドラゴンの顔面に連続ヒット。

よるめいたドラゴンが後ろ足を引いた瞬間、ドラゴンが冷や汗たたり。後ろ足は宙に浮いていた。

切り立った崖からドラゴン転落。

雪が積もってたら、雪だまになっちゃうよくらいの勢いで、崖を転がって落ちていった。

さようならドラゴンさん。ご冥福お祈りいたします。

ドラゴン退治完了。ローゼンクロイツは強かった。

そんなこんなでクック&ロビンは財宝を手に入れようと湖に近づいていた。

「アニキ、ついに財宝がボクたちの手に！」

お尻が焦げているのも忘れ、ロビンは鼻息荒く気合いが入っていた。

もちろんクックも気合い十分だ。

「おうよ、湖の底に沈んでる財宝を湖の精に頼んで貰おうぜ！」

そんな話そっちのので、ローゼンクロイツは湖の周りに生息

している草木を見ていた。

「……見つけ（ふにふに）」

七色をした小さな木の実。それはまさしく薬草全集に載っていたレインボーマタタビだった。

アインはローゼンクロイツの後ろから、レインボーマタタビを覗き込んだ。

「それを何に使うんですか？（図鑑には猫の霊をとか書いてあったような気がするけど？）」

「この実を分析しゆて、逆の効果を得る薬を作るんだよーよーよー（ふあふあ）」

突然、ローゼンクロイツは顔を真っ赤にしてフラフラしはじめた。

マタタビに酔ったのだ。

「ひつく！（ふにや）」

しゃっくりみたいに肩を上下させ、ローゼンクロイツは顔面から地面にダイブ！

「大丈夫ですか！！」

慌ててアインがローゼンクロイツを抱き起こそうとしたが、その手が不意に固まる。

ピンチなのはわかってているのに……。

「ネコミミ萌え〜！」

アインは叫んだ。

ローゼンクロイツの頭に生えたネコミミ。

今回はクシャミなしで、マタタビパワーによって変身。

むくつとローゼンクロイツは立ち上がった。

足取りが明らかに怪しく、顔は真っ赤に酔っている。耳やしっぱの先までほんのり赤い。猫返り酔拳モードだ！

いつもよりもクネクネ動く『しっぱふにふに』と、顔を真っ赤にして千鳥足のねこのぬいぐるみよる『ねこしゃん大行進』の豪華二本立て。

しっぱふにふにの電流を喰らって、クック&ロビンが感電しながら湖に落ちた。

その瞬間、湖から水飛沫を上げて薄着の女性が飛び出してきた。

「ぎゃー！」

女性は身体をビリビリさせながら、丘を駆け下りていった。

その女性が湖に住む精霊なんて、誰も知る由もなかった。

自由気ままに、しかも今日はいつも以上に予想できない動きをするねこしゃんとしっぱ。

しっぱがねこしゃんを叩き、爆発を次から次へと起こしている。

そして、全てのねこしゃんに飛び火。

ドーン！！

丘の頂上が大爆発して噴火したように水飛沫が上がった。

その水飛沫の間から、キラキラ光る黄金の輝きが？

まさか、あれが財宝！

それがルーファスの最後に見た映像だった。

机の上で伏せていたルーファスがビクツと目を覚ました。

「……夢っ！？」

追試験の予習をしようと、机に向かっているうちに、いつの間にやら寝ていたらしい。

「なんかリアルな夢だったなあ」

加えて、なぜか全身が痛い。

あれは本当にただの夢だったのだろうか？

その頃ちょうど、魔導学院の医務室でアインは目を覚ました。

「ローゼンクロイツ様！？」

ベッドから上半身を起こし、アインは首をかしげた。

「ローゼンクロイツ様の夢見ちゃった……えへへ」

下校のとき、ローゼンクロイツにビシツとされて気を失ったアイン。そのまま魔導学院の医務室に運ばれ、今までずっとベッドで寝かされていたのだ。

聖カッツサンドラ修道院の宿舎では、ローゼンクロイツが頭を抱えながらベッドから起きていた。

「……気持ち悪い（ふにゃー）」

二日目じゃないのに、二日酔いだった。

ローゼンクロイツはしっかりと握っている拳を開いた。

掌に乗るレインボーな木の実。それはまさしくレインボーマタタビ。ちゃくんと夢の世界から持ち帰ったのだ。

でも、二日酔い。

ひどい吐き気と頭痛に襲われながら、ローゼンクロイツは再びベッドに潜った。

「……死にそう（ふぎやー）」

作った顔ばかりするローゼンクロイツが、この時ばかりは本当に死にそうな顔をしていた。

冒険を共にしたルーファスも全身の痛みで死にそうな顔をしていた。

ニヤニヤ嬉しそうな顔をしているのはアインひとりだった。

第五話 凍える記憶

クラウス魔導学院に入学して初めての遠足。

担任のセイメイ先生の事前情報によると、山の中にある温泉に行くらしい。

「なんて、ウソじゃないか！」

ルーファスは極寒の雪山で叫んだ。

雪景色の綺麗な温泉なんて期待できない。温泉なんてあつても、絶対温泉じゃなくて氷になってる。

入学初の楽しい遠足だと、ワクワクしてた自分が悪かったと、ルーファスは反省した。

他の生徒たちもそうだと。ただの温泉ツアーだと騙されてここに連れてこられたのだ。

なのでみんな普段着。つまり防寒対策ゼロ。

暦の上では秋だが、気温的な問題をいうと秋めいてくるのは秋分を過ぎてから、なのでまだまだ薄着の者も多い。

なのに極寒！

普通に凍死する。

ルーファスはガタガタ震えながら、近くに立っている友人AとBを見た。

「なんで君たちちゃんと防寒対策してんの？」

高そうな毛皮を着込んだクラウスと、普通の毛皮を着ている

ローゼンクロイツ。

クラウスは後ろめたさで苦笑いを浮かべた。

「うちの学院では恒例なんだ、入学早々の雪山登山が」

「なんで教えてくれなかったのさ？」

ルーファスは恨めしそうにクラウスを睨んでいる。

「極秘の野外実習だから」

それをなぜクラウスが知っているのか？

国王の特権だった。

しかも、ここは「クラウス魔導学院」だ。知っていて当然。

ではローゼンクロイツはなぜ？

「あいつがコッソリ教えてくれた（ふにふに）」

その「あいつ」をルーファスは察した。

「ああ、学院長ね」

学院長がローゼンクロイツを愛してるのは周知の事実だ。

ローゼンクロイツ本人はスゴク嫌がっているが、学院の学費や普段の生活費、ローゼンクロイツが世話になってる聖カッサ

ンドラ修道院も、元を辿れば学院長が資金を出しているらしい。

白い息と一緒にローゼンクロイツはため息を吐いた。

「あいつの言うこと聞くのイヤだけど、ボク寒いの手だから

（ふー）」

三人が雑談していると集合の笛が鳴った。

「みなさん、早くお集まりなさあ〜い！」

少し高めの男性の声だ。どこかナヨナヨしている。

東方の烏帽子えぼしを被った色白の東洋人。名をセイメイと言って、

東方から来た魔術士（自称陰陽師）らしい。アステア王国では珍しいタイプの魔導を使う。

ゴージャスな毛皮を首に巻いたセイメイはナヨナヨしながら、ルージユを塗った唇の前で人差し指を立てた。

「はい、みなさあ〜ん、お静かにい」

クラスの生徒たちが集合の合図で集まってきたが、それに伴ってザワザワしはじめた。

「みなさあ〜ん、お静かにい」

笑顔でセイメイは呼びかけた。

しかし、生徒たちは友達どうしで話をやめない。というか、寒いので話してないとやってられないのだ。が、そんなことセイメイの知ったこつちやない。

セイメイの米神に青筋が浮いた。

「アタシの声は聴こえませんかあ？ 静かに……静かにして頂戴……」

それでも生徒たちは静かにならなかった。

「オマエらうつさいんじゃボケナスがっ！（死ぬクソガキ！）」

人が変わったようにセイメイが咆えた。

ピタツと生徒たちが凍りついた。

セイメイ先生は二重人格のオカマで有名だった。

ボ口を出してしまったセイメイは必死に作り笑いを浮かべた。
「おほほほほ……（美しいアタシのイメージが、イメージが

……）」

雅に笑って誤魔化すセイメイ。けれど、口元は痙攣して引きつっていた。

クラスが静かになったところで、今回の雪山登山の趣旨を説明する。

「はい、それでは今回の“遠足”の趣旨をお話しまあす。クラス対抗で山頂を目指します。より多くの生徒が山頂にたどり着いたほうが勝ちよ。もちろん、負けたクラスは恐怖のバツゲームが待ってるわよあん」

より多くの生徒というキーワードのせいで、誰もサボれない状況に陥った。サボったらクラスメートにリンチされるのは確実だ。いつの時代も裏切り者への制裁は厳しい。

加えて負けたらバツゲーム。

すでにバツゲーム的な寒さなのに、本当のバツゲームは考えただけでも恐ろしい。きっとスケールアップした地獄が待っている。

ちなみに付け加えると、未だかつて歴代の生徒たちで山頂までたどり着けたのは、ほんの一握りしかない。

セイメイは生徒ひとり一人に黄色い卵を配りはじめた。

「棄権者や命の危険を感じた人は、この卵を割るようになささいあゝい。ただし、脱落者や棄権者には、キツイ補習が待ってるわよ」

身体が凍ってないクラスが代表で手をあげた。

「質問です。卵を割るとなにが起こるのでしょうか？」

「はい、いい質問ですなあ。卵を割ると救助隊が現場に向かい

ます。それ以上は、ヒ・ミ・ツ（はあと）」

人差し指を唇の前に立てたセイメイ。男なのに色白で美形のせい、妙に艶っぽい。

次にセイメイはマップと整備品を配りはじめた。

「山頂までのマップと、使い捨てカイロを四枚ずつ配りまあす。カイロは太陽神アウロと、炎の精霊サラマンダーの術を施した当魔導学院の特別製、身体の芯までポツカポツカよ」

マップとカイロを配り終えたところで、セイメイは重要なことをつけ加えた。

「カイロは一枚三〇分で切れるようにワザとしてあります」

この発言に生徒一同は、より一層凍りついた。

命を繋ぐカイロが三〇分で切れると？

今はまだ山脈の入り口だが、登るにつれてもつと寒さは増してくる。

死の宣告タイムリミット二時間！

「なお、山頂には二時間では決してたどり着けない予定よ。だからー、他人のカイロを奪うことを前提にしています」

セイメイの眼がキラリーンと光る。

「これはサバイバルなのよ、弱肉強食なのよおおおん！！」
こうして地獄の熱くて寒いサバイバルがはじまったのだった。

午前一〇時ちょうどにサバイバル開始！

一学年は一五クラスあり、クラスごとにスタート地点が違う。なるべく公平にスタート地点は設定されているが、相手は自

然の山なので必ずしもというわけにはいかない。中でもセイメイクラスは、なかなかの難コース。どうやらセイメイがくじ引きで引き当てたらしい。

占術なども得意と自称するセイメイだが、自称はあくまで自称なのだ。

ぶっちゃけクジ運が悪い！

セイメイクラスの中では、すでにいろいろなグループが出来ていた。基本的に仲の良い者同士が手を組み、いろいろな作戦で山頂を目指す。

まだまだ入学して間もない時期であることから、なかなかグループを組むのに時間がかかっているようだ。けれど、こんな雪山を独りで挑むのは無謀だと、誰もがわかっていることなので、なるべくみんな人とグループを組もうとしている。

しっかりと作戦を練ってから出発するグループや、とにかく特攻を決め込んだグループ。溢れたものたちを寄せ集めた、数で勝負のグループなどなど。

ルーファスはクラウスとローゼンクロイツと手を組んだ。三人とも魔導幼稚園からの腐れ縁だ。

クラウスとローゼンクロイツは昔から成績優秀で、魔導学院の一年生ではトップクラスの実力を持っている。この二人と組めば怖いものなしだ。

問題はルーファスだった。

「このカイロ市販のより暖まるねえー」

二人の心強い仲間がいることで、かな〜り余裕だった。カイ

口でポツカポツカなのも、気分を良くしてくれる。

クラウスは自分のカイロをルーファスに差し出した。

「僕のカイロをあげよう」

「えっ本当に、ありがとう助かるなあ」

「冬になるとこのカイロは学院の購買で売り出されるんだ。購買で売られているのは三時間用と六時間用がある」

「全国発売すればいいのに」

「実はこのカイロ一セット売るごとに赤字なんだ。学院の生徒のために、割り引きして売ってるんだよ。だから商売となると難しい」

クラウスはローゼンクロイツにもカイロを手渡した。

……あれ、二枚目？

「二人に渡したのは六時間用だから」

と、何気にクラウスは言った。

のぼせたルーファスの頭でも理解できた。

「持参したの？」

「大臣がどうしても持って行けとうるさいものだから仕方なく」

国王の特権だ。

カイロを受け取った手前、ズルイとは口が裂けてもいえない。出発地点の山の入り口は、平坦な道で雪も数センチしか積もっていないかったが、だんだんと雪に足が埋まり、傾斜が急にりはじめていた。

このサバイバルの舞台はグラーシユ山脈。

アステア王国の北に位置する極寒の山岳地帯。この山脈の周りは比較的温暖な気候なのだが、なぜかグラーシユ山脈一帯だけが異常に寒い。その気温は平均で零下二〇度以下で、最低気温は零下五〇度から六〇度に達する。

ガイアの北極と南極に匹敵する寒さだ。つまりバナナで釘が打てる世界。

こんな氷の大地にも生物はちゃんと住んでいる。

どこの自然界でも同じだが、生物はその場所に適用する能力を持っている。そのわかりやすい例が擬態と言つて、生物は周りの風景に溶け込む模様や形をしている。雪原などでは白い毛並みの動物が多い。

三人が歩く前方の崖をびよんびよん登る物体を発見。

白く長い毛と先の分かれた枝のような角。グラーシユシロシカだ。

「カメラ持ってくればよかつたなあ」

ルーファスが呟くとクラウスがカメラを取り出した。

「あるぞカメラ？」

「はあ？」

冗談で言つたつもりなのに、本当にカメラ持参なんて思つてなかつた。

「大臣が記念に残るから、どうしてもつて持たせてくれたんだ（グラーシユ山脈には固有種しかないらしいからな）」

そう、グラーシユ山脈は世界でも珍しい生物が多く生んでいる。周りの地域に比べ、この山脈一帯だけ寒い。そのためにま

るで隔離された孤島のように、周りの地域と生物の進化が極端に異なっているのだ。

だからってカメラ持参なんて、野外実習を舐めきっている。と、言いたいところだが、今回は湯めぐりの旅と騙されて連れてこられたので、ただの遠足気分でカメラ持参の生徒たちも多かった。

ただし！！

クラウドの場合はグラーシユ山脈に来ることを前提で、地獄のサバイバルがあることを知っていて、それでもカメラを持ってきたのだ。

やっぱりクラウド魔導学院の野外実習を舐め腐っている。

カメラを構えたクラウドがルーファスに指示を出す。

「ルーファスそこに立て、シロシカが後ろになるように……少し右だ、いや、左」

クラウドに促されるままルーファスはカメラの前で位置を決める。

「はい、ポーズ！」

カシャツとシャッターが切られた。遥かなる山脈とシロシカをバックに、記念に残る一枚が撮られた。

クラウドはローゼンクロイツにもカメラを向けた。

「ローゼンクロイツも撮るか？」

「……ヤダ（ふにふに）」

ローゼンクロイツは片手を前に突き出し、ストップの意思表示をした。

「写真に撮られると魂が抜かれるんだよ（ふあふあ）」

仕方なくクラウドスはカメラを提げた。

「そんな迷信を信じているのか？」

「……信じてない（ふにふに）」

「（信じてないのか……）だったら一枚くらいいいだろ？」

「……ヤダ（ふにふに）。写真に撮られると魂が抜かれるんだ

よ（ふあふあ）」

「信じてないのだろ？」

「……ヤダ（ふにふに）。写真に撮られると魂が抜かれるんだ

よ（ふあふあ）」

無駄な押し問答が続く気配がしたので、クラウドはため息を吐いてカメラをしまった。

三人は山頂に向かって歩き出した。

時おりマップを確認しながら慎重に前へ進む。コース取りを間違えれば大幅な時間ロスになるし、最悪遭難。

ぶつちやけ、こんな雪山でマップだけ持っていても意味がない。目印も特にないので、焚き火の道具にしかない。

だが、事前情報を得ていたクラウドスはコンパスを持参していた。

「もうすぐ他のクラスと鉢合わせするかもしれないな」

コンパスでマップを確認するクラウドスの横で、ローゼンクロイツがボソツと。

「コンパス持参なんて……ズルイね（ふにふに）」

「事前情報を得ていたのだから、それを最大限活用するべきだ

る？」

クラウスは温泉ワクワク遠足ではなく、雪山サバイバルだと知っていた。

それでもローゼンクロイツは突っかかる。

「でもねクラウス、こういう訓練はみんな同じ条件じゃないとつまらないと思うよ（ふにふに）」

「君だって冬物のコート着ているじゃないか？ そんなにいうんだったら脱げよ」

「……ヤダ（ふーっ）」

やっぱり寒いのはイヤなのだ。

クラウスは少し考え込み、手に握っていたコンパスを雪の中に投げた。

「これで文句ないだろ？」

コンパスはもうどこにあるのかわからない。

ルーファスは未練を口にする。

「あーあ、別に捨てることなかったのに……」

が、コンパスを捨てた方向から何者かの声が聞こえる。

「このコンパスはオレたち兄弟がもらったぜ！」

「悪く思うなよ！」

雪の中から突如飛び出した人影！

赤と青の魔導衣を来た二人組み オル&ロス兄弟参上！

ルーファスたちの前に立ち塞がったオル&ロス兄弟！

オルはクラウスを指さした。

「オイ、おまえなんで毛皮なんて着てるんだよ！」

次にオスがローゼンクロイツを指さした。

「オイ、おまえなんで毛皮なんて着てるんだよ！」

相手の言い分はもつともだった。

何度も言うようだが、生徒たちは心温まる温泉ツアーだと騙されて連れてこられたのだ。

ローゼンクロイツが一步前出た。

「見てわからないかい？（ふあふあ）
なにが？」

そのままローゼンクロイツは言葉を続ける。

「ボクたちが着てる毛皮はこの山で手に入れたものだよ（ふあふあ）」

無表情でサラツとウソついた。

オル&ロスは顔を見合わせ、兄弟間で無言の意思疎通をした。ローゼンクロイツは普段から無表情で、本当のことも嘘も同じ顔で言う。

だが、オル&ロスは叫んだ。

「「そんなの騙されるかっ！」「」

とは威勢良く決めたものの、その言葉を返すまでには結構時間がかかった。騙されかけたのだ。

オル&ロスは左右非対称に並びロッドを構えた。

「そのコートとカイロは頂くぜ！」

「オレたち兄弟の力を見せてやるぜ！」

襲い掛かって来ようとする双子を前に、クラウスは待ったを

かけた。

「待て、僕は平和主義者なんだ。ここは穩便に解決しようじゃないか」

クラウスは三枚のカイロを取り出した。最初に配られた三〇分で切れるカイロだ。ちなみに本当はもう一枚あるが、使っているという設定なので残り三枚。だけど、本当は六時間用をあと数枚持っていたりする。

この三枚のカイロでクラウスは示談に持ち込む気だった。

「無駄な体力の消耗はお互いに不利益だ。ここはまだ使っていない僕のカイロを三枚差し出すということで手を引いてくれないか？」

又ケ又ケと、本当はカイロいっぱい持つてるクセに。

答えは二倍で返ってきた。

「ダメだ！」「」

理由は簡単だった。

「オレたちは双子だ、三枚じゃ余る四枚にしる！」「」

現在ルーファスグループの手持ちカイロは？

ルーファスは三〇分用を一枚使用中、残り三〇分三枚、六時

間一枚だ。

クラウスは六時間用を使用中、残り三〇分四枚、六時間用？

枚だ。

ローゼンクロイツはルーファスと同じである。

あと一枚カイロを差し出せば引いてくれるかもしれない。

寒がりのローゼンクロイツはもちろん拒否。

「ボクのはあげないよ（ふあふあ）」

クラウスはたくさんカイロを持っていることを知られると不利なので、これ以上のカイロは差し出すことができない。

残るルーファスは？

「わかったよ、私のカイロを一枚あげるよ」

毛皮、毛皮、魔導衣。一番寒そうな格好をするルーファスが、最後の一枚を差し出すことにした。

が、これで万事解決ではなかった。

オル&ロスは不信感を抱いた。

「もしかしてオレたちを油断させる作戦か！ どう思う口ス？」

「そうだ、そうに決まってるぞオル！」

「行くぞロス！」

「おう、オル！」

困ったことにオル&ロス、ヤル気満々！

が、ここでまたクラウスが待ったをかけた。

「待て、全員で戦ったら無駄に体力を消耗するだけだ。ここは代表者を立てて」

「ダメだ！」

ダブルで否定。

「オレたちは二人で一つだ！」

コンビネーション攻撃を得意とするオル&ロス。

ロスは放水車のように手から水を出した。

さすがにすぐは凍らないが、服が濡れたら身体が凍りそうだ。

クラウスは水撃をかわし、お返しにエネルギー弾を投げた。人間のパンチほどの威力だが、スピードは遥かに速い。

エネルギー弾を頬に食らってよろめくロスに、ロッドを天に掲げたオルが回復系魔導アキラを唱えようとする。

「ヒールライト！」

声が木霊しただけだった。

もう一度トライ。

「ヒールライト！」

やはり声が木霊しただけだった。

空を見上げたオルの顔が曇る。そして、空を曇っていた。

ヒールライトは陽光をマナのソースにしている魔導だ。太陽の出ていない寒い場所では使えない。使えたとしても、効果は気持ち程度だろう。

ここでオルは焦りを覚えた。

「(まさか……オレの魔導全般が使えないんじゃない?)」

オルは炎系の魔導を得意としている。こんな場所では威力は大幅減だ。

コンビネーション崩れる。

そのことにロスも気付いたようで、なにかを示し合わせたようにオルと頷き合った。

そして、オルが代表して提案した。

「お互い無駄な体力の削り合いはやめよう。こっちはロスを代表者にするから、そっちも一人出せ」

それはクラウスがさつき提案しようとした案だった。

クラウスはすぐに提案を飲んだ。

「いいだろう、こちらも一人選出するから少し待っていてくれ」

と言つて、ルーファスとローゼンクロイツを呼んで円陣を作つた。

コソコソと三人で話し合つて、じゃんけんポン！

ゲー。

ゲー。

パー。

「やつたー私の勝ちだ！」

一人勝ちしたのはルーファスだった。

ポンとローゼンクロイツはルーファスの背中を押した。

「じゃ、頑張れルーファス（ふあふあ）」

「はあ？ 私勝つたんだから一抜けだろ、二人でじゃんけんしてよ！」

じゃんけんに勝つて戦わずに済むと思つたのに、示し合わせたように残り二人は首を横に振つた。

続けてクラウスがつけ加える。

「そのままじゃんけんに勝つた勢いで行くんだルーファス！」

拳を胸の前で握つて頑張れポーズ。

そんなことされてもルーファスはヤル気ナツシング。

「ムリだから、じゃんけんに勝つて運使い果たしたし」

根性なしのルーファスの背中にローゼンクロイツの蹴り押し炸裂。

おつとと、と押し出されたルーファスは自分の意思に反して、

ロッドを構えて準備万端のロスと向かい合ってしまった。

戦いのゴングなしてロスが攻撃を仕掛けた。

「くらえ！」

水撃が放たれた。

「ちょちょちょー待った！（うはっ、戦いたくないし！）」

こうなったら 逃げるしかない！

ルーファスは背中を見せて逃げ回る。

同じような場所をクルクル回りながら、ルーファスとロスの

追いかっこがはじまった。

物凄い体力のムダだ。

一対一にした趣旨が失われている。

「待て長髪！」

外的特徴でルーファスと呼ぶロス。魔導学院に入学して一ヶ

月ほど、自分のクラスメートの名前すら覚えるのが大変だとい

うのに、違うクラスの生徒の名前まで知らない。

「長髪野郎、ちゃんと戦え！」

「戦わない！」

後ろに束ねた髪をしっぽみたいになびかせ、ルーファスは必

死で逃げた。

ロスの手が伸びる！

ガシツとルーファスの長髪を掴んだ。

「痛いイタタ……」

ルーファスは髪を引っ張られ、首がガクンとなって顎が前に

出た。

もう逃げられない……のはルーファスだけではなかった。

クラウドの横には、エナジーチェーンでグルグル巻きにされたオルの姿が？

そして、ロスの後ろから迫るエナジーチェーン！

「……捕まえた（ふあふあ）」

ロスの身体に巻きついた鎖を握っていたのはローゼンクロイツだった。

捕まったロスは喚いた。

「一対一のはずだろ！」

見事に約束を破られた。

クラウドはとぼけ顔だった。

「日々忙しい生活をしていると、どうでもいいことは忘れてしまうんだ。一対一ってなんの話だい？」

ローゼンクロイツもそれに続いた。

「……覚えてない（ふあふあ）」

数秒の間があった。

「「てめえら……」」

オル&ロスは双頭犬のように吠えた。

だがもう負け犬。

グルグル巻きの双子を同じ所に運び、クラウドは二人から黄色い卵を奪った。

「悪く思わないでくれよ。政治もそうだが、勝たなければなんの意味もないんだ」

奪った卵を地面に投げつけると、中からドーム型避難所がで

きた。人が横になれるくらいの大きさで、双子を放り込むだけなら十分の大きさだ。

まだなんか吠えている双子を中に押し込み、ドームのドアを閉じてしまった。まだ、なんか中で吠えているが放置。

三人は山頂を目指して、再び先を急いだ。

山頂への道はまだまだ遠い。

ルーファスはカイロが切れそうだったので、新しいカイロに張り替えようとしていた。

「どうしようかなあ、六時間用使っちゃおうかな」

横からクラウスが口を挿んだ。

「なに迷ってるんだ？ 使えばいいだろ」

「だってもったいないじゃないか。こういうのはやっぱり三分の使い切ってから使うべきだよ」

そんなルーファスの横で、ローゼンクロイツもカイロを取り替えようとしていた。もちろん六時間用だ。ルーファスみたいなケチ臭いことは言わない。

ローゼンクロイツはお腹に捲り、張ってあったカイロをポイツとして、新しいカイロをペタツとした。

雪の上に捨てられたカイロをクラウスが拾う。

「ダメだろ捨てたら。自然環境を壊す気か？」

「……持ち帰るのダルイ（ふう）」

ものすごく嫌そうな顔を作るローゼンクロイツ。

それを見てクラウスは、

「わかったよ、僕が持ち帰る（まったく環境問題のことなにも考えてないんだな）」

少しプンプンしているクラウドを見て、ルーファスは使い終わったカイロをポケットにしまった。

自分のもお願い

なんて気持ちが悪かったのはい言えない。

自分のゴミは自分で持ち帰りましょう！

ゴミのポイ捨てはやめましょう！

マナーです！！

カイロを張り替えたところで再出発だ。

三人が歩き出そうとしたそのとき、ローゼンクロイツが気配を感じて振り返った。

「……なんかいる（ふあふあ）」

ルーファスとクラウドも、ローゼンクロイツを見ている場所をズームアップ。

雪に混ざってわかりづらいが、白いモッサモッサした毛が見える。

モッサモッサ毛の下から、まん丸の瞳が覗いた。

サルのような顔をしている何かゴツチを見ている。

ちっちゃくて丸っこい、絵に描いたようにカワイイサルだ。

しかも白い。

……クラウドがひらめいた。

「珍獣ホワイキーだ！（まさか本当にいるなんて！）」
感動に興奮して目を輝かせるクラウド。

だが、ルーファスにはイマイチ伝わらない。

「なにそれ？」

「グラーシユ山脈の珍獣ホワイキーだよ！ 目撃情報は何度かあったけど、その詳細な情報はなにひとつわかっていない、未確認生物なんだ！」

「ただの白いサルじゃなくて？」

「なにを言ってるんだ、サルじゃなくてホワイキーだよ。目撃情報によると空も飛ぶらしい！」

「はあ？」

もうなんだかルーファス置いてけぼり。

クラウスは先を独走しすぎ。

ローゼンクロイツは最初から興味なし。

しばらくその場をじっとしていたホワイキーが走り出した。

その後姿に生えた尻尾は体長よりも長いかもしれない。

カメラを構えたクラウスも走り出した。追ってルーファスと

ローゼンクロイツも走る。

足場の悪い雪山をホワイキーは難なく走り抜ける。

必死になってクラウスは追った。その後続く二人も必死……

…なのはルーファスだけ。

ローゼンクロイツは余裕でクラウスの横につけている。

「エナジーチェーンで捕獲すればいいのに（ふあふあ）」

「動きが早い。なにより傷つけないか心配だ」

そう言いながらクラウスはカメラのシャッターを切る。けれど、相手のスピードも速く、こっちも走っているのでどうして

もブレる。

ローゼンクロイツは大気中のマナを手に溜めた。

「なら、スパイダーネット（ふにふに）」

蜘蛛の糸のような物質がローゼンクロイツの掌から放たれた。それは飛ばされた直後は細かったが、次第に大きく広がり風呂敷を広げたように大きくなった。

物体をキャッチする面積も大きく、軽くて柔らかいので物体を傷つけることもない。ただし、軽いために広がると放たれた速度がゆっくりになる。つまりパラシュートと同じ現象になる。遠く離れた場所や後ろからは効果が望めないのだ。

大きく広がったスパイダーネットはホワイキーを外し、風に乗ってローゼンクロイツの後ろに行ってしまった。

「ああっ！」

なにやら前を走る二人の後ろのほうで、なんか聞こえたような気がした。

後ろを向くとルーファスがスパイダーネットに捕まっていた。だがクラウドは気付かず、ホワイキーを追って姿を消してしまった。

運良く気付いたローゼンクロイツがルーファスに駆け寄る。

「ごめん（ふあふあ）」

「ごめんはいいから早く解いて」

ネットに捕らえられた拍子に転倒し、その勢いでネットが身体と絡まってしまった。

ローゼンクロイツは指先から小さなカマイタチを出し、少し

ずつルーファスを傷つけないようにネットを切っていく。ものすごく地味で根気の要る作業だ。

「……飽きた（ふう）」

根気が持たなかったらしい。ローゼンクロイツは手を止めてしまった。

「ちよつとやめないでよ！」

「あとは自分でやるといいよ（ふあふあ）」

「腕が固定されて指先も変な方向向いてるからムリ。てゆーか、君がやったんだから、最後までちゃんとやってよ」

「でも……飽きた（ふう）」

「じゃあせめて私の手が自由に動くくらいでいいからさー」

「だから……飽きた（ふう）」

頑張ってお願ひしてもムリなような気がしてきた。

ルーファスピッチ？

ネットに絡まった状態でどうしろと？

そんなルーファスに再び不穏なピンチが近づいていた。

ローゼンクロイツが耳をそばだてる。

「地鳴りが聴こえるよ（ふあふあ）」

ゴゴゴゴゴゴゴオオオ……。

山を見上げると、雪煙をあげて雪崩が起きているのが見えた。困ったことにコツチに迫っている。

予想を超えた雪崩のスピードと身動きのできないルーファス。雪崩はすぐそこまで迫っていた。

ローゼンクロイツのエメラルドグリーンの瞳が輝き、五芒星

の光が宿った。

「ライラライラ、レッドフレア！（ふにふに）」

古代魔導ライラだが、詩が不完全でマナが集まらない。雪崩が早すぎて詩を詠むヒマがなかったのだ。

ローゼンクロイツの両手が放ったフレアが、雪崩を溶かしながら吹き飛ばす！

だが、雪崩の勢いが強い。

ローゼンクロイツがボソツと呟く。

「……ムリ（ふー）」

ムリです宣言！

「ぎゃあああつ！！」

ルーファスの叫び声。

その直後、白い煙がルーファスたちを丸呑みにしてしまったのだった。

白い視界の中でルーファスは目覚めた。

背中からゴソツと雪を落として、ルーファスは四つん這いになりながら立った。

「……死ぬかと思ったーっ！」

まさに危機一髪ルーファスは生きていた。

多少の雪には埋もれたが、どうやら本体の雪は背中の上を通り越して、もつと下まで落ちてしまったらしい。

足元を見ると、身体に巻かれていたはずのスパイダーネットが、足だけに巻きついていていた。雪の摩擦でずり落ちたのだろう。

しかも、運がいいことに、そのネットが岩に引っかかり、ルーファスとの身体を支えていた。

つまり、ネットが岩に引っかかり、雪崩の雪に巻き込まれずに、その場に留まることができたのだ。

結果、雪はルーファスの上を越えていった。

足からネットを取り、ルーファスは雪原に立った。

少しずつ雪が降りはじめていた。

辺りを見回しながらルーファスは冷や汗を凍らせた。

「……ローゼンクロイツ？」

が、いない！！

心細いなんてもんじゃない。

ルーファス独りじゃ死ぬしっ！！

「ローゼンクロイツ！！！」

返事はない。ルーファスは独りぼちのようだ。

見事に遭難？

「落ち着けルーファス」

自分の名前を呼んで客観的に自分を落ち着かせる。

「落ち着くんだルーファス、これは魔導学院の訓練なんだ。こんな状況は元々想定内で、この困難を乗り越えてゴールするのが趣旨のハズだ」

気を取り直してルーファスは拳を握った。

「（僕だって魔導学院に入学できたんだ。その学院の訓練くらいクリアしなきゃ）」

まずは状況確認だ。

Q 1 ここはどこだ？

「(どこかなんてわかるわけないじゃん)」

Q 2 仲間は近くにいますか？

「(ローゼンクロイツの姿も見当たらない。無事かなあ？)」

Q 3 装備は万全か？

「ぐあーっ！(カイロがない!?)」

Q 4 緊急用の黄色い卵は？

「ぐわーっ！(卵がない!?)」

絶望的だった。

カイロは貼ってある物のみ。卵は残りのカイロと落としたらしい。

ここでルーファスは後悔した。

「(六時間用……使っとけばよかった)」

貧乏性というかなんというか、そんなもののせいでルーファスは六時間用ではなく、三〇分用のカイロを使っていた。

そこそこ貼り替えてすぐのような気もするし、雪の中で長く気絶していた可能性もある。

少なくとも、まだカイロの効果は持続していた。

このカイロが切れたときは……死。

「ぎゃーっ、マジで!!」

黄色い卵もなく、助けは呼べない。

「ローゼンクロイツ!」

やっぱり返事はなかった。

ここからの行動ひとつひとつが、ルーファスの生死を左右す

るといつても過言ではない。

今の場所を動かずに救助を待つか？

それとも自ら誰かを探すか？

探すにしても、山に登るべきか下るべきか？

結果、ルーファスは考え込みその場に留まった。

「(カイロが切れたらどうしよう。なんとかして暖を取らなきゃ)」

今の時点でもっとも近い死因は凍死。しかし、火種を魔導で出すとしても、燃やすものがない。

次に可能性が高いのが餓死。食料なんて持ってきてない。狩りでもするか？

他の死因はどのようなものがあるだろうか？

とにかく迫り来る死を一つずつ回避しなくちゃいけない。

そして、死はすぐそこまで迫っていた。

立ち止まって考え事をするルーファスの前に、四つ足の影が姿を見せて吠えた。

銀色の長い毛に覆われたイヌ科の動物。グラーシユオオカミだった。

気付いたルーファスが逃げようと振り返ると、すでにそこには他のオオカミが……。二匹だけはない。数匹のオオカミに周りを囲まれていた。

オオカミは群で行動する動物だ。

一匹いたら何匹もいると思え！

まるでゴキブリかっ！

周りを囲まれたルーファスに逃げ場はない！

オオカミたちが一斉に襲い掛かってきた。

焦るルーファスは手を地面に向けた。

「エアプレッシャー！」

ルーファスが放った風が雪煙を起こし、オオカミたちから視界を奪う。

それでもオオカミたちは雪煙に飛び込んだ。

しかし、ルーファスはすでに上空に舞い上がっていた。

地面に圧縮された空気を叩き付け、身体を浮き上がらせて逃げたのだ。

が、引力の法則にしたがって、そのまま下に落ちる。下にはオオカミたちがいるではないか！

ドスン！

ルーファスの尻がオオカミの脳天にヒット！

オオカミ一匹をノックダウンさせた。

そのままルーファスは逃げる。

後ろからは怒ったオオカミが追ってくる。

雪山でのルーファスは明らかに不利だ。この山に棲んでいるグラッシュオオカミに敵うはずがない。

走って逃げるには限界が……コケたっ！

ルーファスがコケた。

その上をオオカミが跳び越して行った。コケて命拾いしたよ
うだ。

だが、コケているルーファスに二匹目が飛び掛かる。

ルーファスはすぐにうつ伏せから仰向けになり、両手にマナを集中させた。

「ごめんなさいエアプレッシャー！」

と叫んでルーファスの手から空気の塊が放たれた。

腹に圧縮空気を喰らったオオカミが宙を飛ぶ。

まだオオカミいる。

「本当にごめんなさいエアナックル！」

横殴りにされたルーファスの拳から風が撃たれる。

空気のパンチはオオカミの真横を掠り、外れた。

しまった顔をするルーファスにオオカミが飛び掛かる。横からも別のオオカミが襲い掛かってきていた。

他者を傷つける魔導などいくらでもある。けれどルーファスはそれを使うことに躊躇いを覚えた。

魔導師とは魔導の真理を追究するもの。

魔導士とは魔導を使い戦う者たちのこと。

ルーファスは戦うことを避けた。

「エアプレッシャー！」

地面に空気をぶつけてルーファスは宙に舞い上がった。

オオカミたちもバカではない。落ちてくるルーファスに備え構える。

「シルフウィンド！」

だが、ルーファスは落ちなかった。

風に乗る宙を走る。まるで風でサーフィンをしているようだ。けれど、この魔導を使いこなすのは、サーフィンよりも運動神

経やバランス感覚を必要とする。

もちろんルーファスは落ちる。

「ぐあーっ！」

下にはオオカミたちが待ち構えて……いない代わりにクレバスが大きな口を開けていた。

大きく開いた割れ目にルーファスはまっ逆さまに落下した。

「ぎゃーっ！」

ルーファスの叫びは深い割れ目の中に吸い込まれていった。

「へつくしょん！」

鼻水ブハーッでルーファスは大きなクシャミをした。

割れ目の底を歩いて数分、ついにカイ口が切れた。

急激に襲ってくる寒さにルーファスは凍えた。

左右は崖に挟まれたようで、登るにしても数十メートルある。

あの高さから落ちて命が助かったのは幸運だった。その代償は

左足骨折だ。

足を引きずりながらルーファスは先を急いだ。

歩いている方向に助けがあるとは限らない。それでも怪我を

した足では、なおさら上には登れない。そうなると前か後ろの

二択しかない。

まあ、最悪どつちに進んでも助からないかもね！

「……ねもい」

ルーファスは眠かった。

お約束の『寝たら死ぬぞ！』現象だ。

「(寝たまま死ねたら案外幸せかも……えへへ)」
もうルーファス寝る気満々。

眠い足取りでルーファスは壁に寄りかかった。その瞬間、回転扉がグルリン！

たまたま寄りかかった壁が回転扉になっていたのだ。

岩壁にカモフラージュされた扉の先は……真っ暗だった。

何も見えないくらい暗い。ただ、外に比べればだいぶ温かかった。

簡略魔導でルーファスは光の玉を出した。

一気に辺りが明るくなり、そこが通路だということがわかった。

人工的に作られた長方形の通路。壁は石造りで、規則正しく石が並べられている。

いったいこの先はどこに繋がっているのか？

ルーファスは先を進んだ。

しばらく進むと行き止まりに突き当たった。左右を見回すと、すぐにレバーを見つけ、ルーファスはレバーを引いた。

すると行き止まりだった壁が横に動き、眩い光が飛び込んできた。

天井で輝く煌びやかなシャンデリア。前方の床には赤絨毯の道がルーファスは出迎えた。

とてもだだっ広い部屋だ。

いったいここはどこなのか？

ルーファスはその部屋に足を踏み入れ、自分が出てきた場所

が、玉座を動いた裏であつたことを知る。

玉座の後ろにあつた隠し通路。そこからルーファスは出てきたのだ。

王の間といったところだろうか？

となると、ここは城の中ということになる。

「いったい誰の城なんだろう？」

城の中はとても静かだった。

まるで誰もいないように静まり返っている。もしかしたら廃墟かもしれない。とも考えられるが、天井のシャンデリアは輝いている。少なくとも城にはエネルギーが供給されていることになる。

「すみません、誰かいませんかー！」

虚しく声が木霊しただけだった。

寂しい気分になりながらルーファスは城の散策をはじめた。

外での死に直結する寒さ問題は、どうにか城の中に入り解決されたが、次の問題は食糧だった。

まだそんなにお腹はすいていないが、先のことを考えると今のうちに探したほうがいい。

それから暖を取る道具も探したほうがいいだろう。

外よりは寒くないといつても、暖房の効いてない冬場の廊下なみの寒さはある。これが夜になったら、かなりの寒さが予想される。一番寒い夜明け前は、凍死できるかもしれない。

毛布ならどこかにありそうだし、最悪布くらいならたくさんあるだろう。

そんなことよりも今は！

「誰かいませんかー！！」

かなり人恋しい。

温泉ツアーだと騙され、極寒の雪山でなにもしてないのにバツゲーム。他のクラスの実徒と争わないといけないし、雪崩には巻き込まれるし、仲間とはぐれて遭難するし、オオカミには襲われるし、右足骨折するし！

「食料あるといいなあ」

ないと餓死するし！！

救助を呼ぶ黄色い卵も落としたので、いつになったら助けが来るのかわからない。そもそも、助けに来てくれるのか？

とにかく頂上に行けてルーラーは聞いたが、タイムアップなんかは聞いてない。終了時間を言い忘れただけなのか、それもそんなの最初からなのか。後者だったら死ぬる。

ルーファスは知らないが、怪我人は出しても死者はまだ出ていない実習らしい。てゆか、死者が出た時点で翌年から中止だろう。

そーいえば、クラウドス魔導学院に入学する際、大量の契約書やらなんやらにサインしたような気がする。その中に学院内や実習中に起きた怪我に関して、一切の責任賠償に応じないというものがあつたような気がする。ただし、学院内や実習で怪我などをした場合、治療費を全額学院が出すとか、そんなのあつたようなないような？

つまり、それが意味することは、クラウドス魔導学院には怪我

が付き物ということだ。

死なない程度の怪我ならなんでもあり？

「(そういえば……センパイがこんな噂話してくれたなあ……行方不明者は死者にカウントされないって……あはは、笑えない)」

マジ笑えない。

このままルーファスが死と知れず死んでも、死亡者にはカウントされずに翌年もこの野外自習が行なわれることになる。

「なんてことあるわけないじゃんねー、噂だよねウワサ」

なんとしても生きて帰らなくちゃいけない。こんな場所での行方不明者にされてたまるもんか。

「すみません誰かいませんか！」

ルーファスの声に気合い入っていた。

でも、やっぱり返事はない。

王の間から奥へ進み、階段を上ると頑丈そうな扉がすぐに現れた。

扉には可愛い文字で『寝室だから入っちゃダメ』と書かれていた。王妃か王女の寝室だろうか？

どっちにしても、なんだかイタイ。

入るなと言われると、人間気になるもので、やっぱりルーファスも気になる。

入って中に誰もいなければ、女性の寝室に忍び込んだことがバレないし、中に人がいたらいたで万々歳だ。女王の寝込みを襲うとかそーゆーことでなくて、人がいたということにだ。

まあ、まだ夜でもないので寝てる可能性は低いが。

ドアノブに手をかけ、ちょっとノブを押したり引いたり捻ってみる。

「やっぱりね（鍵かかっているよね）」

でもダメ押しでガチャガチャっとノブを回すと。

「あつ……（開いた）」

カギがぶっ壊れて扉が開いた。しかも、ノブも外れて壊れてしまった。

しまった賠償請求される！！

焦ったルーファスはノブを無理やり差し込み、それ以上ドアには触れないことにした。次に触った人が壊した人作戦だ。

たぶん誰にも見られていないので、きつとこの作戦はせいこうるハズだ。

「あーっ！！」

突然、ルーファスは声をあげた。

部屋を中心に置かれた台座に、ガラスでできた柩が置かれていた。

寝室になぜに柩？

「（そついえばヴァンパイアは柩で寝るんだっけ？）」

しかも、ヴァンパイアは昼間寝るといふ。

そーっとガラスのフタを覗き込むと、やっぱり誰か寝てるし！

雪のように白い肌、神々しく輝く金の髪、唇は妖しいまでに艶っぽい。

しかも全裸だ！

ルーファス鼻血ブー！

この手の免疫がなかったりした。

一四歳にもなつてたかが女性の裸にノックダウンされるなんて……。

床に膝をつけながらルーファスは迷っていた。

せつかく見つけた人間型生物。

声をかけるべきか否か。

「(ヴァンパイアだったら嫌だけど、違ったら助けてくれるかもしれない)」

ルーファスは意を決した。

目を手で隠して、指の隙間から柩を見る。そして、柩を軽くノックした。

「すみません起きてくださいーい！」

返事はなかった。

もつと強くノックした。

「あの、起きてもらえませんか！」

それでも起きてもらえなかった。柩だけに、本当に死んでいるのかもしれない。だとしても、唇が生きているように艶っぽい。

もうこなつたら！

ルーファスは柩のフタに手を掛けた。

「……開かない……開いてよ！」

無理やり柩のフタが外され、辺りは一瞬して白い煙に包まれ

てしまった。

いったいこの煙は？

煙の中で焦るルーファス。

「なんか不味いことしちゃったあ?!」

慌てて伸ばした手が、なにかに触れた。

ふにふにするゼリーののような感触。

白い煙の中でルーファスは目を凝らした。

その手が触れていたのは女性の胸　じゃなくて、もっとズボツとめり込んでいた。胸を触っていることにはかわりないが、まるでゼリーに手をつ込んだように、手が埋没しているのだ。

「ぎゃー！（な、なんで手が!?!）」

すぐに手を抜こうとしたが抜けない。それどころかルーファスの手に流れ込んで来る強烈なマナ。

女性のマナがルーファスの手を通して流れ込んでくる。

突然、女性が蒼い眼をカツと見開いた。

そして、驚いた顔をしてルーファスの襟首に掴みかかった。

「貴様、なにをしておるのだ!?!」

貴方様の胸に手をつ込んでます。

「あ、あの、その手が抜けないんですけど……?」

「妾の寝込みを襲うとは許せんぞ!」

「ご、ごめんなさい。悪気があったわけじゃないんですけど、そのなんていうか」

不可抗力!!

「とにかく妾の胸から手を……手を……」

急に女性の顔から生気が失われはじめた。ルーファスに体内マナを吸われ、急激に衰弱しているのだ。

慌ててルーファスは手を抜こうと頑張った。

「ごめんなさい今抜きますから！」

力を込めるとズボツと手が抜けて、ルーファスは反動で尻餅をついた。

しかし、女性の衰弱は収まらない。

柩から這い降りた女性の下半身は、ドロドロに溶けはじめていた。

「妾のマナ……返して……もらうぞ！」

ルーファスに襲い掛かる 全裸の女性！

鼻血ブー！

ルーファスの鼻血が女性にかかり、ドロドロの身体に混ざり合ってしまった。

「妾の身体に……不純物が……（ダメだ……余計に力が出ん）」

女性はそのまま倒れこむようにルーファスと重なった。

そして、ブチュ〜とキツス！

ルーファスと女性の唇が重なった。

急激にルーファスの身体から体内マナが吸われていく。女性は口移してマナを取り戻そうとしているのだ。

しかし、女性は途中で口を離した。

「ダメだ……接吻だけでは完全ではない」

それでも多少は取り戻したようで、ドロドロだった身体は固形化していた。しかし、鋭く力の宿っていた瞳は、蒼から黒に色あせていた。

キスをされたルーファスは放心状態。

免疫ゼロ！

放心しているルーファスの頬を女性が引っぱたいた。

「おい、目を覚まさんか！」

「うっ！（クリティカル）。覚ましましたから、もう手とか構えないでください」

女性の手は二発目を構えていた。

「うむ、目を覚ましたならよかろう。さて、妾の裸を見た代金を払ってもらおうか、接吻はサービスだ」

「はあ？」

「ウソだ（ふふ……久しぶりに人をからかった）」

「あのお、とにかく服を着てもらえませんか？」

「ダメだ」

「はあ!？」

ルーファスの目はいろんなところを行ったり来たり。目のやり場に困る。なのに相手は服を着ることを拒否。

なぜ？

「貴様が妾から奪ったマナを取り戻すため、今からセックスをする」

「はあ？」

「聞こえんかったか？ 今から妾は貴様とセックス（ry）」

「あーあーあーあー！！ 聞こえましたからそれ以上は言わなくていいですから！」

「なら話は早い。ヤルぞ」

「ちよ、待った！」

明らかにルーファスは腰が引けていた。

全裸の女性は巨乳を揺らしてルーファスに近づいてくる。

「なにを待てと言うのだ？ 元はと言えば、貴様が妾の眠りを覚ましたのが悪いのだぞ？」

「あの、私たち知り合っただばかりですしー（そ、そんなボデイで迫られても困るし）」

「妾の名前はカーシャだ。以上自己紹介終わり。これでいいな？」

「よくないし！」

声を張って抵抗。

「ならば仕方ない。妾の名前はカーシャ、この城の主だ。過去の大戦で敗北し、この柩で静養していた。おそらく一〇〇年……いや、一〇〇〇年か、よくわからんが、貴様が妾の眠りを覚ますまで、妾は気持ちよく眠りに落ちていたのだ……わかる安眠を妨害された妾の気持ちか？」

「わかります、人に起こされると寝覚めが悪いですよー」

「ならば、ヤルぞ？」

「だ、だからそれは……」

「まさか……童貞か！（童貞……ふふっ）」

「そ、そーゆーことじゃなくて、知り合っただばかりの女性とそ

「ういう関係を持つのは、従順なガイア聖教の信者としては……
ダメかなあって」

「うるさい、とにかく妾のmanaを返してもらおうぞ」

「ちよちよちよ、やっぱりダメですってば！」

ルーファス逃亡。

なんかこうなったら逃げるしかない。

「こら待て！（妾じゃ不満か！ これでも肉体は人間でいうと
二〇代そこらだぞ！）」

「待てません！」

必死に逃げるルーファス。なんか肉食獣に言われる草食動物。
カーシャは体内manaを服に変化させて身に纏った。manaを有
形にする魔導はかなりの高等魔導だ。

逃げるルーファスは王の間改め女王の間までやって来て、赤
絨毯の上をダツシュした。その先に待ち受けている巨大な扉。

押して開こうとしたが開かない。引いて開こうとしたが、や
っぱり開かない。

「開けよ！」

ガン！

ルーファスは扉を蹴つ飛ばした。

「イッツアーツ！」

かなりの激痛がルーファスの足に走った。

骨折していた右足だ。

ここでルーファスは気付いた。

骨折していたハズの足が治ってる？

もしかしてカーシャのmanaを吸ったときに治ったのか？

だとすると、本当に相手のmanaをもらったことになるけど、返すに返せない。

今は逃げるしかない。

すぐそこまでカーシャが迫っていた。

「待たんか泥棒！」

「待てませんってば、エアプレッシャー！」

ルーファスの手から放たれた風の塊が扉を吹き飛ばした。

吹き飛ばしたルーファスは啞然。

いつもよりも術の威力が高い。

壊したドアから逃げようとしたルーファスは悪寒を感じた。

そのまま瞬時の判断で床に這いつくばった。

潰れたカエルのように地面に伏したルーファスの上を、巨大

なツララが飛んでいった。

「チツ……外したか（寝ている間に腕が鈍ったか）」

カーシャの放った攻撃魔導だった。

捕まえるというか、コロス気満々？

「私のこと殺す気ですか！！」

ビシッと立ち上がったルーファスにカーシャはアツサリと。

「そうだ。貴様が逃げるなら、殺して肉と血を喰らうだけだ」

「マジですかー！」

「ウソだ。ツララが刺されればとりあえず動けなくなるだろうと、なんとなく飛ばしてみた（死んだら死んだでそのときだな……）」

ふふ」

殺すのメインじゃなくて、ツララを刺して相手の動きを鈍らすのがメイン。

やるが大雑把すぎ！

カーシヤはハツとした。

「貴様人間か！ ならばあんなツララ刺さったら即死だな」

今さら気付くなよ！

「即死じゃすまないから！（絶対身体が吹っ飛ばし）」

「ならば小さいのなら平気だな」

カーシヤの手から放たれる標準サイズのツララ。

つて、そーゆー問題じゃないから！

刺さり所が悪かったらやつぱり即死だし！

連続して放たれるツララを避ける。

まずは。

「ワッ！」

の形をしてルーファスはツララをかわした。

「ワッ、イツ！」

次は『Y』の形でかわした。

「ギャ！」

この叫びじゃ避けられなかった。

見事にルーファスの魔導衣を抜けたツララ。けれど幸運なことに、ツララはわきの下の布が余った部分を抜けて行った。

「殺す気かー！！」

普段弱気のルーファスがマジでキレた。

「安心しろ、脚を狙ってる（寝起きでどこに飛ぶか知らんが

な」

安心できないし！

「脚でも当たったら痛いだらバカじゃないの！」

「妾を前にしてバカとなんだ！（親父にはバカって言われたことないのに！ 妾に親父はいないがな……ふふ）」

「バカだからバカって言っただけじゃないかバカ！」

「バカバカと、貴様は知らぬようだが妾はこの辺り一帯では恐れられていた氷の魔女王なのだぞ！」

「そんなの知らないよバーカ！」

「おのれ小僧！（あゝんなことやこゝんなことをして、コテンパンにしてくれる）」

急激にカーシャの周りにマナが集まりはじめた。それは目にも見えるマナフレアと呼ばれるエネルギーだった。

通常のマナはこの世の全てに宿っているとされるが、目で見ることはできず感じることでしかできない。けれど、マナの力が多く集まることよって、目に見えるまえの大きさになったものをマナフレアというのだ。

カーシャの周りに集まっていたのは蒼いマナフレアだった。

マナフレアの色によって、だいたいのマナ属性が判別できる。蒼いマナはおそらく水か氷系のマナだ。たぶん自称氷の魔女王と言っていたので、氷のマナだと思われる。

グラーシユ山脈は極寒の雪山。氷属性の魔導を使うにはもってこいだ。

集まるマナに合わせてカーシャが詩を唱える。

「ライラライラ、神々の母にして氷の女王ウラクアよ……」
「うはっ、ライラ!？」

ライラとは古代魔導の総称だ。

今ある魔導はライラから派生し簡略したものだ。それはレイラ・アイラ・マイラと分かれ、呪文の名を唱えれば簡単に使える。もつと簡略化されたものは、なにも唱えなくても使えるものもある。

が、派生した魔導はライラに比べて質が落ちる。つまり威力が落ちる。

ライラこそ真の魔導。別名を 神の詩 と呼ばれている。

しかも！

ライラは詩を詠めば読むほど、完全な詩を詠めばそれだけ威力が増す。

例えば『ライラライラ、(呪文の名前)！』よりも、『ライラライラ、なんとらんたら(呪文の名前)！』のほうが強い。

でも、そんな完全な詩を詠める者は、この世界に一握りしか残っていない。

そんな一人がルーファスの目の前にした。

「……魂をも凍れる息吹……」

まだカーシャは詩を謳っていた。

魔導マニアがいたらこの瞬間に大喜びだ。

でも、ルーファスは魔導マニアじゃなかった。

滅多に見れない魔導なんかよりも、命のほうに断然大事だ。

逃げるルーファス！

逃げたルーファス！

が、遅かった。

「ホワイトブレス！」

ホワイトブレスは簡略化されたレイラにもあるが、そんなもの比でもならない威力だった。

ハリケーンのように猛烈な吹雪がカーシャの両手から放たれる。

が、ここでカーシャがボソツと。

「……しまった（力が出ないせいで操りきれん）」

自ら放った魔導の圧力に押され、カーシャはバランスを崩した。

そして、手まで滑った。

グオオオオゴゴオオゴオツゴゴゴゴオツ！！

吹雪は天井を吹き飛ばし、上のフロアを突き抜けて空の彼方に消えた。

この日、どっかの観測台では、地上から天に昇る　シが観測されたらしい。

天井から崩れ落ちた細かい破片を浴びながら、ルーファスは腰が抜けて地面に這いつくばったままだった。

服を着たまま水に飛び込んだみたいに汗がぐつしより。

天井から吹き込む本物の吹雪が汗を掻いた身体を凍らす。

シャレにならない巨大な穴が天井には開いていた。開いていたというか、一〇メートル以上吹っ飛んでる。けっこう大きな

部屋だが、その部屋の天井のほとんどをふっ飛ばしていた。

カーシャが完全な力だったら、もしかして城ごと吹っ飛ばせるかもしれない。

そんなカーシャはまだまだヤル気満々だった。

「次は外さんから安心しろ」

ここでなんか言い返してやりたかったが、もうルーファスは顎まで外れてチビリそうだった。

起こしてはいけない魔女を起こしてしまった。

まあ、後悔先に立たずだけだね！

カーシャの周りに再びマナフレアが集まる。天井が抜けたことよって、さっきよりもマナが集まっているような気がする。

「ライラライラ……」

再び謳われる 神の詩。

ルーファスは逃げたかったが、逃げようにも腰まで抜けていた。

てゆーか、なんかもう逃げてても逃げ切れる自信がない。

てゆーか、捕まえる趣旨を忘れてませんかカーシャさー

ん！！

「ホワイトプレス！」

先ほどよりも強大な、地上にあるもの全てを凍らすような吹雪。

ここでカーシャがボソツと。

「やっぱりムリだ」

ならやるなよ！

アフォかッ！

抑えきれない圧力に耐えかね、根負けしたカーシャは床に向けてホワイトブレスを放った。

グアオオオオガガッゴゴゴオオオオオオン！！

巨大な邪龍が吼えるような雄叫び。

床は衝撃で大爆発して、城全体が大地震に見舞われたように揺れた。

砕けた壁や床が散乱して空から降り注ぐ、そして煙が辺りから視界を奪った。

揺れている最中、ルーファスはまったく動けなかった。目すら開けられなかった。

揺れはどうか治まったようだが、震えでルーファスの身体はまだブルブル揺れていた。

「……ワタシ生キテマスか？」

カタコトで自問。

城が大きく揺れた。揺れは治まったはずなのに、これはヤバイ兆しかもしれない。

ルーファスは立ち上がろうとしたが、足は床についていなかった。足の先からずーっと先まで床が消失していた。

また城が大きく揺れた。その反動でルーファスは開いた床に落ちてしまった。

最初のフロアを落ち、次のフロアも落ちて、地下室のフロアから、ないはずのそのまた下に落ちそうになった。

ここでルーファスはガシツと壁を掴んだ。

どうにか踏ん張って地下室のフロアに這い上がった。そこから下を覗くと、巨大な穴がずーっと下まで、黒い口を開いているではないか。

ホワイトプレスに当たっても死んでたし、ここから落ちてても死んでたし、どーにか生き延びたようだ。

辺りを見回したがカーシャの姿はなかった。

きつと自分の放った魔導に巻き込まれて……。

そのとき、何者かがルーファスの足首を掴んだ。

「ふふふっ……捕まえたぞ」

ルーファスの足を掴んでいたのは、床で半分以上溶けてしまっているカーシャだった。

具現化していた服はなくなり、下半身はもうすでになくなっていく。ルーファスの手を掴んでいる手も、すでにドロドロだった。

痛ましい姿を見てルーファスは心痛んだ。

でも、もしかして逃げるチャンス？

相手が弱っている今なら余裕に逃げられるかもしれない。

ルーファスの足首を掴んでいた手が完全に溶けた。

そんなカーシャを目の前にして、ルーファスが後ろを向いて逃げられるはずがなかった。

「ごめん……僕のせいだ……」

ルーファスはカーシャの上半身を抱きかかえ、自らカーシャの唇を重ねた。

濁流のように体内マナが流れ、受け取るカーシャは残った片

手でルーファスの背を強く抱いた。

かなり濃厚なキッスだった。

キスの最中でカーシヤは笑いはじめた、

「ふふふっ、力が戻ってくるぞ」

ルーファスの身体を突き放し、みなぎる体内マナを解放するカーシヤ。

その瞳は黒から蒼へ。

が、瞳の色は急速に色あせていった。

「やはりダメか」

カーシヤは壁にもたれ掛かり座り込んだ。

口付けだけでは、やはりダメなのだ。

ルーファスは心を決めていた。

「僕で良かったら……その、あのぉ……」

「もういい」

「えっ？」

あれれ、なんだか拒否されましたよ？

「もういい、妾の気が変わる前にさっさと立ち去れ」

「でも……それじゃあなたが……」

「うるさい、テクもない童貞に妾を満足させられると思ってるのか。気が変わる前に姿を消さんと、殺すぞ」

童貞かどうかは置いといて、殺されるのは困る。

腰が引けたルーファスは一歩下がって手を小さく振った。

「それじゃあ、さよならお元気で」

さっさと逃げようとしたルーファスの足が止まった。

このまま城の外に出たら死ぬし。

ここで死ななくても、寒くて死ぬし！

「あ、あのぉ〜」

「なんだ、消えんと殺すと言っただろう？」

「こんな状況で頼むのも悪いと思うんですけど、実は私遭難しちゃって。山の頂上に行けばみんなが待ってたりするんですよ〜」

「（……こいつアホだな）。城にワイプ装置がある。その一つが頂上付近に繋がっている」

「あの、その装置はどこに？」

「自分で探せたわけがっ！」

カーシャの手からツララか放たれ、ルーファスは紙一重で避けた。

「ご、ごめんなさい、自分で探します。すぐに消えますから〜！」

猛ダツシュでルーファスは逃げたのだった。

その後、ルーファスは城の中で小一時間ほど迷い、どこにか〜にかワイプ装置によって頂上付近に到着。

しかも、セイメイクラスでゴールできたのはルーファスだけという快挙。

さらに一日では絶対に頂上まで辿り着くことは正攻法では不可能。登頂最短時間を樹立というさらなる快挙。

しばらくの間、ルーファスは持てはやされたが、そんなメッキなんてすぐに剥がれたことは言うまでもない。

そんなこんなで魔導学院入学初の“遠足”は幕を閉じた。

が、そんな雪山での出来事なんて無理やり忘れていた日のこと。

いつものように魔導学院に登校して、いつものようにはじまりのベルが鳴った。

そして、何時ものように一時間目の講師が教室に入ってくるハズだった。

しかし、教室に入ってきたのは黒髪の妖艶な美女。

金髪ではなくなっているが、その顔にルーファスは見覚えがあった。

「カ、カカカカカーシャーン！」

「久しぶりだなお前。だかな母さんではなく、カーシャだ」
カーシャは妖しく微笑んだ。

切りたくても切れない腐れ縁がはじまった瞬間だった。